ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書XIV-4

1987

滋賀県教育委員会
財団法人滋賀県文化財保護協会

ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書XIV-4

I　近江八幡市蔵ノ町遺跡・久郷屋敷跡
II　同　　市高木遺跡
III　同　　市観音堂遺跡 他

1987

滋賀県教育委員会
財団法人滋賀県文化財保護協会

久郷屋敷跡全景(南から)

久郷1トレンチ全景

序

滋賀県教育委員会では、活力のある県民社会、生きがいのある生活を築くための一つとして、文化環境づくりにとりくんでいます。特に、文化財保護行政にたずさわるものとして、近年の社会変化に即応し県下の実情や将来あるべき姿を見定めつつ、文化財の保護と保存に努めております。

先人が残してくれた文化財は、現代を生きる我々のみならず子々孫々に至る貴重な宝でもあります。このような大切な文化遺産を破壊することなく、後世に引き継いでいくためには、広く県民の方々の文化財に対する深いご理解とご協力を得なければなりません。

ここに、昭和61年度に実施しました県営ほ場整備事業に係る発掘調査の結果を6分冊に分けて取りまとめましたので、ご高覧のうえ今後の埋蔵文化財保護のご理解に役立てていただければ幸いです。

最後に、発掘調査の円滑な実施にご理解とご協力を頂きました地元の方々、並びに関係機関に対して厚く感謝の意を表します。

昭和62年3月

滋賀県教育委員会
教育長 飯田志農夫

例　　言

1．本書は昭和61年度県営ほ場整備事業に伴う近江八幡市蛇ノ町遺跡・久郷屋敷跡、同市高木遺跡、同市観音堂遺跡他の発掘調査報告書で、昭和61年度に発掘調査し、整理したものである。

2．本調査は県農林部からの依頼により、滋賀県教育委員会を調査主体とし、㈱滋賀県文化財保護協会を調査機関として実施した。

3．本書で使用した方位は磁針方位に基づき、高さについては東京湾の平均海面を基準としている。

4．本事業の事務局は次のとおりである。

滋賀県教育委員会	文化財保護課長	服部　正
	課長補佐	田口宇一郎
	埋蔵文化財係長	林　博通
	〃　主任技師	葛野泰樹
	管理係主任主事	山本雄樹
財団法人滋賀県文化財保護協会	理事長	南　光雄
	事務局長	中畠良一
	埋蔵文化財課長	近藤　滋
	調査三係長	峯原保明
	〃　技師	仲川　靖
	総務課長	山下　弘
	〃　主事	松本暢弘
	〃　主事	泉　寛子
	〃　嘱託	中谷サカエ

5．本書の執筆・編集は調査担当者仲川靖が行った。

6．出土遺物や写真・図面については滋賀県教育委員会で保管している。

7．本文中における尺寸法は、曲尺の1尺＝30.3cmに相当する。

目　　次

Ⅰ　近江八幡市蔵ノ町遺跡・久郷屋敷跡

1．はじめに……1
2．位置と環境……1
3．調査経過……1
4．検出遺構……3
5．出土遺物……12
6．まとめ……16

Ⅱ　近江八幡市高木遺跡

1．はじめに……31
2．位置と環境……31
3．調査経過……31
4．検出遺構……31
5．出土遺物……34
6．まとめ……35

Ⅲ　近江八幡市観音堂遺跡他

1．はじめに……41
2．位置と環境……41
3．調査経過……41
4．検出遺構……44
5．出土遺物……51
6．まとめ……53

図 版 目 次

Ⅰ 近江八幡市蔵ノ町遺跡・久郷屋敷跡

図版 一 蔵ノ町遺跡・久郷屋敷跡（１トレンチ全景・３トレンチ全景）
図版 二 蔵ノ町遺跡・久郷屋敷跡（２トレンチ西側・２トレンチ東側）
図版 三 蔵ノ町遺跡・久郷屋敷跡（１トレンチ北側方形周溝墓・１トレンチ北側掘立柱建物群）
図版 四 蔵ノ町遺跡・久郷屋敷跡（１トレ中央掘立柱建物群・１トレ南側掘立柱（建物群）
図版 五 蔵ノ町遺跡・久郷屋敷（１トレ南側掘立柱建物群・１トレ中央掘立柱建物群）
図版 六 蔵ノ町遺跡・久郷屋敷跡（１トレＳＢＯ４柱穴内出土土器・２トレＳＫＯ２土器出土状況）
図版 七 蔵ノ町遺跡・久郷屋敷跡（１トレ出土遺物・黒色土器椀・瓦器椀）
図版 八 蔵ノ町遺跡・久郷屋敷跡（１トレ・２トレ・３トレ出土遺物・黒色土器椀）
図版 九 蔵ノ町遺跡・久郷屋敷跡（１トレ出土遺物・黒色土器・瓦器椀）
図版一〇 蔵ノ町遺跡・久郷屋敷跡（１トレ・２トレ出土遺物・土師器皿）
図版一一 蔵ノ町遺跡・久郷屋敷跡（１トレ・２トレ出土遺物・土師器皿・陶磁器・須恵器）
図版一二 蔵ノ町遺跡・久郷屋敷跡（１トレ・２トレ・３トレ出土遺物・古式土師器・弥生土器・石器）
図版一三 蔵ノ町遺跡・久郷屋敷跡（１トレンチ北側遺構実測図）
図版一四 蔵ノ町遺跡・久郷屋敷跡（１トレンチ南側遺構実測図）
図版一五 蔵ノ町遺跡・久郷屋敷跡（１トレンチ遺構実測図）
図版一六 蔵ノ町遺跡・久郷屋敷跡（２トレンチ遺構実測図）
図版一七 蔵ノ町遺跡・久郷屋敷跡（３－１トレンチ遺構実測図）
図版一八 蔵ノ町遺跡・久郷屋敷跡（３－２トレンチ遺構実測図）
図版一九 蔵ノ町遺跡・久郷屋敷跡（１トレンチＳＢ19・20遺構実測図）
図版二〇 蔵ノ町遺跡・久郷屋敷跡（２トレンチ竪穴住居・掘立柱建物遺構実測図）
図版二一 蔵ノ町遺跡・久郷屋敷跡（土器出土状況実測図）
図版二二 蔵ノ町遺跡・久郷屋敷跡（中世住居模式図）
図版二三 蔵ノ町遺跡・久郷屋敷跡（遺物実測図）
図版二四 蔵ノ町遺跡・久郷屋敷跡（遺物実測図）
図版二五 蔵ノ町遺跡・久郷屋敷跡（遺物実測図）
図版二六 蔵ノ町遺跡・久郷屋敷跡（遺物実測図）
図版二七 蔵ノ町遺跡・久郷屋敷跡（遺物実測図）

Ⅱ 近江八幡市高木遺跡

図版 一 高木遺跡（１トレンチ全景）
図版 二 高木遺跡（１トレンチ掘立柱建物・２トレンチ全景）
図版 三 高木遺跡（１トレンチＳＤＯ１土器出土状況・２トレンチＳＤＯ２土器出土状況）

図版　四　高木遺跡（遺物写真）
図版　五　高木遺跡（遺物写真）
図版　六　高木遺跡（遺構実測図）
図版　七　高木遺跡（遺物実測図）
図版　八　高木遺跡（遺物実測図）

Ⅲ　近江八幡市観音堂遺跡他

図版　一　観音堂遺跡（２－１トレ全景・２－１トレ・ＳＤ０１・ＳＡ０１）
図版　二　観音堂遺跡（１－２トレＳＥＯ１木器出土状況・２－１トレＳＤ０１土器出土状況）
図版　三　観音堂遺跡（８トレＳＨＯ２検出状況・８トレＳＫＯ２土器検出状況）
図版　四　観音堂遺跡（10トレ供養塚ＡＢ・ＢＣ間・10トレ供養塚ＣＢ・ＢＡ間）
図版　五　観音堂遺跡（10トレ供養塚ＥＦ間10トレ供養塚ＡＢ間土器・埴輪出土状況）
図版　六　観音堂遺跡（12トレ全景・12トレＳＢＯ２）
図版　七　観音堂遺跡（23－２トレ全景・23－１トレ全景）
図版　八　観音堂遺跡（24トレ東側全景・24トレ西側全景）
図版　九　観音堂遺跡（23－１トレＳＨＯ１・24トレＳＨＯ１）
図版一〇　観音堂遺跡（２－１トレＳＤＯ１出土遺物黒色土器椀）
図版一一　観音堂遺跡（２－１トレＳＤＯ１出土遺物・黒色土器椀・土師器皿）
図版一二　観音堂遺跡（２－１トレＳＤＯ１出土遺物・土師器皿・須恵器・常滑焼・軒丸瓦・12トレ包含層・須恵器）
図版一三　観音堂遺跡（12トレ包含層出土遺物・黒色土器・瓦器椀・土師器皿）
図版一四　観音堂遺跡（12トレ包含層・12トレＳＥＯ１・12トレ包含層下層出土遺物）
図版一五　観音堂遺跡（４トレ・24トレ・７－１トレ・10トレ・８トレ出土遺物）
図版一六　観音堂遺跡（23－１トレＳＨＯ１・23－２トレＳＫＯ２・10トレ供養塚出土遺物）
図版一七　観音堂遺跡（10トレ供養塚出土遺物）
図版一八　観音堂遺跡（10トレ供養塚出土遺物）
図版一九　観音堂遺跡（10トレ供養塚出土遺物）
図版二〇　観音堂遺跡（１－２トレＳＥＯ１出土遺物）
図版二一　観音堂遺跡（１トレンチ遺構実測図）
図版二二　観音堂遺跡（２－１トレ遺構実測図）
図版二三　観音堂遺跡（２－２トレ・19トレ遺構実測図）
図版二四　観音堂遺跡（４トレンチ遺構実測図）
図版二五　観音堂遺跡（５トレンチ遺構実測図）
図版二六　観音堂遺跡（７－１トレンチ遺構実測図）
図版二七　観音堂遺跡（８トレンチ遺構実測図）
図版二八　観音堂遺跡（１－１トレＳＫＯ１・８トレＳＨＯ１・０２遺構実測図）
図版二九　観音堂遺跡（10トレンチ遺構実測図）

図版三〇　観音堂遺跡（12トレンチ遺構実測図）
図版三一　観音堂遺跡（23－1トレンチ遺構実測図）
図版三二　観音堂遺跡（23－2トレンチ遺構実測図）
図版三三　観音堂遺跡（23－2トレンチ遺構実測図）
図版三四　観音堂遺跡（24トレンチ遺構実測図）
図版三五　観音堂遺跡（25・26トレンチ遺構実測図）
図版三六　観音堂遺跡（2－1トレンチＳＤＯ１出土遺物実測図）
図版三七　観音堂遺跡（8トレンチＳＫＯ２出土遺物実測図）
図版三八　観音堂遺跡（12トレンチ出土遺物実測図）
図版三九　観音堂遺跡（12トレンチ出土遺物実測図）
図版四〇　観音堂遺跡（遺物実測図）
図版四一　観音堂遺跡（遺物実測図）
図版四二　観音堂遺跡（10トレンチ供養塚出土遺物実測図）
図版四三　観音堂遺跡（10トレンチ供養塚出土遺物実測図）
図版四四　観音堂遺跡（10トレンチ供養塚出土遺物実測図）

挿図目次

Ⅰ　近江八幡市蔵ノ町遺跡・久郷屋敷跡

第1図　トレンチ位置図…… 2
第2図　蔵ノ町遺跡・久郷屋敷跡出土中世土器編年試案…… 15
第3図　遺構変遷図…… 17
第4図　新見荘地頭方政所指図…… 19

Ⅱ　近江八幡市高木遺跡

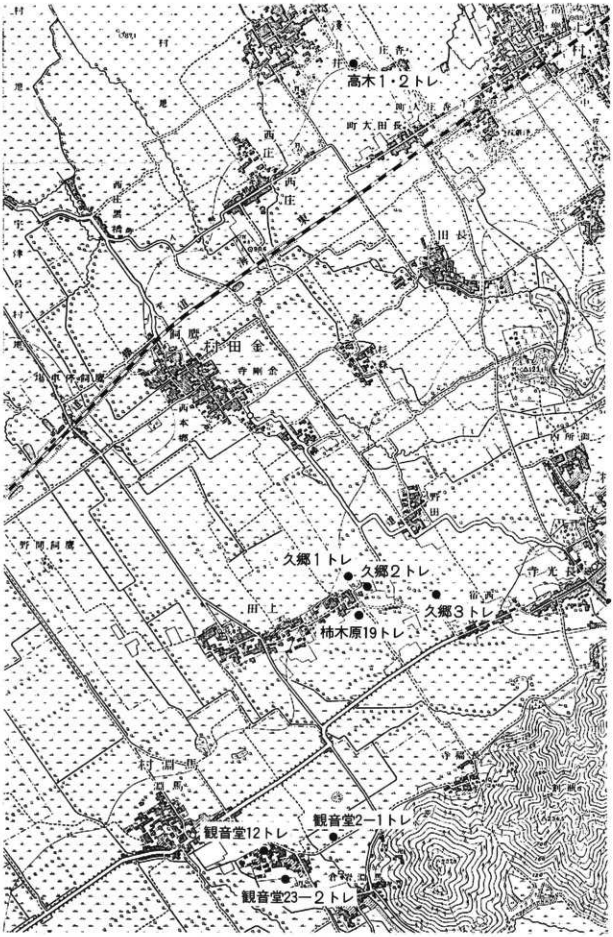
第1図　トレンチ位置図…… 32

Ⅲ　近江八幡市観音堂遺跡他

第1図　トレンチ位置図…… 42

近江八幡市南部遺跡分布地図　1/27,000

1　久郷遺跡(蔵ノ町遺跡)調査範囲
2　高木遺跡調査範囲
3　観音堂遺跡(御館前遺跡)調査範囲
4　住蓮坊古墳（県史跡）
5　供養塚古墳（　〃　）
6　岩塚古墳（　〃　）
7　トギス塚古墳（　〃　）
8　浅小井城跡
9　高木遺跡
10　黒橋遺跡
11　出町遺跡
12　里ノ内遺跡
13　三明遺跡
14　間野遺跡
15　金瀬遺跡
16　九里氏館遺跡
17　金剛寺城跡
18　金剛寺遺跡
19　後川遺跡
20　宮ノ後遺跡
21　大手前遺跡
22　西海道遺跡
23　蔵ノ町遺跡
24　寒蔵遺跡
25　川ノ口遺跡
26　久郷屋敷跡
27　柿木原遺跡
28　上田遺跡
29　柿ノ町遺跡
30　観音堂遺跡
31　勧学院遺跡
32　岩倉山北古墳群
33　町田遺跡
34　長光寺城跡（瓶割山城）
35　半田遺跡
36　上下遺跡
37　谷氏館跡



明治27年測量　遺跡周辺地図　1/25,000

Ⅰ　近江八幡市蔵ノ町遺跡・久郷屋敷跡

中世篠田荘における居館遺構

1．はじめに

本報告は、昭和61年度県営は場整備事業（近江八幡市武佐地区西宿第２工区）に伴う近江八幡市蔵ノ町遺跡・久郷屋敷跡（事業名・蔵ノ町遺跡）の発掘調査にかかるものである。

当遺跡は、上田町の東部に位置し、行政管轄は西宿町に属する。これまでに、近江八幡市立東中学校の建設に伴う市教委の発掘調査等で古墳時代から室町時代にかけての遺物の散布地として確認されており、「蔵ノ町遺跡」として遺跡分布図にある。[1]今回の調査地点は、東中学校の南で、小字名「桝原」・「久郷」・「久郷出」・「久郷前」・「丸池」と称する地である。このうち「久郷」・「久郷出」は遺跡分布図、および『滋賀県中世城郭分布調査４』[2]に「久郷遺跡」・「久郷屋敷」として示されており、中世上田庄の開創者である上田氏（江戸時代以降久郷氏に改姓）の館跡の推定地とされている。分布図等に示されている範囲は、現在の上田町にある浄土真宗本願寺派垢離山明光寺の場所が館の推定地となっているが、今回の検出遺構等が出土遺物からみて、時期的にも一致しており、「久郷屋敷」の東部に広がる関連遺構群とみなした。

2．位置と環境

当遺跡は、近江八幡市上田町から西宿町にかけて所在する。標高は概ね95.0～97.5mを測る。東海道新幹線、近江鉄道八日市一八幡線、東中学校の間に広がる微高地である。遺跡の所在する上田町一帯は、観音寺城[3]（蒲生群安土町）城主佐々木六角一族の鉄砲火薬に必要な硝石を作っていた職人が住んでいた所で、今でも５月初旬に篠田神社の古式花火奉納の形で伝統が維持されている。又、西宿町は、旧中仙道の宿場町として栄えた所である。

周辺は、近年宅地化とほ場整備事業が進み従来の環境は激変している。又、それに伴う発掘調査が増加し、歴史的環境の把握も進んでいる。遺跡の西南方２kmには千僧供遺跡群があり、弥生時代の集落跡である勧学院遺跡[4]、県下でも類例のない形象埴輪の出土で知られる供養塚古墳の他、住蓮坊古墳、岩塚古墳等の県指定史跡[5]や、白鳳期の寺院跡で知られる千僧供廃寺等[6]がある。また、西方２kmには、弥生時代の方形周溝墓をはじめ、古墳時代から中世にかけての遺構のある蛇塚遺跡[7]や、中世の馬淵城推定地[8]が知られる。南方は、当遺跡に関連するものとみられる柿木原遺跡[9]、半田遺跡があり、柿木原遺跡では、鎌倉時代の掘立柱建物等が検出されており、久郷遺跡の遺構群と同じ範囲に入るものとみられる。[10]国道８号線をはさんで、南には、柴田勝家が、陣を設けた瓶割山城[11]があり、中仙道と伊勢に抜ける員部街道の分岐点にあたる。近江鉄道をはさんで東方には、古墳時代から室町時代にかけての集落跡が予想される大手前遺跡、西海道遺跡がある。

3．調査経過

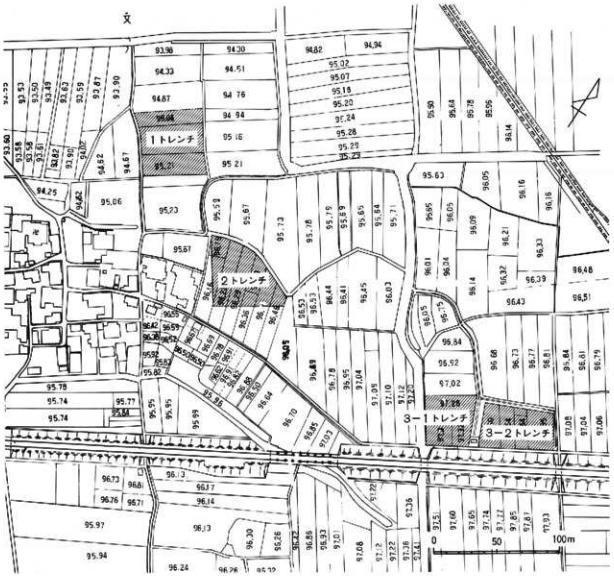
今年度の調査地点は、遺跡の東南部にあたり、調査は、排水路敷を中心に、切土箇所と合せて試掘トレンチを設け、遺構、遺物の有無を調べ遺跡の範囲を確認した。その結果、切土箇所３地区において遺構の遺存を認めたため順次機械力による表土除去、遺構検出を行い、人力による遺構面精査、掘削を行い、写真撮影、実測作業による記録化を図った。調査は、昭和61年４月11日より行い、８月13日に終了した。

各トレンチの状況は以下の通りである。

１トレンチは、（小字「桝原」と称される地で）久郷屋敷の北限と思われ、東中学校の南に位置する。遺構の遺存は極めて良好で、方形周溝墓２基、古墳時代の掘立柱建物跡２棟、鎌倉時代の掘立柱建物跡18棟、溝状遺構12条、土坑状遺構４基、井戸状遺構８基を検出した。

２トレンチは、小字「久郷」・「久郷出」と称される地であるが、削平が著しく、遺構の遺存は良くなかったが、古墳時代初頭の竪穴住居４棟、掘立柱建物３棟、土坑状遺構２基と古墳時代後期の溝状遺構１条と鎌倉時代の掘立柱建物１棟を検出した。

３トレンチは、遺跡の最東部に位置する。遺構は、溝状遺構、pit　等が多く検出されたが、遺物等で時代のおさえられる遺構は、溝状遺構６条、掘立柱建物２棟、井戸状遺構２基である。なお井戸状遺構は、出土遺物より近代のものである



第１図　トレンチ位置図

4．検 出 遺 構

1 トレンチ（図版一三・一四・一五）

基本層序は、第1層耕土、以下一部で黄色粘土の床土が残る以外は、耕土直下が遺構面である。遺構面は、東南隅で褐色砂礫層が広がる以外は、全面、マンガンを含む黄色粘性砂質土で、さらに1m下層は、グライ化した青灰色粘質土層である。遺構面は概ね標高95mを測る。ここでは、トレンチ北東部が遺構の全くない水田跡と思われる箇所と、トレンチ中央部の井戸状遺構を境に、南は、掘立柱建物を中心とする遺構、北中央部は、掘立柱建物と、その北に、溝状遺構が等間隔に並ぶ畠跡と思われる箇所、西、および北西部は、掘形が方形でやや大きい時期を異にする掘立柱建物と南にある掘立柱建物群と同時期の溝、および掘立柱建物、北西隅に方形周溝墓の周溝と概ね、3ブロックに分かれるような状況で遺構を検出した。

SG01

トレンチの北西部に位置する方形周溝墓と思われる遺構で、東南隅のみ遺存しており、西側に延びるが、後世の削平により、主体部および、周溝の西側大半は消滅している。溝幅 2.0m を測る。掘形埋土内より弥生時代後期末頃の甕が出土している。

SG02

ＳＧ０１の北に隣接する方形周溝墓で、一辺９ｍを測る。東辺、および、南北辺のそれぞれ半分を検出した。主体部は遺存していない。溝幅 1.5m、深さ 0.6m を測る、掘形断面はU字状を呈する。東南隅より手焙り型土器（99）が1個体出土している。時期は弥生時代後期頃とみられる。

SB01

トレンチ東南隅に位置する掘立柱建物で、東に延びる。東西２間以上、南北４間を測る建物で、柱間は、東西が、西から６尺、６尺５寸を測り、南北が、北から８尺、６尺５寸、６尺５寸、８尺を測る。柱穴は、径30cm前後の円形で、深さは、20～45cmである。柱穴の一部より、完形品の黒色土器椀が柱あたりの位置に納められるかのように出土している。時期は、13世紀終り頃と思われる。

SB02

ＳＢ０１の西に位置する掘立柱建物で、東西４間、南北３間の総柱の建物である。柱間距離は、柱穴の芯心で東西が６尺等間、南北が７尺等間を測る。柱穴は、径20～40cmの円形もしくは不定形で、深さは、25～50cmである。柱穴の一部より黒色土器椀、土師器皿が出土している。時期は13世紀終り頃と思われ、ＳＢ０１と同時期の倉庫と思われる。

SB03

ＳＢ０２と重復する建物で、東西４間、南北５間を測る南北棟の掘立柱建物である。柱通りは、北側２間分が総柱で、東西両端１間分は南北に柱が通り、中央南側３間分に空間がある構造で、母屋と考えられる（以後Ａ型住居と称する）。柱間距離は、東西の梁間が6尺等間、南北の桁行が７尺５寸等間を測る。柱穴は、径20～30cmの円形で、深さ25～50cmである。一部の柱穴が、ＳＢ０２の柱穴を切っており、ＳＢ０２より先行する建物である。

SB04

ＳＢ０３の西に重復する建物で、東西３間、南北３間を測る東西棟の掘立柱建物である。柱通りは、南側の１間分に東西に柱が通り北側２間分に空間をとる構造である（以後Ｂ型住居と称する）。柱間距離は、南北梁間が

7尺等間、東西の桁行が8尺等間を測る。柱穴は、径30～40cmで、深さ30～60cmを測る。建物の北東隅の柱穴底より、完形品の瓦器椀（15）と、黒色土器椀、土師器大皿（12. 13. 14）の破片が出土している（図版二三）。時期は、13世紀中頃と考えられる。

SB05

ＳＢ０４の南に重復する建物で、東西３間、南北３間を測る南北棟の掘立柱建物である。柱通りは、ＳＢ０４を反転させた形で、空間部が南側に位置するＢ型住居の構造である。柱間距離は、東西の梁間が、西側１間分のみ７尺で、あとは、７尺５寸等間、南北の桁行は、８尺５寸等間を測る。柱通りは、ややずれており、柱穴も30～40cmの不定形である。柱穴の深さは、20～45cmである。ＳＢ０４よりも先行するものとみられる。

SB06

ＳＢ０５の北西に位置する建物で、東西４間、南北４間のほぼ方形に近い掘立柱建物である。柱の配置は、中央２間分に空間部があり、周囲１間分を庇のように囲む構造である（以後Ｃ型住居と称する）。柱間距離は、東西が６尺５寸等間、南北が７尺等間を測る。柱穴は、径30～40cmの不定形で、深さは40～60cmを測る。建物の方位は、やや北へ振れる。

SB07

ＳＢ０６に重復する建物で、東西４間、南北５間を測る南北棟の掘立柱建物である。柱の配置は、Ａ型住居の構造であるが、ＳＢ０３と違い、北側の２間分のうち、西側に空間部がとられ、東側が総柱になっている点である。柱間距離は、東西の梁間が６尺５寸等間、南北の桁行が、北側から７尺、７尺、８尺、８尺、８尺５寸を測る。柱穴は、径30～40cmの円形もしくは不定形で、深さは、30～60cmを測る。また、この建物の南に９尺離れた位置に、柱通りを６尺５寸と、同一にする東西５間分の柱列があり、ＳＢ０７に関連する目隠しの塀や塀か、あるいは、建物の北辺の一部と考えられる。このうち、西から３番目の柱穴内より黒色土器椀（17）が１個体出土している。時期は13世紀終り頃とみられ、ＳＢ０１、０２と同時期とみられる。

SB08

ＳＢ０７、０６と重復する建物で、東西３間、南北３間の南北棟の掘立柱建物である。柱の配置は、ＳＢ０４、ＳＢ０５と同じＢ型住居で、東側に空間部をとる。柱間距離は、東西の梁間が、西から６尺、６尺５寸、６尺５寸で、南北の桁行が８尺等間である。西側の６尺分は流れ造りの屋根とも考えられる。柱穴は、径20～30cmで、深さは、20～40cmを測る。棟方向は、若干北へ振っており、時期は、ＳＢ０４と同じ頃とみられる。

SB09

畠跡の南に位置するＳＤ０１、ＳＤ０２に囲まれた建物で、東西４間、南北４間のほぼ方形の掘立柱建物である。柱の配置は、ＳＢ０６と同じ、Ｃ型住居であるが、規模は、ＳＢ０６よりやや大きい、柱間距離は、東西が７尺等間、南北が８尺等間を測る。柱穴は、径30～40cm、深さ30～50cmを測る。柱穴内からは、黒色土器椀、土師器皿等の完形品に近いものが出土している。時期は、13世紀中頃とみられ、ＳＢ０３、ＳＢ０５と同時期の建物とみられる。

SB10

ＳＢ０９と重復する建物で、東西３間、南北３間の南北棟の掘立柱建物である。柱の配置は、Ｂ型住居の形式であるが、東側１間分に、南北の柱通りを設けており、空間部が縮少され方形になっている。柱間距離は、東西の梁間が西から７尺５寸、７尺５寸、６尺５寸で、南北の桁行は、８尺等間である。東側の６尺５寸は流れ造りの屋根とも考えられる。柱穴は、径30～40cm、深さ30～40cmを測る。ＳＢ０９の柱穴を切るものがあり、これよ

り後に建てられたものである。ＳＢ０１、ＳＢ０２、ＳＢ０７と同時期とみられる。

ＳＢ１１

ＳＢ０９、ＳＢ１０と重復する位置にあり、東西３間、南北４間の総柱の掘立柱建物である。ただし、東側に７尺の１間分の張り出しが、南北両端にあり、東西４間、南北４間とも考えられる。柱間距離は、東西が、西より８尺、７尺５寸、７尺５寸で、南北が、７尺５寸等間である。柱通りは、あまり一定していない。柱穴は、径30～40cm、深さ30～40cmを測る円形もしくは不定形のものである。又、建物の南東隅の柱穴底より、完形品の瓦器椀と黒色土器椀片が、柱あたりの位置に納められていた。建物の北に位置するＳＤ０１は、ほぼ、北辺の柱通りと平行する点や、柱穴内出土の土器とＳＤ０１内出土の土器が同時期のものであることから、建物の北を区画する溝か、雨落ち溝と考えられる。建物の時期は、12世紀終り頃のものと考えられる。

ＳＢ１２

トレンチ北西部に位置する建物で、東西３間、南北２間の東西棟の掘立柱建物である。柱間距離は、東西の桁行が９尺等間、南北の梁間が８尺５寸等間である。柱穴は、径30～40cmの円形もしくは不定形で、深さは15～20cmを測る。時期は、ＳＢ１１と棟方向が一致しており、これと同時期と考えられる。

ＳＢ１３

トレンチ北西部のＳＤ０４の南に位置する。建物の北東隅が後世の攪乱により削平されており、全容は定かでないが、東西４間、南北３間のＢ型住居か、東西４間、南北４間のＣ型住居の構造をとる掘立柱建物と考えられる。柱間距離は、Ｂ型住居の場合、東西が西から６尺５寸、７尺、７尺、６尺５寸で、南北が北から９尺、８尺、８尺を測る。Ｃ型住居の場合、東西は同一で、南北が北から９尺、６尺５寸、６尺５寸、９尺を測る。ただ中央２間分の柱通りにやや歪がある。柱穴は、径40～50cmの円形もしくは不定形で、深さ30～40cmを測る。時期は、ＳＢ０３、０５、０９の建物群の時期からＳＢ０４、０８の建物群の時期にまたがるものと考えられる。

ＳＢ１４

ＳＢ１３の南に重復する位置にある。西に広がる可能性があり、東西３間、南北３間のＳＢ１０と同様の構造であるＢ型住居と考えられる。柱間距離は、東西が７尺等間、南北が、北より８尺、７尺、７尺を測る。柱穴は、径20～30cm、深さ20～30cmの円形もしくは不定形である。ＳＤ０３に平行しており、ＳＢ０１、０２、０７、１０と同時期と考えられる。

ＳＢ１５

ＳＢ１１の東北隅に位置する１間四方の小屋と考えられる。東西８尺、南北７尺５寸を測る。柱穴は、径20～30cm、深さ20～30cmの円形である。ＳＢ１１の東に付属する施設とも考えられる。

ＳＢ１６

ＳＢ０９～１１とＳＢ０６～０８の間に位置する、東西３間、南北１間の建物であるが、北東隅の柱穴が不明で、ＳＢ１１に通じる門の可能性もある。

ＳＢ１７

ＳＢ０７の南に位置する柱列で、ＳＢ０７に関連するものか、あるいは、南に建物として広がる可能性がある。試掘により確認をしてみたが、不明であった。

ＳＢ１８

ＳＢ０１の南に位置する建物で、東西２間以上、南北１間以上の規模のものと思われる。

ＳＤ０１

ＳＢ１１の北辺に位置する東西溝で、幅 0.6～ 1.0m を測る。深さは10～20cmで、西端でＳＤ０２、０３の南北溝と連絡する。東端は、切れており、溝の方向と一致すること等からＳＢ１１に関連する溝である。東端より黒色土器椀（42）、土師器皿（38、39、40、41）が底より出土しており、溝の時代は、12世紀初頭と考えられる。この後、溝は埋没し13世紀中頃には、ＳＢ０９、１０の建物の柱穴が掘られている。

ＳＤ０２

ＳＤ０１の西端で、南に折れる南北溝で、幅約１m を測る。深さは10～20cmで、ＳＢ２０の北東隅の柱穴を切る。溝の方位が、ＳＤ０１と直交しないことや、ＳＢ１１の西辺と平行していないこと、むしろＳＢ０９、１０と同方位である点より、ＳＢ０９、１０を画する溝と考えられるが、不明である。ただ、南端で、東へ曲がっており、この東西溝がＳＢ１１の南辺とほぼ平行である点より、ＳＤ０１と連絡し、逆コの字状にＳＢ１１を囲む溝であった可能性もある。

ＳＤ０３

ＳＤ０１の西端を境にして、ＳＤ０２の延長上にある南北溝で、幅30～90cm、深さ10～20cm を測る。南北両端には、ＳＥ０７、ＳＥ０８の共に径80cm、深さ50～60cmの井戸状遺構があり、溝内の水を集める溜桝のような施設と考えられる。

ＳＤ０４

ＳＢ１３の北辺に位置し、平行して流れる東西溝で、ＳＤ０３同様、径80cm、深さ60cmの井戸状遺構（ＳＥ０６）をもつ、溝の幅は、 0.6～１m 、深さ20cm を測る。

ＳＤ０５

トレンチ北の畠跡の東側に位置する南北溝で、幅１m 、深さ10～20cm を測る。南端はＳＤ０１の東端の延長上にある。畠の東を画する溝と考えられる。

ＳＤ０６

ＳＤ０５の位置より約３m 東に平行して流れる南北溝で、溝幅90cm～１m 、深さ10～20cm を測る。南端は、ＳＥ０１と連絡しておりＳＥ０１に水が流れ込む形をとる。水田跡の西に位置し、水口を画する溝と考えられる。また、ＳＤ０５との間は、通路と考えられ、ＳＢ０９～１１における一連の建物に通じる道と思われる。

ＳＤ０７

ＳＢ０６～０８の建物の東辺に位置する、南北溝で、溝幅１～２m 、深さ10～20cm を測る。北側は、いずれも、建物の北辺延長上より始まっており、３棟の建物を、それぞれの時期において画した溝と考えられる。溝内、埋土中より多量の土師器皿を始めとする土器と銅銭（文字判読不能）が１枚出土している。

ＳＤ０８

ＳＢ０６～０８の建物の西に位置するＬ字型の溝で、溝幅１m 、深さ10～20cm を測る。ＳＢ０６に伴うものと思われるが、機能的なものは不明である。

ＳＤ０９

ＳＤ０７の北より、東側へ延びる東西溝で溝幅50cm～１m 、深さ10～20cm を測る。ＳＢ０１～０３の建物は、溝をまたぐ状態であるため、この時期には、存在し得ないと考えられる。

ＳＤ１０

トレンチ南西隅から逆Ｌ字状に曲がり北へ延びる溝で、溝幅30cm、深さ10cm を測る。ＳＤ１０を境にして西側は、遺構の存在しない水田跡と考えられる所で、この水口と建物群とを画する溝と考えられる。

ＳＤ１１

ＳＤ１０の東西溝と平行して約２ｍ南に流れる東西溝で、溝幅30cm、深さ10cmを測る。時期は、ＳＤ１０と同時期のもので、ＳＤ１０との間は、東に広がる建物群への通路と考えられる。

ＳＤ１２

ＳＤ１０の南北溝と平行して、東へ約２ｍの位置にある南北溝で、溝幅、60cm～１ｍ、深さ10～20cmを測る。建物の西を画する溝と考えられるが、機能的には不明である。

ＳＫ０１

ＳＢ０７の北西に隣接する隅丸方形の土坑状遺構で、 1.2m × 1.5m の規模で、深さ60cm前後を測る。埋土は上層より茶褐色粘性砂質土、黒灰色粘質土の順に堆積している。遺物は土師器皿、黒色土器椀等が出土した。

ＳＫ０２

ＳＫ０１の東に隣接する隅丸方形の土坑状遺構で、 1.0m × 1.5m の規模で、深さ60cm前後を測る。埋土はＳＫ０１と同じである。ＳＢ０６の柱穴が切っており、ＳＢ０６の建物より先行する時期のものである。

ＳＫ０３

ＳＢ０３の東南隅内部に位置し、ＳＢ０３の柱穴が切り込む。一辺 1.0～ 1.5m の台形状の不定形土坑で、深さ20cmほどの底が舟底形を呈する浅いものである。埋土は茶褐色粘性砂質土のみである。底部に網代状に綺んだ箕と思われる遺物が出土したが、時期は不明である。

ＳＫ０４

ＳＢ１３の北側内部に位置する 1.0m × 2.0m の隅丸長方形を呈し、深さ15cmを測る土壙状遺構で、底は舟底形を呈する。埋土は、上層より暗灰色砂質土（炭、灰を含む）、茶褐色粘性砂質土である。遺物は破片のみで、時期は不明である。

ＳＥ０１

トレンチ中央部に位置する径 4.5m、深さ80cmを測る井戸状遺構で、底は、ほぼ水平である。埋土は、上層より茶褐色粘性砂質土、黒茶色粘性砂質土、黒灰色粘質土、暗灰色粘質土の順に堆積している。遺物は、主に第２層、第３層より完形品に近いものが出土している。埋土の堆積状況より、井戸というよりは、貯水用の溜と思われる。

ＳＥ０２

ＳＢ０５内の西端に位置する井戸状遺構で、径 1.3m、深さ80cmを測る。井戸枠等は遺存していない。埋土は、上層より茶褐色粘性砂質土、黒灰色粘質土で、遺物は、第２層より完形品に近いものが出土している。ＳＢ０４、ＳＢ０５に付属するものかは不明である。

ＳＥ０３

ＳＥ０２の南に隣接する径60cm、深さ50cmの井戸状遺構で、２段掘りになっている。上段で、曲物の井戸枠の朽た残片が遺存しており井戸と考えられる。埋土は、上層より茶褐色粘性砂質土、黒灰色粘質土の順に堆積している。下段の枠は遺存していない。建物に付属するものかは不明である。遺物の出土はみられなかった。

ＳＥ０４

ＳＢ０２内に位置する径80cm、深さ40cmの井戸状遺構である。井戸枠等は遺存していない。埋土は、茶褐色粘性砂質土、黒灰色粘質土の順に堆積している。遺物の出土はみられなかった。

ＳＥ０５

ＳＢ１２の北側、ＳＢ１３の東側に位置する井戸状遺構で、径 2.0m 、深さ80cmを測る。埋土は、上層より茶褐色粘性砂質土、黒灰色粘質土、木炭層で、底に厚さ10cmの幅で、３～５cm大の木炭片がぎっしり堆積していた。井戸枠等は遺存していない。

ＳＥ０６

ＳＤ０４内に位置する径 1.0m 、深さ30cmの井戸状遺構であるが、井戸ではなく、ＳＤ０４内の水を集める溜と考えられる。埋土は茶褐色粘性砂質土のみで、遺構内より完形品を含めて計７点の黒色土器椀（図版二四－44～50）が出土した。埋没時期は13世紀後半頃と考えられる。

ＳＥ０７

ＳＤ０３の北端に位置する径80cm、深さ30cmの井戸状遺構であるが、ＳＥ０６と同じくＳＤ０３の水を集める溜と考えられる。遺物の出土はみられなかった。埋土は茶褐色粘性砂質土のみである。

ＳＥ０８

ＳＤ０３の南端、ＳＤ０１とＳＤ０２の交点の北端に位置し、３本の溝を流れる水を集める溜と考えられる。径 1.0m 、深さ40cmを測る。遺物の出土はみられなかった。埋土は茶褐色粘性砂質土のみである。

２ トレンチ （図版一六）

基本層序は、第１層耕土、以下赤褐色粘性砂質土層で、表土の10～15cm下層で遺構面にあたり、削平が著しい。遺構は、古墳時代の前期初頭に位置づけられる竪穴住居４棟、掘立柱建物３棟、土坑２基、古墳時代後期終末の溝状遺構１条、鎌倉時代初頭の掘立柱建物１棟、溝状遺構２条を検出した。トレンチの西南部は、鎌倉時代の溝状遺構を境に落ち込み状の池となっている。

ＳＨ０１

東西 5.0m 、南北 4.6m を測るほぼ正方形の竪穴住居で、深さ約10cm程遺存している。床面積は23㎡を測る。柱穴は、４基の主柱穴からなり、径30～40cm、深さ30cmを測る。柱間距離は、東西南北ともに 2.4m である。周壁溝が南側中央で途切れており入口と考えられる。床面中央部に焼土痕があり、炉の跡とみられる。埋土は黒褐色粘性砂質土１層のみで、古式土師器片を多量に包含する。

ＳＨ０２

ＳＨ０１の南に位置し、南北４ｍ、東西 4.5m のやや東西に長い方形プランの竪穴住居で、床面積18㎡を測る。深さはＳＨ０１と同様10cmで遺存は良くない。住穴は、主柱穴を四隅に配し、中央よりやや西側よりに間仕切りの柱穴を南北に配している。柱穴径は、主柱穴が径40～50cm、深さ30cmを測り、間仕切りの柱穴が径20cmを深さ20cmを測る。柱間距離は、主柱穴間が、南北が３ｍ、東西が 3.5m を測る。間仕切りの柱穴と西側主柱穴間が、各々 1.5m を測る。床面に貼り床等はなく、中央に焼土痕があることより炉を屋内に設けている。埋土はＳＨ０１と同様で古式土師器片を包含していた。

ＳＨ０３

ＳＨ０２の東南に位置する。壁はなく、堅くしまった床面のみが遺存しており、貼り床の竪穴住居である。規模は床面のみから推定して 3.5m 以上と一辺からなる方形プランの住居である。柱穴は主柱穴が四隅にあり、径20～30cm、深さ15～20cmを測る。柱間距離は、東西が 2.5m 、南北が３ｍである。炉、壁溝等は不明である。

ＳＨ０４

ＳＨ０２の東に位置し、ＳＨ０１、０２の群よりやや隔てた所に位置する。周溝が外側と内側にあり、それぞ

れ異なる主柱穴があることより、建物は2時期にわたり、建て替えを行ったものとみられる。規模は、当初のものが、4m四方の方形の竪穴住居で、上柱穴間が、それぞれ1.5m、柱穴径が、20cm、深さ20cmを測るもので、床面積16㎡を測る。2期目が、4.5m四方の方形の竪穴住居で、主柱穴間が、南北2m、東西2.5m、柱穴径が20～30cm、深さ20cmを測るもので、床面積は24.75㎡を測る。両者とも同じ位置に中央炉をもつ。

SB01

東側柱がSH01を切る掘立柱建物で、南北の梁間4間、東西の桁行5間を測る東西棟の建物で、棟方向は、ほぼ東西をとる。柱の配置は、A型住居の構造であるが、1トレンチ検出の建物と異なる点は、中央2間分の東西筋に1本も柱が立たない点である。柱間距離は、南北の梁間が6尺5寸等間、東西の桁行が東端1間が6尺5すあとは7尺等間である。柱穴は、径20cm前後の円形もしくは不定形で、深さは30～50cmを測る。西南隅柱穴より東へ2番目の柱穴底より完形品の土師器皿が出土している。建物の時期は、柱穴出土遺物より12世紀中頃とみられる。

SB02

SH04の北に位置する2間四方の掘立柱建物である。柱穴は、径20～30cm、深さ20cm前後を測る。柱間距離は1.80m等間である。

SB03

SH04を切る2間四方の掘立柱建物で、床面積は、ほぼSH04と同規模である。柱穴は径20cm、深さ20cm前後を測る。柱間距離は2m等間である。

SB04

SB03の東に隣接する2間四方の総柱の掘立柱建物で、規模はSB02と同じ床面積である。柱穴は径20cm、深さ15～20cmを測る。柱間距離は1.8m等間である。

SK01

SB01の西南隅に位置する径80cm、深さ60cmの土坑で、埋土は黒褐色粘性砂質土である。埋土上層に小型丸底壺1個体と、底に高杯の破片、壺底部片、炭があった。時期は古墳時代初頭で、竪穴住居に関連するものである。

SK02

SD03に切られる1.2m四方の方形土坑で、南側の池状落ち込みの肩部にある。深さは30cmで、埋土は黒褐色粘性砂質土である。埋土中に多量の古墳時代初頭に位置づけられる古式土師器を包含する。土器はいずれも破片ばかりである。

SD01

ほぼ東西に流れる溝で、溝幅50～60cm、深さ20～30cmを測る。埋土は、灰茶褐色粘性砂質土で、鎌倉時代の遺物を包含する。SB01を画する溝と考えられる。

SD03・04

平行する東西溝で、各々溝幅40～60cm、深さ20cmを測る。埋土はSD01と同様であるが、遺物は少ない。SD01と同時期の溝と考えられる。

SD05

N－35°－E方向に流れる南北溝で、トレンチ東から南に縦断する。溝幅1.2m、深さ40～60cmを測る。埋土は黒茶色粘性砂質土で、溝の底より7世紀頃の須恵器の杯身2点、蓋1点と土師器甕の破片が出土している。

3 トレンチ （図版一七・一八）

トレンチ中央のポンプ小屋を境に西側を3－1トレンチ、東側を3－2トレンチとした。基本層序は、第1層耕土、以下茶褐色粘性砂質土、黒色砂質土で、表土の30～80cm下層で遺構面にあたる。遺構面は、3－1トレンチが西側が黒茶色粘性砂質土、中央よりが砂礫層で、砂礫層中に黒色砂質土が堆積する状況である。3－2トレンチは、北側半分が黒茶色砂質土、南側が、非常に堅くしまった黒茶色砂礫土層である。標高は概ね97.3～97.8mを測る。遺構面は、かなり削平されており、後世桑畑になったことより、3－1トレンチでは、至る所に株を掘り起こした掘り込みがみられた。

3－1トレンチは、小字名「丸池」、3－2トレンチは、小字名「喜次郎田」と称されている。

遺構は、古墳時代頃のものと思われる竪穴住居跡の1部が6棟検出されたが、いずれも主柱穴が不明で疑しい。ただ、中央に炉の跡と思われる焼土があり、竪穴住居とみなした。他に、多数の柱穴が検出されたが、建物として復元できたのは、2棟のみである。溝状遺構は7条検出したが、ＳＤ０４、０５以外は、遺物の出土がなく時期は不明である。

3－1トレンチ （図版一七）

ＳＨ０１

一辺9m四方の竪穴住居とみられるが、不明である。トレンチ壁沿いに焼土がありかの跡かと考えられる。

ＳＨ０２

一辺 6.5m 四方の竪穴住居とみられるが不明である。主柱穴等は不明である。

ＳＨ０３

一辺9m四方の竪穴住居とみられるが、疑しい。主柱穴、炉等は不明である。

ＳＤ０１

ほぼ南北方向に流れる幅 1.2～ 1.6m、深さ50～60cmの溝である。埋土は、茶褐色砂質土で、遺物等の出土はなかった。

ＳＤ０２

南西方向から北東方向へ流れる幅 1.0～ 1.2m、深さ40～50cmの溝である。埋土は灰茶褐色砂質土で、遺物等の出土はない。ＳＤ０１に切られる。

ＳＤ０３

トレンチ北東隅を南東方向から北西方向に流れる溝で、幅 1.0m、深さ30cmを測る。埋土は黒色砂質土である。ＳＤ０２に切られている。遺物等の出土はない。

ＳＥ０１

掘り形が楕円形を呈し、井戸枠部分が一辺 1.5m×2mの長方形を呈する井戸で、深さ約2mを測る。上段は、石積みで、下段に四隅に柱を置き、横木を組み、外枠を丸竹で囲んでいる井戸で、底には、箱状の枠をさらに設けている。埋土中より、横櫛、斎串、ランプのホヤが出土した。井戸は、中央に節を抜いた丸竹が指し込まれており、祭祀の後、埋戻している。ランプのホヤが出土していることより明治以降の新しい井戸である。

3－2トレンチ （図版一八）

ＳＨ０４．０５．０６

中央部にいずれも焼土があり、竪穴住居とみられるが、主柱穴、壁面等が不明で、疑しい。埋土は黒色砂質土である。

ＳＢ０１

トレンチ南西隅に位置する掘立柱建物で、Ｎ－30°－Ｗの方向をとる南北４間、東西５間を測る東西棟の建物に、東側１間の付属屋がつく。柱の配置は、基本的には、Ａ型住居であるが、西側寄りに２間分づつの空間部を設けており、中央に柱が１つ入る。東側１間分は、柱がすべて通る。東端１間分の付属屋には、南側２間分が、ＳＫ０１が占め、北側２間分が空間になっている柱間距離は、南北が６尺５寸等間、東西が、東端１間分の付属屋が10尺、あと５間分は、７尺等間である。柱穴は、径20cm前後の円形で、深さ20～25cmを測る。

ＳＢ０２

ＳＢ０１の西南に隣接する掘立柱建物で、東西３間、南北３間以上を測る南北棟の建物である。柱の配置は、１トレンチＳＢ０１と同じ構造で、Ｂ型住居に属する。柱間距離は、東西が６尺５寸等間、南北が７尺等間である。柱穴は、径20cm前後の円形で、深さ20cmを測る。建物の方向はＳＢ０１と同一である。

ＳＫ０１

２ｍ×３ｍの長方形を呈する土坑状遺構で、深さ10～15cmを測る。底はほぼ水平で、全面に黄色粘土のしっくい状のものを粘りつめる。ＳＢ０１に伴う「馬屋床」と考えられる。

ＳＤ０４

ＳＢ０１、０２の建物を囲む溝と考えられる。北辺と東辺を検出した。東辺は建物の方向よりやや北へ振れる。北辺は、建物の方向とほぼ同一である。溝幅は、１.０～１.５m、深さ50～80cmを測る。埋土は茶褐色砂質土のみで、東辺の中央で、黒色土器椀（図版二六－104～108）の他、土師器羽釜が出土した。

ＳＤ０５

ＳＤ０４の東辺と平行する溝で、幅１.０m深さ50～70cmを測る。埋土は茶褐色砂質土のみである。遺物の出土はみられなかった。ＳＤ０４との間隔は２.５mである。北端はＳＤ０４の北辺に接続する。

ＳＤ０６

ＳＤ０３よりやや北へ振る幅50～80cm、深さ20cm前後の溝で、埋土は、ＳＤ０３同様黒色砂質土である。遺物の出土はない。

ＳＤ０７

ＳＤ０６と平行する60～80cm、深さ20cm前後の溝で、埋土は黒色砂質土である。遺物の出土はない。

ＳＥ０２

西に張り出しをもつ方形の掘形をもつ井戸で、枠は、径１.０mの上段石積、下段四隅横桟止め縦板井戸で、深さ約２.５mを測る。石積は、人頭大の自然石をていねいに積んでおり、下段の四隅の支柱と横桟にのせて積み上げている。下段の縦板は、径10～15cmの丸太を半切もしくは４ツ割にしたものを無造作に立てたもので、上下２段の横桟で止めてあるだけの簡単な作りである。井戸底より、染付茶椀（伊万里焼）、鎌、瓦片が出土した。井戸の構造は、３－１トレンチＳＥ０１と同じで、近代のものである。

ＳＥ０３

ＳＥ０２の北に隣接する１.２×２.５mの長方形の掘形に径１.２mの井戸枠をもつ井戸で、枠組等は遺存していない。

5．出　土　遺　物

（1）　旧石器時代～古墳時代

1トレンチの帯跡の溝内埋土より有舌尖頭器が1点出土している（図版二七－126）。ほぼ完形品で長さ7㎝を測る。材質は緑色系のチャートと思われる。技法的には押圧剥離により両面を加工したあと刃部に鋸歯状剥離を施す。断面形はレンズ状を呈する。形態は柳葉形であるが、基部は短かい。同様のものは八日市市芝原町玉緒遺跡、同市池ノ谷遺跡、庚申溜遺跡で検出されている。旧石器時代最終末期、約12000年前の物と考えられる。

縄文時代の遺物は、3－1トレンチSH03周辺の黒色砂質土よりサイドスクレイパー（石さじ）が1点完形品で出土している（図版二七－127）、長さ9.5㎝を測る。材質はサヌカイトで押圧剥離により両面を加工し、片側のみ刃を刻んでいる。

弥生時代の遺物は、1トレンチSG02の周溝内より手あぶり型土器が1個体出土した。（図版二五－99）。受口状口縁を呈する扁平な鉢に半球形の覆部をつけ、鉢部中位に一条の突帯をめぐらし刻み目を施している。弥生時代後期に位置づけられる。

古墳時代前期のものでは、2トレンチのSK01、02よりまとまった資料が出土している。SK01からは小型丸底壺、高杯が、SK02からは甕、高杯が出土している。甕は口縁端部内面が肥厚する布留式土器である。（図版二七－122～124）。3トレンチからは、大型の高杯が1点出土しており、内外面ともていねいなヘラ磨きを施し、頸部に2帯のクシによる直線文を施し、円孔を3箇所にうがっている（図版二七－125）。

古墳時代後期のものは、2トレンチのSD05内より須恵器杯身2点、杯もしくは蓋と思われるもの1点、長胴甕と思われる口縁の破片1点出土している（116～118）。

（2）鎌倉時代以降

1トレンチより良好な資料が出土した。

図版二三の1～6は、SB01の各柱穴内出土のものである。1～5は土師器皿で、口径 8.2～ 9.0㎝、器高 1.4～ 1.5㎝を測るものである。口縁部がやや内弯ぎみに外上方へ立ち上がり端部を丸く収めている。口縁部外面と内面をヨコナデ調整し、体部下半と底部外面は指圧痕のあとナデを施している。色調は淡赤褐色である。横田氏編年[13]のA$_2$－3・4タイプ、森隆氏編年[14]のⅡ－5段階相当にあたるとみられ、13世紀初頭の時期とみられる。6は黒色土器椀であるが磨耗しており、時期は特定し難い。

7～11はSB02の柱穴内出土の土器で、7～10の土師器皿は、概ね、1～5と同一の特徴である。11の黒色土器椀は、SB02の柱穴の柱を受ける状態で出土した椀で完形品である。口径14.0㎝、器高 4.5㎝でやや小ぶりの椀である。口縁部の立ち上がりは、やや内弯ぎみであるが、ほぼ直線的である。高台部も、扁平な断面三角形状のものを雑に貼り付けており、底部が接地しており、高台の機能をかろうじて保持している段階である。内面の炭素の吸着は良好であるが、暗文は明瞭さに欠く、森隆氏編年（以後森編年と称す）のⅡ－5段階（終末もしくはⅢ－1に）に相当し13世紀中頃に位置づけられる。

12～15は、SB04の1つの柱穴内から一括して出土した資料である。12は、土師器大皿で、口縁部が外上方に直線的に立ち上がり端部を丸く収めている。底部外面以外はヨコナデ調整で、底部外面は指圧痕のあとナデを施す、横田氏編年（以後横田編年と称す）のA$_2$タイプに相当する。13～14は黒色土器椀で、いずれも磨耗が著しく内面の暗文等は、遺存状態が良くない。高台部がまだ機能を果たしており、森編年のⅡ－5段階に相当すると

みられる。15は、瓦器椀で、柱を受ける状態で出土した完形品である。口縁部でくの字状に屈曲し明瞭な段を成したあとやや外反ぎみに外上に開く。高台はやや扁平な台形状のものを貼り付ける。体部外面のヘラ磨きはやや省略化の頃向がみられる。内面は見込部分まで横方向のヘラ磨きを施す。見込部分は、クシガキ目もしくはハケ目調整が施され磨かれていない。見込部分にやや雑なラ線状暗文が施される。白石編年[19]のⅡ－4型式に相当するとみられる。12世紀後半から13世紀初頭にかけての一括資料と考える。

16～17はＳＢ１７の柱穴内出土土器で、17は４分されていたが、単品の出土で、柱を受けた状態で納められた土器と考えられる。形態的にはＳＢ０２出土の11と同一であるが、口縁端部内面に沈線がめぐらない点と、内面の調整がやや雑で、ハケ目調整が残っており、暗文も弧状のヘラ磨きを連続させるもので、胎土が極めて砂分が多い。森編年のⅢ－１～２段階に相当すると考えられ、13世紀後半に位置づけられる。

18～19はＳＢ１０の柱穴内出土土器で、18は、やや扁平な小皿である。森隆編年のⅡ－４～５段階に相当するとみられる。19は黒色土器椀で、口縁部がやや内弯ぎみに直線的に外上方へ立ち上がる。高台部は、やや扁平な断面逆三角形に近いものを貼り付ける。内面の調整は、ハケ目調整が残り、暗文も弧状のヘラ磨きを連続するものである。森編年のⅡ－４段階に相当するとみられる。13世紀中頃に位置すると考える。

20～24はＳＢ０９の柱穴内出土土器で20～23が土師器皿、24が黒色土器椀で、24は柱を受ける状態で出土した。土師器皿は森編年のⅡ－４段階～５段階に相当するとみられる。24の黒色土器は、やや器高が高く、高台部もしっかりしており、内面の調整もていねいに磨きがかかり、暗文もラ線状暗文を密に施している。口縁部がやや肥厚しており、森編年のⅡ－３～４段階に相当するとみられる。13世紀初頭から中頃にかけて位置づけられる。

25～29はＳＢ１１柱穴内出土土器で、25～27は土師器皿、28は黒色土器椀、29は瓦器椀である。森編年のⅡ－３段階に相当する。28は破片であるが、内外面ともにていねいな磨きがかけられており、口縁部が内弯ぎみに外上方へ立ち上がり、端部付近で若干外反する。口縁部をやや肥厚させる。高台部は厚めのしっかりしたもので、全体に器壁は厚い。森編年のⅡ－３段階に相当する。29の瓦器椀は口縁部にかけて内弯ぎみに立ち上がり、口縁部が直立ぎみになり若干外反させる形態で、高台も腰の高いしっかりしたものである。外面の磨きは、体部中央よりやや下までで、指圧痕が若干残る。内面はていねいなヘラ磨きがなされる。見込み部分にラ線状暗文が施されているが、15の様にハケ目調整はみられない。白石編年のⅡ－１、川越編年[18]の第Ⅱ段階Ａ型式に相当するとみられ、12世紀中頃に位置づけられる一括資料と考える。

30はＳＢ１５の柱穴内出土の土師器大皿で口縁部がやや内弯ぎみに立ち上がり端部を丸く収めている。横田編年のA$_2$２タイプに相当するとみられ、12世紀中頃と考える。

31は、トレンチ北側の柱穴群の１基より出土した大和型の黒色土器椀で、内外面とも黒色を呈する。内外面ともに全体に密なヘラ磨きが施されている。底部外面は、板状圧痕が残る。高台は底部と体部立ち上がりの境を若干つまみ出した程度のものである。平安京跡の左京内膳町跡ＳＫ284[17]出土のものと同一で、橋本氏編年[18]のⅡ－６期新段階に相当する。10世紀後半頃に位置づけられる。

38～42は、ＳＤ０１底より出土した一括資料で、38～41が土師器皿、42が黒色土器椀である。土師器皿は、いずれも底部が湾曲しており、39、41は、口縁部が外反し、体部との境に段を成す。森編年のⅡ－２～３段階に相当する。42は、極めて器壁の厚い椀で、口縁部にかけて内弯ぎみに立ち上がり、口縁部が外反し、体部との境に明瞭な稜を成す。高台は重厚な逆台形状のものを貼り付ける。内外面ともていねいなヘラ磨きが施され、外面下半部に格子状にヘラによる沈線状の磨きが施される。暗文はやや密な花弁状暗文が内面にていねいに施されている。森編年のⅡ－２段階に相当する。12世紀初頭に位置づけられる。

44～50は、ＳＥ０６出土の一括資料で黒色土器椀である。48を除いて、口縁部外面がやや外反ぎみに開く、47、49、50は口縁部が若干肥厚させている。高台部は、やや幅平化の傾向がみられるが、まだ機能を果たしており八ノ字状にふんばる断面逆台形状もしくは三角形状のものが貼りつく。体部外面は、指圧痕のあとナデ調整のみで、磨きは端部付近のみである。内面は、44～46が暗文が認められないが、47～50は花弁状暗文がていねいに施されている。森編年のⅡ－４段階に相当する。12世紀後半に位置づけられる。

51～68はＳＥ０１出土の土器である。51～59は土師器皿である。51は、口縁部が直立するもので森編年のⅡ－３段階、12世紀中頃に位置づけられる。55は、底部と体部の境に段を成し、口縁部のほとんどが指ナデになる。横田編年のA$_{2}$-4タイプに相当し、13世紀末に位置づけられる。52～54、56～59は、森編年のⅡ－４～５段階に相当し、12世紀末～13世紀初頭に位置づけられると考える。60～65は黒色土器椀で、森編年のⅡ－４～５段階に相当する。66、67は瓦器椀である。両者とも体部が内弯ぎみに外上方に立ち上がり、口縁部にて若干外反する。体部との境は、若干稜をもつが明瞭ではない。ヘラ磨きの手法は、29と同じであるが、体部外面のヘラ磨きにやや省略化がみられる。66は内面見込み部分にハケ目調整が残る。時期的には、29と15の間に位置づけられると考える。68は黒色土器椀の底で、底部外面に「三」の墨書がある。

69～77はＳＥ０２出土の土器で、69～72が土師器皿である。森編年のⅡ－４～５段階に相当する。73、74は瓦器小皿で、当遺跡ではこの２点のみしか出土していない。口縁部が外反ぎみに外上方へ立ち上がり、端部を丸く収めるもので、内面に蛇行状暗文を施す。炭素の吸着は少なく、灰色を呈する。75～77は黒色土器椀で、ＳＥ０１出土のものと同時期とみる。森編年のⅡ－４～５段階に相当する。12世紀末～13世紀初頭に位置づけられる。

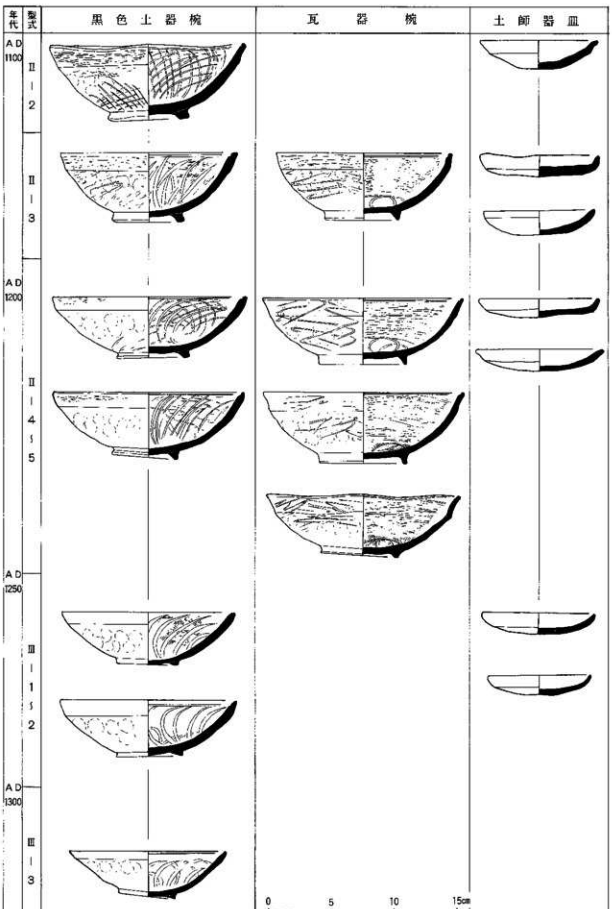
図版二六の 100～ 102は、２トレンチＳＢ０４に関する遺物で、 100、 101は柱穴内から、 102は、ＳＢ０４の北西隅の溝状遺構内から出土した。 100、 101は土師器皿で、１トレンチのＳＥ０１で同様のものが出土している。森編年のⅡ－３段階に相当する。102は黒色土器椀である。内面の炭素の吸着はなく茶褐色を呈する。外面下半部にヘラ磨きの省略化がみられるが、口縁部外面、及び内面はていねいな磨きを施す。内面に極めて密な花弁状暗文を施す。体部下半の高台付根周辺に放射状のヘラによる沈線がみられる。高台の貼り付けに際しての調整圧痕とみられる。高台は厚手な逆台形状のしっかりしたものを貼る。全体に器壁は厚い。森編年のⅡ－３段階に相当する。12世紀中頃に位置づけられる。

103～ 109は、３トレンチ（３－２トレ）ＳＤ０４の一箇所より一括して出土した土器で 103は土師器皿、 104～ 108は黒色土器椀である。 109は土師器の羽釜である。 103は、底部と立ち上がり部分に段を成す、横田編年のA$_{3}$-4タイプ、13世紀末に位置づけられる。104～128の黒色土器椀は、口径10cmと極めて小型で、口縁部までほぼ直線的に立ち上がる。高台部は極めて扁平なものを貼りつけるが、ほとんど機能を果たしていない。

外面の磨きはなく、内面も雑な磨きである。

暗文は弧状のものが乱雑に施されている。全体に炭素の吸着は少なく、茶褐色を呈している。森編年のⅢ－３段階に相当し、13世紀末から14世紀初頭に位置づけられる。

以上、遺構内出土の遺物を中心に記したが、ＳＥ０１出土の土器は、井戸か溜かによって取り扱い方が変わってくるとみられる点があること、柱穴内出土の土器に関しても、土器の年代が建物の築造年代にあてはまるとは必ずしも断言できないことを念頭に入れておかねばならない。出土土器の編年は、第２図の通りで、近江産黒色土器椀、瓦器椀、土師器皿について森隆氏の編年を参考に並べた。このうち森編年のⅡ－２段階に相当するものが、大橋信弥氏の編年[11]による杉江タイプ、森編年のⅡ－３段階も同じく杉江タイプで、12世紀前半代のものである。森編年のⅡ－４～５段階のものは、近年その出土量が増してきたもので、大橋編年でいう窯波タイプで、12



※図表左欄の型式段階は森隆氏による近江産黒色土器の段階及び年代を示す。

第2図　久郷屋敷跡出土中世土器編年試案

世紀後半代に位置づけていた。森編年のⅢ－１～２段階は、いわゆる手原ＳＤ０６タイプで、13世紀前半代に位置づけている。森編年のⅢ－３段階は、黒色土器の終末期段階のものといわれるもので、大橋編年の志那中タイプで、13世紀後半代に位置づけていた。10世紀後半代以降の黒色土器は近年、湖南、湖東を中心にかなり出土例がふえており、黒色土器椀、瓦器椀、土師器皿の横のつながりが、より明確になってくるのは、そう遠くないと考える。

6．ま　と　め

今回の調査では、以上の様に１～３トレンチにおいて良好な資料が得られた。概ね遺跡の遺存区域は、東海道新幹線をはさんで、西宿町方向から東中学校へ向けてのライン上に残存していると思われ、当調査地区が、東端にあたるものと考えられる。特に３トレンチは、久郷遺跡の東端、半田遺跡の北端にあたり、久郷遺跡の一連の遺構群に属するものか疑しい、今後半田遺跡の資料如何により独立する集落の一端になる可能性もある。以下各時代別に総合的に各遺物、遺構について若干の説明を加える。

（1）旧石器時代～古墳時代後期

旧石器時代に関しては、有舌尖頭器１点のみ出土しただけで、しかも、鎌倉期の畠跡のうね内からとあって、必ずしも周辺に遺構があるとは断言し難い。しかし、八日市市内で、同様の出土がみられるごとにより、今後注意すべき点である。縄文時代に関しても同様石さじ１点のみで、土器の出土を伴わないため、遺構の是非は、今回の調査では、不明である。しかし、当遺跡の東２kmの地の常衛遺跡で縄文晩期の甕棺が出土しており、同辺に縄文時代の遺跡の存在が考えられることは可能である。

弥生時代については、これまで、千僧供遺跡群内、及び北方の蛇塚遺跡で、集落跡及び方形周溝墓を始めとする墓域が確認されているが当該地に関しては、予想すらし得なかった。方形周溝墓は、さらに北西方向への広がりをみせており、一大墓域の想定が考えられる。これが、蛇塚、寒籔遺跡に連続するものかは不明で、この墓域に対応する集落跡の検出が、今後期待される。

古墳時代前期に関しては、比較的まとまりをもった集落が、千僧供遺跡群同様みられることが判明した。時期的にも同一で、これまた、一集落を想定し、その広がりを今後確認する必要が生じた。恐らく、西宿方向への半田遺跡等への広がりが考えられる。

古墳時代後期に関しては、１トレンチよりかなり大型の掘立柱建物が２棟あることにより、前年度調査地の柿木原遺跡との関連性が考えられる。蛇塚遺跡でも検出例があり、現在の上田町の集落とほぼ重なる位置に当時の集落の存在が考えられる。

（2）鎌倉時代以降

中世における資料としては、１トレンチ北側の柱穴内より、10世紀前半に位置づけられるての字状の口縁を有する土師器皿と大和型の黒色土器椀（31）が出土しており、この時期より建物があったことがわかる。しかし、中心的な建物が棟を並べ始めるのは、11世紀末頃から13世紀終りにかけてである。この間、200年の間であるが、遺構の重複や遺物を通して Ⅰ～Ⅴ期に大別することができる。（第４図）

１期：ＳＤ０１、０２、０５、０６、０８、ＳＢ０６、１１、１２、１６、ＳＥ０１

概ねＮ－25°－ＷからＮ－29°－Ｗの間の方位に規制される遺構である。時期を決定し得る資料には、ＳＤ０１の

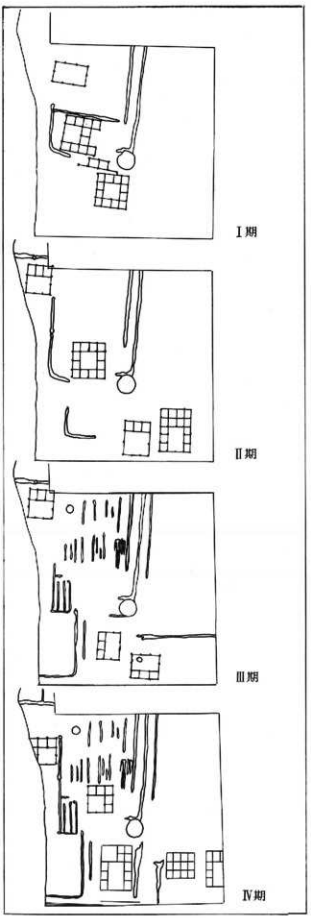
東端底より出土の黒色土器椀、土師器皿と、ＳＢ１１の柱穴内出土の瓦器椀、黒色土器椀である。このうちＳＢ１１の資料は、明らかに柱穴内に柱を立てる際に納めたと思われる状態で、椀が柱の根を受けるような形であった。周辺では、千僧供町の堀ノ内遺跡で鎌倉時代の掘立柱建物の柱穴底に銅椀が納めてあった報告があり[8]、建物を建てる際の「立柱式」の供献遺物とみられる[9]。これより建造時期が、12世紀前半と考えられる。ただ、ＳＢ０６に関しては、棟方位が若干ずれることと、遺物がやや新しくなる傾向がありＳＢ１１より後出する建物と考えられる。さらにＳＢ１６に関しては、ＳＢ１１と近接している点や、柱列が１列のみ明瞭に残っている点よりＳＢ１１に伴う柵あるいは木戸があったと考えられる。ＳＢ１６はＳＢ０６と交差する為、ＳＢ０６が建つのはＳＢ１６廃絶後である。

Ⅱ期：ＳＢ０２、０５、０９、１３、ＳＤ０２、０３、０５、０６、０８、ＳＥ０１、０６

Ｎ－33°－Ｗの方位に規制される遺構である。建物は、Ａ型住居、Ｂ型住居、Ｃ型住居より構成される。２トレンチのＳＢ０４もこの時期のものと思われるが、近接する溝状遺構内より12世紀前半代の黒色土器椀（102）の出土がみられることより、Ⅰ期の後半に建造された可能性もある。さらに、棟方向が東西方位をとり、１トレンチの住居と棟方向が異なる点であるが、これは、地割りの制約、もしくは、集落全体での建物の配置等に関連するものとみられる。時期を決定し得る資料には、ＳＢ０２、０９の柱穴内出土の黒色土器椀土師器皿と、ＳＥ０６内の黒色土器椀の一括出土資料がある。Ⅱ期は、13世紀前半代頃と考えられる。

Ⅲ期：ＳＢ０４、ＳＢ０８、ＳＢ１３、ＳＤ０４、０５、０６、１０、１１、１２、０９、ＳＥ０１、０２、０５、

概ねＮ－33°－Ｗの方位に規制される遺構である。建物は、Ｂ型住居のみの構成と考えられる。この時期に畠が作られたとみなしたがＳＢ０９の西側の畠は、後出するものとみられる。時期を決定し得る資料には、ＳＢ０４の北東隅柱穴内出土の瓦器椀（15）と黒色土器椀の破片



第３図　遺構変遷図

(13)、(14)、土師器皿(12)の一括資料がある。Ⅲ期は概ね13世紀　中頃と考えられるが、Ⅱ期の住居と併存するものがあると考えられ、Ⅱ期からⅢ期には継続的に考えた方がよいと思われる。

Ⅳ期：ＳＢ01、02、07、10、14、17、ＳＤ04、05、06、07、10、11、12、03、ＳＥ01、05、

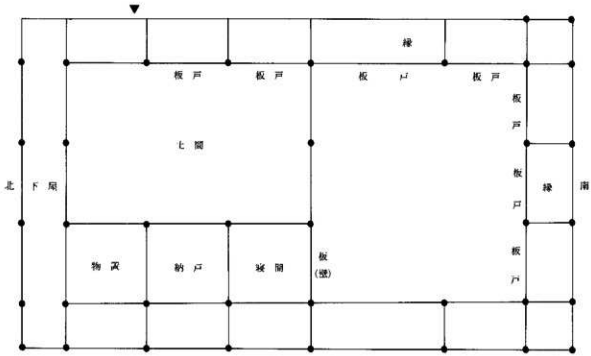
概ねＮ－33°-34°－Ｗの方位に規制される遺構で、旧条里の方向とほぼ平行する。建物はＡ型住居、Ｂ型住居と総柱の倉庫からなり、4期のうち最も充実した構成を成す。ＳＢ10の北側と西側の一部に畠が作られたとみなしたが、やや疑問がある。時期を決定し得る資料には、ＳＢ01の柱穴出土の土師器皿、ＳＢ02の柱穴底部出土の黒色土器椀(11)ＳＢ17の柱穴内出土の黒色土器椀(17)がある。Ⅳ期は概ね13世紀終り頃と考えられるが、Ⅲ期の住居と併存するものがあると考えられ、Ⅲ期からⅣ期にかけて継続的に考えた方がよいと思われる。

Ⅴ期：1トレンチ畠跡・水田跡、3トレンチＳＢ01・02、ＳＤ04・05

1トレンチの畠跡をⅢ期ないしⅣ期より耕作し始めたと仮定したが、建物廃絶後とも考えられる。3トレンチのＳＢ01はＡ型住居と、ＳＢ02のＢ型住居を検出した。時期を決定し得る資料には3トレＳＤ04出土の黒色土器椀(104～108)がある。Ⅴ期は概ね14世紀初頭頃と考えられる。

以上、Ⅰ期からⅤ期にかけての遺構の変遷を概略的に記したが、次にこれらの住居における構造及び機能について述べてみる。

中世住居における資料は、文献ないし考古資料として確実に復元できるものとしては、4例ほどしかなく、又、この4例とも1300年代以降のもので、鎌倉時代初頭までさかのぼれる資料は皆無といってよい。現在知られる中世住居の平面形式としては、兵庫県神戸市兵庫区山田町衝原の箱木勇郎同上谷上の阪田真治郎同県宍粟郡安富町



第4図　新兒荘地頭政所指図（1間7尺）

曽河吉井徳治邸[27]と「東寺古文零聚巻７」にある琳阿弥邸指図[28]、備中国新見庄地頭方政所指図[29]がある。このうち琳阿弥邸は、やや書院造り的な要素の加わわったものであるために除外するとして、いずれも、名上、地侍層の屋敷である。前三者の邸宅はいずれも現存しており「千年家」の呼称で知られているが、改造甚だしく建築当初の材は、柱、梁、貫の一部にわずかに残存するのみで、外観はもとより内部にいたっても建築当時の住居の状態とはいえない。また衛原の箱木邸は、昭和52年度に、貯水ダムの建築により水没するため解体移築工事が行われ、同時に発掘調査が行われた結果母屋と別棟の家屋が付属していたものを後世増築したことがわかり、母屋の部分も、せいぜい古く見積もって13世紀代とみるのが無難である。[30]

内部の平面形式は、箱木邸、阪出邸、古井邸ともに、建物の半分を土間が占めており、残り半分を間仕切して二室とし、納戸、ヒロシキとしている。部屋は、いずれも板間で、間仕切は板壁である。新見荘政所（奈良殿邸）は、土間の占める面積が小さく、板敷の部屋の占める割合が大きい。基本的には前座敷二間取りの形式である。[31]この違いは、地侍層と地頭方という階級的な要素も含まれていると考えられ、箱木邸他二邸の土間の占める割合が大きいのは、農作業に従事していたことが大きくかかわっていたと考えられる。一方、政所は、支配者階級ということもあわせて作業場を兼ねる土間を広く取る必要がなかったとみられる。しかし、いずれにしても、対社会的な室としてのヒロシキが設けられていることは、一般農家と違い多人数の会合をもつ場所があるということで、社会的地位のある家といえる。

次に各住居の平面形式について若干の考察を加えて説明する。

建物の平面形式は、柱穴の配列状況より基本型としてA・B・Cの各型と、総柱の建物に分類できる。（図版二二）

まず、総柱の建物であるが、１トレンチのみで検出されており、ＳＢ０２、ＳＢ１１の２棟がある。いずれも３間×４間の規模であるが、ＳＢ１１の方が大型である。

A型住居は、１トレンチのＳＢ０３、ＳＢ０７と２トレンチのＳＢ０４、３トレンチのＳＢ０１の４棟がある。時期的には、２トレンチのＳＢ０４が一番古く、次に１トレンチのＳＢ０３で、ＳＢ０７が３番目に、最後に３トレンチのＳＢ０１の順である。基本構造は、４間×５間の規模で、中央２間分に空間をもつものである。２トレＳＢ０４に関しては、中央２間分すべてが空間になっており間に柱は１本もない。１トレＳＢ０３では、片側３間分に空間をつくり、２間分には各柱が通る構造になる。即ち、住居内を３区画に分けている。ＳＢ０７に関しては、基本的にはＳＢ０３と同じであるが、北側２間分の間仕切した分の内、西側２間分が空間になり、中央に柱が存在しない。３トレＳＢ０１に関しては、さらに細分化が進み、２間・２間ごとに中央に柱があり、空間部が横に３区画並列する。

仮に空間部を一室と考え、部屋内に柱が存在しないと仮定すると、２トレＳＢ０４に関しては、間仕切のない全面土間と考えられる建物になる。同様のものに新見荘河毛本屋の指図がある。[32]１トレＳＢ０３、ＳＢ０７に関しては、箱木邸、新見荘地頭方政所屋敷（奈良殿邸）を参考に考えると、３間分の南側の空間部はデエ（ヒロシキ）、残り２間分の北側は、各々土間あるいは納戸と考えられる。ＳＢ０７の２間分の空間部は、部屋と考えるか、土間と考えるか不明であるが、一室とみなしてよいものかと思う。３トレＳＢ０１に関しては、東側に１間分の張り出しがあり、そのうち南側２間分に「馬屋床」と考えられるしっくいを張った長方形の浅い土坑が付属しており、東側１間分が土間、西側各々２間分が、ヒロシキ等の部屋と思われる。

B型住居は、１トレンチＳＢ０４、ＳＢ０５、ＳＢ０８、ＳＢ１０、ＳＢ１４の５棟で、基本的には３間×３間の規模で、片側２間分に空間部がある構造である。空間部を一室の部屋と考えるか、土間と考えるか疑問であ

るが、A型住居に比べるとかなり粗末な建物であることは確かである。

C型住居は、1トレンチSB06、SB09の2棟である。基本構造は、4間×4間で、南北にやや長い寄棟造りの建物である。構造は、周囲に庇状に柱がまわり、中央2間分に空間がある。住居よりは客殿のようなものではないかと考えられる。

次に住居規模であるが、1間を1坪と仮に計算して、A型住居の場合20坪、下屋があったと仮定すると24坪～30坪になる。B型住居の場合は9坪、C型住居の場合は16坪となる。伊藤ていじ氏は、中世農村における住居規模のわかる例として、醍醐寺宝聚院文書にある延慶三年（1310）の検注名寄帳にある伊勢国伯浦江向村をあげており[31]、それによると6坪以下の住居が、242軒中47%、12坪以下となると82%を占め、小規模住居が多かったことがわかるとしている。因みに20坪以上は242軒中13軒しかない。又、箱木邸が6間×4間（下屋を含む）で24坪、奈良殿邸が6間×5間（下屋を含む）で30坪であることからして、当時の20坪以上の家は相当な大住居であったとみられる。

柱間に関しては、当遺跡検出の住居の場合、6尺5寸から9尺まで、種々あり一定していないが、概ね、曲尺で割れる数値で柱間を設定している。ここでは、柱と柱の距離ではなく、柱の芯心をもって曲尺で割れる数値に設定している。さらに、古い時期のSB11等では、必ずしも柱筋が一定していないが、Ⅲ期、Ⅳ期と時代が下る程、柱筋が一定している。なお奈良殿邸の場合は7尺、箱木邸の場合は6尺5寸から6尺8寸5分の間で一定しておらず、箱木邸の場合はやや測定誤差があるとみられるが、概ね、6尺5寸から7尺を基準とすると考えられる。ただ例外として、新見荘河毛本屋の場合、7尺間、8尺間、9尺間が混在しており、8尺、9尺を1間としてとる場合もあり、当遺跡の場合もこれに概当するものと思われる。

以上の様に調査結果から若干の考察を試みたが、最近中世集落の様相が各地の遺跡で検出されており、たとえば山口県ド石田遺跡[32]（平安ー室町）、大阪府和気遺跡[33]（平安ー鎌倉）、三重県草山遺跡[34]（室町）、広島県草戸千軒遺跡[35]（鎌倉ー室町）、神奈川県上浜田遺跡[36]（室町）等で古代とは異なった平面形式をもつ掘立柱建物が検出されている。

宮本長二郎氏は、梁間4～5間、桁行5間以上の大規模な例が多く、屋内の柱筋交点に側柱と同径の柱を立てるもので、総柱の場合は土間と部屋、通し柱と床束などの区別がつけ難く、平面形式より部屋、土間を判断するのは問題があるとしている[37]。

今回検出したA、B、C型の住居においても、空間部に床束があった可能性もあり、又、内部の柱で、通し柱、床束の区別があった可能性もあるため、内部の間取りの名称については不明であり、部屋、土間の区別も問題がある。しかし、仮に、A、B型住居の場合柱はすべて通し柱と仮定すれば、A型住居の場合は三間取り、B型住居の場合は、土間ずまい、もしくは二間取りと考えられないこともない。今後の問題提起となる点である。

最後に、遺跡の歴史的観点からの位置づけであるが、久郷屋敷跡および蔵ノ町遺跡は、中世において篠田荘になる場所である。

『和名抄』によると備生郡9郡の1つに数えられ「近江長命寺文書」の建長8年（1256）8月の味部守守田地寄進状に「篠田郷十一条十四里卅二坪」とみえる。又、嘉元3年（1305）「摂籙渡荘目録」に政所領所として田26町余、畑15町余とみえる（九条家文書）。永和4年（1378）には、篠田荘内の1段小の得分1石1斗が永源寺開山和尚御影長講料足として永源寺の老檗庵主禅師に寄進されている（永源寺文書）[38]文献等に記されている篠田荘関係の資料は以上のもので、他には、承平二年（932）の田券（東寺文書）に安吉郷上出庄がみられる他、町内の篠田神社境内に正安二年（1300）銘の宝篋印塔が残っている。また正長元年（1428）には京極持清の所領とな

っており、永享八年（1436）には持清が願上となり、篠田神社の屋根のふき替えを行ったとする棟札が残っている。[18]

次に「久郷屋敷」であるが、これまでは、「上田氏館」と称されていたものが、昭和60年度の滋賀県遺跡地図で改称され、現在の真宗本願寺派明光寺の地を館跡としている。久郷氏は、現在も上田町、西宿町にその子孫とする家が多くあり、上田町の久郷勲氏が現在本家筋にあたり系図が伝承されている。系図はやや手が加えられており疑問視されるが、初代は、本佐々木の9代木村政道から分家した上田次郎季政とある。当初は上田氏を称しており、これが、現在の上田町の地名の由来となっている。また15世紀初めに京極持清の実弟久郷が養子になっており、篠田神社の永享八年（1436）の棟札に

「永享八丙辰八月二十一日始之十月二日造畢、奉造営上田社拝殿上葺之事

當造村人数八十七人　社僧沙弥久郷殿、願主京極中務少輔　神主右近三郎左衛門允、同右馬四郎右衛門允、大工鳥之郷左近允、助士同郷新左衛門允　同不祥」

とある。ここにある「社僧沙弥久郷殿」が京極持清の実弟にあたり、この時点では、上田久郷である。久郷姓に改姓するのは、系図によると江戸時代以降で、そのいきさつは不明である。[19]

今回、検出の遺構は、小字名の「久郷」、「久郷出」からの伝承地は別にして、その規模、建築様式からして一般農民の住居とは考え難い。また箱木邸、奈良殿邸の地侍、政所領主の邸宅とあわすと、上田氏の邸宅を考えるに間取り形式、その他母屋と別棟の客殿、雑舎を配する点等問題はないと考える。さらに、今回の調査地の南、昭和60年度調査地19トレンチ南は「九門明」なる小字名が残っており、これは、いわゆる「公文名」であったのではないかといわれ、12世紀の畿内近国の荘園でみられる百姓名の名残りをとどめるものと考えられる。[20]

また中世城郭研究会の報告では、館跡にいわゆる湧水地が伴うものが多いとし、谷氏館久郷屋敷、九里氏館等いずれも湧水地を保持している。これは、粗割山周辺より北部では日野川からの引水がほとんど不可能で、多くは八日市市の布施の溜から用水を引きまかなっていたことが、明治27年の地図でも明らかである。上田を含む馬淵荘は特に深刻で、水争いが、しばしば生じている。このため西宿・上田においては、布施の溜からの引水の北端にあたる為、水量がとぼしく、各水田に溜（地元ではイケと称し、井戸である）を掘り用水にあてている。この館跡に湧水地を確保する理由を、小山靖憲氏は、上野国新田荘の上今居館（1157）の古絵図を例に、次のような見解を示している。[21]館の立地状況は、利根川に注ぐ早川の蛇行点という極めて水害に遭い易い地にあり、環濠は、この蛇行を利用して水を引いている。このような一見極めて危険性のある地に屋敷を囲えたのは、いわゆる環濠に調節用溜池の機能をもたせるためで、貯水池を要わ、干ばつの防止と温水化により、背後にひかえる直営田の他、外部の百姓の耕地に用水の統制を行う利点があるとしている。このように武士が領田を支配するに水の権利を握っていたことがわかる。

10世紀以降班田制が崩壊し、「大名田堵」と称される有力農民が登場するにあたって集落の様相が一変している。それは、考古学的にも明らかにされており、7、8世紀の集落が、11世紀後半から12世紀以降にかけての集落と直接つながらないという点である。篠田荘も例外ではなく、8世紀代から11世紀代までの遺構に空白が生じている。これは、全国的に9～10世紀にみられる「かたあらし」や「年荒」といわれる耕作されていない休耕地が50%を越すという荒涼とした状態であったことも原因である。11世紀中ばになると、開発後3年間は、地利を免除する他、開発地の雑役を免除する等の特別徴税領域の特典が与えられることや、荒廃公田を未墾地だとしても咎められることがない等から、有力豪族が次々に開発し、領田を増大させたことも大きな要因と考えられる。[22]

近江八幡では、この有力豪族が、佐々貴（佐々木）氏であり、後に観音寺山に、中世例をみない大規模な山城

を築き、織田信長が安土に城を構えるまで、一大領域を保持していたのである。その経営には、一族郎党を随所の要所（ここでいう湧水池のある地）に配し、基盤をゆるぎないものにしていたと考えられる。これが、近江八幡における中世居館遺構の分布に表われていると考えられる。

今後の中世集落遺跡における武士の館跡のもつ要因として考えるべき点であり、近江における戦国時代から織豊政権へ移行する中で、地方豪族のあり方を考えられる点ではないであろうか。

注

① 『昭和60年度　滋賀県遺跡地図』（滋賀県教育委員会　1986）

② 『滋賀県中世城郭分布調査４（旧蒲生・神崎郡の城）』（滋賀県教育委員会　1986）

③ ②と同じ

④ 『勧学院遺跡発掘調査報告書』（『近江八幡市埋蔵文化財調査報告書Ⅶ』近江八幡市教育委員会　1985）
『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書Ⅶ－２』（滋賀県教育委員会　滋賀県文化財保護協会　1986）

⑤ 『昭和58年度　滋賀県文化財調査年報』（滋賀県教育委員会　1985）

⑥ ⑤と同じ

⑦ 『埋蔵文化財ニュース40　飛鳥白鳳寺院関係文献目録』（奈良国立文化財研究所　1983）

⑧ 『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書Ⅶ－２』（滋賀県教育委員会　滋賀県文化財保護協会　1985）

⑨ ②と同じ

⑩ 『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書Ⅶ－２』（滋賀県教育委員会　滋賀県文化財保護協会　1986）

⑪ 柿本原遺跡、1986年調査地の19トレンチ検出の掘立柱建物跡および井戸状遺構

⑫ ②と同じ

⑬ 横田洋三　「土師器皿の分類と編年観」『平安京左京四条三坊十三町　－長刀鉾町遺跡－』（『平安京跡調査報告書第11輯』古代学協会　1984）

⑭ 森　隆　「滋賀県における古代末・中世土器」（『中近世土器と基礎研究Ⅱ』日本中世土器研究会　1986）

⑮ 白石太一郎　「いわゆる瓦器に関する二、三の問題」（『古代学研究』54　1964）

⑯ 川越俊一　「大和地方出土の瓦器をめぐる二、三の問題」（『文化財論叢』奈良国立文化財研究所　1983）

⑰ 平良泰久他　『平安京跡（左京内膳町）昭和54年度発掘調査概要』（京都府教育委員会　1980）

⑱ 橋本久和　「畿内の黒色土器（１）」（『中近世土器の基礎研究Ⅱ』　日本中世土器研究会　1986）

⑲ 大橋信弥　「近江型」黒色土器再考」（『手原遺跡発掘調査報告書』（『栗東町文化財調査報告書第一輯』）栗東町教育委員会他　1981）

⑳ 田路正幸　「五角形住居跡を検出　堀ノ内遺跡」（『滋賀文化財だより』No.86　1984）

㉑ 兼康保明氏の教示による

㉒ 中村善則　「箱木家住宅の発掘調査」（『重要文化財箱木家修理工事報告書』　1986）

㉓ 伊藤郷屋　「室町時代の農家」（『中世住居史－封建住居の成立－』東京大学出版会　1984）

㉔ ㉓と同じ

㉕ ㉓と同じ（東寺古文零聚巻７より）

㉖ ㉓と同じ　（東寺古文零聚巻７より）

㉗ ㉒と同じ

㉘ 宮本長二郎　「住居」(『岩波講座　日本考古学４－集落と祭祀－』岩波書店　1986)

㉙ ㉘と同じ

㉚ ㉓と同じ

㉛ ㉓と同じ

㉜ 『下右田遺跡』(『山口県埋蔵文化財調査報告書第43集・46集』　山口県教育委員会　1979)

㉝ 『和気』Ⅱ (和気遺跡調査会　1981)

㉞ 『草山遺跡発掘調査月報』No.１～10　(松阪市教育委員会　1982～85)

㉟ 『草戸千軒町遺跡　第27次発掘調査概要』　(広島県草戸千軒町遺跡調査研究所　1979)

㊱ 『上浜田遺跡』(『神奈川県埋蔵文化財調査報告15』　神奈川県教育委員会　1979)

㊲ ㉘と同じ

㊳ 『滋賀県地名大辞典』　(角川書店　1979)

㊴ 久郷勲氏の教示による　久郷家文書は現在滋賀大学経済学部にて保管されている

㊵ ⑲と同じ

㊶ ②と同じ

㊷ ②と同じ

㊸ 近江八幡市千僧供町所在の棒神社山門前に水利権の分配率を示した石が残されている。

㊹ 小山靖憲　「住まいの構造」、「開発と家」(『週刊朝日百科　日本の歴史60－古代から中世へ　家と垣根－』朝日新聞社　1987)

㊺ 金田章裕　『条里と村落の歴史地理的研究』　1985　二四頁

蔵ノ町遺跡・久郷屋敷跡出土遺物観察表

器種	器形	No.	法量(cm)	形態上の特徴	手法上の特徴	その他の特徴	遺構・備考
土師器	鉢	1 〜 5	口径 8.0〜9.0 器高 1.5	底部は水平なものとやや弯曲するものがある 口縁部はやや内弯したあと外上方へ開く 口縁端部は丸く収める	底部外面指圧痕 他はヨコナデ	焼成 良 胎土 良 色調 黄灰白色	SB01 柱穴内
黒色土器	椀	6	口径 13.5	体部は外上方へ直線的に伸びる 口縁部はやや内弯して端部は丸く収める	口縁部外面ヨコナデ 体部外面指圧痕	焼成 やや甘い 胎土 良 色調 黄灰白色	
土師器	鉢	7 〜 10	口径 7.7〜9.0 器高 1.3〜1.5	底部は水平なものとやや弯曲するものがある 口縁部はやや内弯したあと外上方へ開く 口縁端部は丸く収める	底部外面指圧痕 他はヨコナデ	焼成 良 胎土 良 色調	SB02 柱穴内
黒色土器	椀	11	口径 14.0 器高 4.5 高台径 5.3 高台高 0.3	体部はやや内弯したあと、直線的に外上方へ伸びる 口縁部はやや屈曲して立ち上がり端部は丸く収める 体部と口縁部の境に甘い稜をとる 高台部は八ノ字状に断面逆三角形状のものを底部に付す	口縁部外面ヨコナデ 体部外面指圧痕 ナデ 体部内面に花弁状暗文を施す 口縁部内面端部近くに沈線をめぐらす 貼りつけ高台	焼成 良 胎土 良 色調 内面 黒色 外面 淡白茶色	
土師器	大皿	12	口径 16.0 器高 3.5	底部は水平 口縁部はやや内弯したあと外上方へ開く 口縁端部は丸く収める	底部外面指圧痕 他はヨコナデ	焼成 良 胎土 良 色調 白黄色	SB04 同一柱穴内一括資料
黒色土器	椀	13 ・ 14	口径 15.0〜16.0 器高 5.0 高台径 6.2 高台高 0.5	体部はやや内弯したあと、直線的に外上方へ伸びる 口縁部は肥厚してやや屈曲し体部との境に甘い稜をとる 端部は丸く収める 高台部は外にふんばる断面逆台形状のものを底部に付す	口縁部外面ヨコナデ 体部外面指圧痕ナデ 体部内面に雑な花弁状暗文を施す 口縁部内面端部近くに沈線をめぐらす 貼りつけ高台	焼成 やや甘い 胎土 良 色調 内面 黒色か 外面 白黄色	
瓦器	椀	15	口径 15.0 器高 3.0 高台径 6.2 高台高 0.5	体部はやや内弯したあと、直線的に外上方へ伸びる 口縁部は外反ぎみに開き、体部との境に明瞭な稜をとる 端部は丸く収める 高台部は外にふんばる断面逆台形状のものを底部に付す	体部外面は指圧痕のあと磨きナデ 体部中位より口縁部にかけて紡行状暗文を交互に施す 体部内面は全面ていねいな磨きを施す 見込み部分はハケ目調整のままで磨きを施きずり紡状暗文を施す	焼成 良 胎土 良 色調 黒灰色	
土師器	皿	16	口径 8.2 器高 1.5	底部はやや弯曲する 口縁部は体部との境で内へ若干屈曲したあと外上方へ開く 口縁端部は丸く収める	底部外面指圧痕 他はヨコナデ	焼成 良 胎土 良 色調 白黄色	SB07 柱穴内
黒色土器	椀	17	口径 13.7 器高 4.2 高台径 5.0 高台高 0.5	体部はやや内弯したあと、直線的に外上方へ伸びる 口縁部は若干内へ屈曲する 体部との境は不明瞭である 高台部はやや扁平な断面逆台形状のものを底部に付す	口縁部外面ヨコナデ 体部外面指圧痕のあとナデ 体部内面に太めの花弁状暗文を粗雑に施す 口縁部端部の沈線は施さない 貼りつけ高台	焼成 良 胎土 良 色調 内面 黒色 外面 淡白茶色	
土師器	鉢	18	口径 8.0 器高 1.2	No.12と同じ	No.12と同じ	焼成 良 胎土 良 色調 白黄色	SB08 柱穴内
黒色土器	椀	19	口径 14.5 器高 4.3 高台径 5.2 高台高 0.3	体部はやや内弯したあと、直線的に外上方へ伸びる 口縁部は若干内へ屈曲する 体部との境は不明瞭 高台部はやや扁平な断面逆台形状のものを底部に付す	口縁部外面ヨコナデ 体部外面指圧痕のあとナデ 体部内面に細めの花弁状暗文を施す 口縁部端部に沈線をめぐらす 貼りつけ高台	焼成 良 胎土 良 色調 内面 黒色 外面 白茶色	

器種	器形	No.	法　量 (cm)	形態上の特徴	手法上の特徴	その他の特徴	遺構・備考
土師器	皿	20 ～ 23	口径 7.5～10.1 器高 1.5～1.7	底部は水平なものとやや弯曲するものがある　口縁部はやや内弯したあと外上方へ開く　口縁端部は丸く収める	底部外面指圧痕 他はヨコナデ	焼成　良 胎土　良 色調　黄白色	SB09　柱穴内
黒色土器	椀	24	口径　15.2 器高　5.2 高台径　5.2 高台高　0.6	体部はやや内弯したあと、直線的に外上方へ伸びる　口縁部はやや斜direct上方へ伸びる　体部との境の稜は不明瞭　高台部は外にふんばる断面逆台形状のものを底部に付す	口縁部外面磨きとヨコナデ　体部外面指圧痕とナデ　体部内面に幅の細い花弁状暗文を密に施す　口縁部内面端部近くに沈線をめぐらす　貼りつけ高台	焼成　良 胎土　良 色調　内面　黒 外面　白黄色	
土師器	皿	25	口径　8.3 器高　1.2	No.12・18と同じ	No.12と同じ　指圧痕の範囲が底部接地面に限られる	No.12と同じ	SB10　柱穴内
		26 27	口径　8.0・9.5 器高　1.9・1.5	底部は弯曲し口縁部はやや内弯し外上方へ開く	No.12・18と同じ	No.12と同じ	SB11　柱穴内　28・29は同一柱穴内一括資料
黒色土器	椀	28	口径　14.0 器高　5.5 高台径　5.7 高台高　0.8	体部は内弯したあと外上方へ伸びる　口縁部は肥厚してやや斜direct外反する　体部と口縁部の境に明瞭な稜をとる　高台部は八ノ字状にふんばる断面逆台形状のしっかりしたものを底部に付す	口縁部外面　ヨコ磨き　体部外面指圧痕のあとていねいな磨き　体部内面ヘラ目調整のあと花弁状暗文を施す　口縁部内面端部近くに沈線をめぐらす　貼りつけ高台	焼成　良 胎土　良 色調　内面　黒 外面　灰茶色	
瓦器	椀	29	口径　14.0 器高　5.4 高台径　6.0 高台高　0.7	体部は内弯したあと外上方へ伸びる　口縁部は屈曲して直立し上方へ伸びる　体部と口縁部の境に明瞭な稜をとる　端部はやや角ばる　高台部は八ノ字状にふんばる断面逆三角形状のものを底部に付す	体部外面は指圧痕のあと磨きナデ　口縁部より体部中位にかけて蛇行状暗文を交互に施す　体部内面は見込み部までていねいな磨きを施す　見込み部分は9線状暗文を施す　貼りつけ高台	焼成　良 胎土　良 色調　黒灰色	
土師器	大皿	30	口径　15.5 器高　2.5	底部は水平　口縁部はやや内弯したあと外上方へ開く　端部は丸く収める	底部外面指圧痕 他はヨコナデ	焼成　良 胎土　良 色調　黄白色	
黒色土器	椀	31	口径　11.0 器高　4.3 高台径　5.2 高台高　0.3	底部は水平　体部は内弯したあと外上方へ伸びる　口縁部はやや外反して外上方へ伸びる　底部に扁平な偽跡ていどの高台を付す	底部外面板圧痕ナデ　体部内外面ていねいな横磨き　口縁部内面端部近くに沈線をめぐらす　貼りつけ高台	焼成　良 胎土　良 色調　黒色	
土師器	皿	32	口径　9.0 器高　1.5	No.25と同じ	No.25と同じ	焼成　良 胎土　良 色調　白黄色	SK01
黒色土器	椀	33	口径　14.5 器高　4.0 高台径　5.7 高台高　0.4	体部はやや内弯したあと外上方へ伸びる　口縁部は屈曲して上方へ伸びる　端部は丸く収める　高台部は断面逆台形状の扁平なものを底部に付す	体部外面　指圧痕のあとナデ　他は磨耗していて不明　貼りつけ高台	焼成　やや甘い 胎土　良 色調　外面黄白色	
土師器	皿	34 ～ 35	口径　9.0 器高　1.6・20	34はNo.25・32と同じ 35はNo.30～23と同じ	No.30～23と同じ	焼成　良 胎土　良 色調　黄白色	
黒色土器	椀	36 ・ 37	口径　14.2 16.0	体部は内弯したあと外上方へ伸びる　口縁部はやや外反して外上方へ伸びる　口縁部と体部の境に稜をとる　端部は丸く収める	体部外面　指圧痕のあとナデ　他は磨耗していて不明　口縁部内面端部近くに沈線をめぐらす	焼成　良 胎土　良 色調　外面　黄茶色	
土師器	皿	38 ～ 41	口径　8.8～9.4 器高　9.6～2.2	底部は弯曲し、口縁部は内弯し外上方へ伸びる　端部は丸く収める　39と41は体部と口縁部の境に明瞭な稜をとる	底部外面　指圧痕とナデ　他はヨコナデ	焼成　良 胎土　良 色調　白黄色	SD01　一括出土資料
黒色土器	椀	42	口径　15.6 器高　6.0 高台径　6.5 高台高　0.7	体部は内弯したあと外上方へ伸びる　口縁部はやや外反して外上方へ伸びる　口縁部と体部の境に明瞭な稜をとる　全体に器壁は厚い　高台部は八	体部外面下半は格子状の沈線が放射状に施される　体部上半は粗おさえのあと磨き　口縁部外面はヨコ磨き　内面は磨きのあと細い花弁状暗文を	焼成　良 胎土　良 色調　内面　黒色 外面　白茶色	

器種	器形	No.	法　量 (cm)	形態上の特徴	手法上の特徴	その他の特徴	遺構・備考
				ノ字状に開く気めのしっかりした断面逆台形状のものを底部に付す	施す　口縁部内面端部近くに沈線をめぐらす　貼りつけ高台		
土師器	皿	43	口径　9.6 器高　1.8	底部は水平　口縁部はやや外開き、端部にて肥厚させ丸く収める　全体に歪んでいる	底部外面　指圧痕とナデ 他はヨコナデ	焼成　良 胎土　良 色調　白黄色	SD04 出土資料
黒色土器	椀	44 / 50	口径 15.2～15.4 器高　4.8～5.3 高台径 5.4～6.2 高台高 0.5～0.7	体部は内弯したあと外上方へ伸びる　口縁部は細りやや外反する44～46とやや肥厚し内弯し上方へ伸びる47～50がある　体部と口縁部の境の稜は明瞭である　高台部は八ノ字状に開く断面逆三角形状のものを底部に付す	体部外面　指圧痕のあとナデ 口縁部外面　ヨコ磨き　ナデ 内面は磨きのあと細い花弁状暗文を施す　口縁部内面端部近くに沈線をめぐらす 貼りつけ高台 内面に暗文を施さないものもある	焼成　良 胎土　良 色調　内面　黒色　茶褐色 外面　白茶色　白黄色	SE06 一括出土資料
土師器	皿	51 / 59	口径 7.5～10.0 器高　1.2～1.9	51は27と同じ形態で口縁部が直立する　52、53は26、27を同じ形態である　54～56は底部と口縁部の境が明瞭である　57～59は7～9と同じ	底部外面　指圧痕とナデ 他はヨコナデ	焼成　良 胎土　良 色調　灰色　淡橙色 白黄色	SE01 出土資料
黒色土器	椀	60 / 66	口径 15.0～16.0 器高　4.0～5.3 高台径 5.3～6.5 高台高 0.5～0.8	60と65は体部が大きく内弯し上方へ伸びる　口縁部はやや肥厚し若干外反ぎみに直立する　高台部は断面逆台形状のしっかりしたものを八ノ字状に底部に付す　61～63はやや内弯し外へ直線的に伸びる体部で口縁部で若干内弯もしくは外反し外上方へ開く　64も同じ形態であるが外反がきつい　高台部は断面逆台形状のやや偏平なものを底部に付す	体部外面　指圧痕のあとナデ 65は体部下半に放射状沈線を施す 口縁部外面　若干の磨きナデ 内面は磨きのあと花弁状暗文を施す　口縁部内面端部近くに沈線をめぐらす 貼りつけ高台	焼成　良 胎土　良 色調　内面　黒色　茶褐色 外面　白黄色 淡茶色	
瓦器	椀	66 ・ 67	口径　16.0 器高　5.6・5.7 高台径　7.0 高台高　0.8	体部は内弯したあと外上方へ伸びる　口縁部はやや細り、若干外反し外上方へ開く　口縁部と体部の境に明瞭な稜をとる　高台部は八ノ字状に外にふんばる断面逆台形状のものと逆三角形状のものを底部に付す	体部外面は指圧痕のあとていねいな磨きを施し、体部下半から口縁部にかけて蛇行状暗文を交互に施す　内面はていねいなヨコ磨きを見込み部分まで施す　66は見込み部分にハケ目調整を施したあと雑状暗文を施す　67はラ線状暗文のみ　口縁部内面端部近くに沈線をめぐらす 貼りつけ高台	焼成　良 胎土　良 色調　黒灰色	SE01 出土資料
黒色土器	椀	68	高台径　5.4 高台高　0.5	高台部は外にふんばる断面逆台形状のきゃしゃなものを底部に付す	貼りつけ高台 底部外面に「三」の墨書あり	焼成　良 胎土　良 色調　内面　黒色 外面　淡白茶色	
土師器	皿	69 / 71	口径　8.0～9.0 器高　1.4～2.0	69は26、53と同じ形態 70、71は54、55と同じ形態	底部外面　指圧痕とナデ 他はヨコナデ	焼成　良 胎土　良 色調　白黄色	SE02 出土資料
	大皿	72	口径　14.2	12と同じ	12と同じ	焼成　良 胎土　良 色調　白黄色	
瓦器	皿	73 ・ 74	口径　10.0 器高　1.6	底部はほぼ水平　口縁部は外上方に開き端部にて若干外反する　端部は丸く収める	底部外面　指圧痕のあとナデ 他はていねいな磨きナデ　内面見込み部分に蛇行状暗文を施す	焼成　良 胎土　良 色調　灰色	
黒色土器	椀	75 / 77	口径 14.6～15.6 器高　4.6～5.0 高台径 5.2～5.6 高台高　0.5	体部は内弯したあと外上方へ伸びる　口縁部はやや細り、若干内弯し上方へ開く　口縁部と体部の境に明瞭な稜をとる　高台部は断面逆台形状のものを底部に付す	体部外面は指圧痕のあとナデ 77は体部下半に放射状の沈線状の磨きを施す　口縁部外面はナデ磨き　内面は磨きのあと花弁状暗文を密に施す	焼成　良 胎土　良 色調　内面　黒色 外面　淡白茶色 白黄色	

器種	器形	No.	法　量(cm)	形態上の特徴	手法上の特徴	その他の特徴	遺構・備考
黒色土器	椀	78	口径　15.8	33と同じ	33と同じ	焼成　やや甘い 胎土　良 色調　白黄色	
土師器	大皿	79	口径　14.2 器高　2.7	12と同じ	12と同じ	焼成　良 胎土　良 色調　白黄色	
	皿	80 ～ 87	口径 8.2～10.2 器高　1.3～1.8	54～59と同じ	54～59と同じ	焼成　良 胎土　良 色調　白黄色　淡茶色 淡橙色	
	大皿	88 ・ 89	口径 14.6～15.8 器高　2.4～2.9	12と同じ 89は端部がやや内へ屈曲する	12と同じ	焼成　良 胎土　良 色調　白黄色	イコウ面
輸入陶磁器	青磁椀	90	口径　15.0	体部は内弯したあと外上方へ直線的に伸びる　口縁部は外上方へ開く　端部は丸く収める	体部内面に花弁文 全体に薄緑色の釉を施す	焼成　良 胎土　良 色調　胎土　白色	
	白磁椀	91 ・ 92	口径 16.0～15.0	体部は直線的に外上方へ伸びる　口縁部はやや内弯し外に厚めの玉ぶちを付す	全体に白色の釉を施す	焼成　良 胎土　良 色調　白色	
	白磁合子	93	口径　6.0 器高　2.3	体部はやや内弯し直立する　口縁端部近くで肥厚させ受け口状の段を成す　端部はやや外反する匙小のものである	体部外面に菊花弁状の連続する圏線文を施す	焼成　良 胎土　良	
常滑焼	椀	94	口径　18.0	体部はやや内弯ぎみに外へ大きく開く　口縁部は若干外反し外上方へ開く　端部は丸く収める	内外面ともにナデ	焼成　良 胎土　良 色調　灰色	
	壺	95	口径　13.8	肩部は丸味を帯びる　口縁部はやや内傾ぎみに立ち上がり外反し端部を丸く収める	肩部と口縁部の境の内面は指圧痕　他なナデ 肩部に自然釉付着	焼成　良 胎土　良 色調　暗灰色	
常滑焼	甕	96		底部はほぼ水平　体部は内弯ぎみに外上方へ伸びる	底部外面にモミ圧痕あり 他はナデ	焼成　良 胎土　良 色調　暗灰色	
	鉢	97	口径　32.0	体部から口縁部にかけて直線的に外上方へ伸びる　口縁端部はやや細り丸く収める	全面　ヨコナデ	焼成　良 胎土　良 色調　暗灰色	
東濃瀬戸系器	鉢	98	口径　27.4	体部は直線的に外上方へ伸びる　端部は上方へつまみ出し丸く収める　端部外面にて面を成す	全面　ヨコナデ	焼成　良 胎土　良 色調　灰色	
弥生式土器	手焙型土器	99	口径　16.6 器高　16.6	受口状口縁をもつ鉢形土器に半球形の覆部を接いつけ　脚部、開口部の内側を大きく肥厚する	鉢部外面はハケ成形で脚部の中位よりやや下方に粘り付け貼付を施す　口縁部下半に刺突文を施す　内面は下半をハケ成形、上半はナデ成形 覆部は内外面ともナデ成形のあと、外面下半にヘラによる格子状の沈線文を2段に施す 覆部と鉢部口縁の開口部接点に棒状浮文を施す	焼成　良 胎土　良 色調　淡褐褐色	SG02 周溝底出土資料
土師器	皿	100 ・ 101	口径　9.0～8.8 器高　2.0～1.4	底部はやや弯曲する　100は口縁部が外上方へやや内弯ぎみに開く　体部と口縁部の境に稜を成す　101は口縁部が外上方に直立ぎみに伸びる	底部外面　指圧痕のあとナデ 他はヨコナデ	焼成　良 胎土　良 色調　白黄色	2トレ SB04　柱穴溝内出土資料
黒色土器	椀	102	口径　14.8 器高　5.6 高台径　5.6 高台高　0.9	体部は内弯したあと外上方へ伸びる　口縁部は若干外反し外上方へ開く　体部と口縁部の境に稜を成す　高台部は安定した八ノ字状に開く断面逆	体部は指圧痕のあとナデ　体部と高台部の境に放射状の沈線状の磨きがめぐる　口縁部外面は磨きナデ　内面はていねいな磨きのあと幅の細い花	焼成　良 胎土　良 色調　淡茶色	

器種	器形	No.	法　量 (cm)	形態上の特徴	手法上の特徴	その他の特徴	遺構・備考
				台形状の厚めのものを底部に付す　全体に器壁は厚い	弁状暗文を密に施す　口縁部内面端部近くに沈線をめぐらす　貼りつけ高台		
土師器	皿	102	口径 8.0 器高 1.4	底部水平　口縁部はやや内弯ぎみに外上方へ開き端部をつまみ出し丸く収める　底部と口縁部の境に段を成す	底部外面　指圧痕とナデ 他はヨコナデ	焼成　良 胎土　良 色調　白黄色	3トレ SD04　一括出土資料
黒色土器	椀	104 / 108	口径 12.4 器高 3.8 高台径 4.4 高台高 0.3	体部はやや内弯したあと直線的に外上方へ伸び、口縁部は若干内弯したあと外上方へ開く　体部と口縁部の境は不明瞭　高台部は断面逆三角形状の扁平なものを底部に付す　高台と底部はほとんど同じ接地面で高台の機能をあまり果たしていない　器壁は薄い	体部外面　指圧痕のあとナデ 口縁部外面　ヨコナデ 内面は磨きのあとやや雑な花弁状暗文を施す 貼りつけ高台	焼成　良 胎土　良 色調　茶色　淡茶色	3トレ SD04　一括出土資料
土師器	羽釜	109	口径 28.0	体部より口縁部にかけて内弯する　口縁部と体部の境にほぼ水平のつばを付す　端部は丸く収める	体部外面　ハケ目調整　ケズリ　内面はヨコ方向のハケ目調整	焼成　良 胎土　良 色調　茶褐色	
石製品	砥石	110 / 114		110は4面に磨耗痕を認む　111は3面に磨耗痕を認め、そのうち1面に断面V字状の溝2本とサッ痕を認める　112は1面のみ磨耗痕を認む　113　114は4面とも磨耗痕があり、113はV字状の溝が刻まれている		114は凝灰岩製	110は　1トレ SE01出土 111は　2トレ SH01出土 112は　1トレ SB01柱穴内出土 113は　1トレ SD02出土 114は　2トレ SD05出土
須恵器	杯	115	口径 12.6	体部は内弯し外上方に伸びる　口縁部は外へ屈曲したあと内弯して立ち上がる　蓋の可能性がある	全面　ヨコナデ	焼成　良 胎土　良 色調　灰色	2トレ SD05出土
		116	口径 10.6 器高 3.0	底部は水平　口縁部は内弯したあと直立し上方へ開く　全体に歪んでいる	底部　ヘラ切未調整 他はヨコナデ	焼成　良 胎土　良 色調　暗灰色	
		117	口径 11.6 器高 3.4	底部は水平　口縁部は内弯ぎみに外上方へ開く	底部　ヘラ切未調整 他はヨコナデ	焼成　良 胎土　良 色調　暗灰色	
土師器 古式土師器	蓋	118	口径 23.0	受け口状に内弯して　端部にて外上方へ開く	ヨコナデ　一部ハケ目	焼成　良 胎土　良 色調　淡橙色	
	壺	119		突底の壺で、割れ口をていねいに面取りして2次加工している	外面　ハケ目調整 内面ナデ	焼成　良 胎土　良 色調　橙色	2トレ SK01　出土　一括資料
	丸底壺	120	口径 9.0 器高 12.0	底部は水平に近い　胴部は丸味を帯び、口縁部にてやや外反ぎみに直立する	外面　ハケ目調整 内面　ナデ	焼成　良 胎土　良 色調　橙色	
	高杯	121	口径 22.8	受け皿部の底部はほぼ水平　口縁部は外上方へ直線的に伸びる　端部を若干つまみ出し外反させる　端部は丸く収める　底部と口縁部の接続部に段を成す	不明	焼成　良 胎土　良 色調　橙色	
	甕	122	口径 16.0	丸味を帯びた胴部で、口縁部にてくの字状に屈曲しやや外反ぎみに外上方へ開く　端部は丸く収める	胴部外面　細いハケ目調整 内面　ヘラケズリ 口縁部内外面ともヨコナデ	焼成　良 胎土　良 色調　茶褐色	2トレ SK02　出土　一括資料
		123	口径 16.0	丸味を帯びた胴部で、口縁部にてくの字状に屈曲しやや内弯ぎみに外上方へ伸び、端部	胴部外面　ハケ目調整 内面　ヘラケズリ 肩部外面　ヨコ方向のハケ目	焼成　良 胎土　良 色調　淡橙色	

器種	器形	No.	法　量（cm）	形態上の特徴	手法上の特徴	その他の特徴	遺構・備考
				にて肥厚させ内側に面を成す口縁部内面に陰帯を成し段をもつ	口縁部内外面ともヨコナデ		
		124	口径　16.0	123と同じ	122と同じ	焼成　良 胎土　良 色調　茶色	
	高杯	125	口径　31.8 器高　20.2	脚部は八ノ字状に開き安定したもので、受け皿部は底部よりやや外上方へ伸びたあと口縁部で内弯し上方へ開く　脚部の端部は外面に面をとる　脚部の中央よりに3ケ所の円孔をうがつ	脚部下半　受け皿部外面はていねいな磨きを施す 受け皿内面はハケ目調整 脚部上半に2番のクシガキ沈線文を施す	焼成　良 胎土　良 色調　赤褐色	3トレ
石製品	有尖舌状器	126	長さ　7.0	舌部は三角形状の超小型である　柳葉形	両面　押圧剥離 刃部　鋸歯状剥離	チャート製	1トレ
	石きじ	127	長さ　9.5		両面　押圧剥離	サヌカイト製	3トレ

II　近江八幡市高木遺跡

中世浅小井荘における居館遺構

1．はじめに

本報告は、昭和61年度県営ほ場整備事業（近江八幡市浅小井地区西ノ庄工区）に伴う近江八幡市高木遺跡の発掘調査にかかるものである。

今回は場整備事業に伴い一部畑地が切土箇所にあたり、試掘調査の結果、遺物包含層を確認したため事前に発掘調査を行い記録化を図ることとした。

2．位置と環境

高木遺跡は、近江八幡市と安土町の町界を東限とし、浅小井町、西ノ庄町、長田町にまたがる広大な遺跡である。標高は、当調査地で概ね88.7～89.5mを測る。これまでに宅地造成、干拓事業等で発掘調査が行われ、昭和60年度の調査では、今回の調査地の北方約500mの地で全国でも例の少ない弥生時代後期の前方後方形周溝墓が検出され、あわせて方形周溝墓、土壙墓群が周囲に広がる一大墓域を検出している[1]。当調査地の北側は、県道八幡一安土線が通り、さらに北側は一段低い低湿地帯となる。現在の浅小井町の地が微高地になっており、前述の墓域に対応する集落があったと推定されている。また遺跡内には、中世の浅小井氏の居城であるとされる浅小井城跡[2]がある。現在は北を県道が通過し交通量も多いが、明治27年の地図では、香庄から浅小井に抜ける里道になっており、今回の調査地点は、浅小井から南に向く道が東へ90度折れるコーナーの部分にあたる。

3．調査経過

今年度の調査地点は、遺跡の中央部にあたる。調査は排水路敷、および畑地で、工事により現況の高さより表土が削られ遺構面に影響をおよぼす地を対象に行った。調査は機械力による表土除去、遺構検出の後人力による遺構面精査、掘り込みを行ったあと写真撮影、実測作業による記録化を図った。調査は昭和61年8月26日より行い、9月25日に終了した。

各トレンチの状況は以下の通りである。

1トレンチは、畑地で、小字「公家屋敷」と称される。トレンチ西に、三輪明神の祠があるが、伝承は不明である。遺構の遺存は極めて良好で、堀跡、掘立柱建物の柱穴、井戸、桝溜状遺構を検出した。

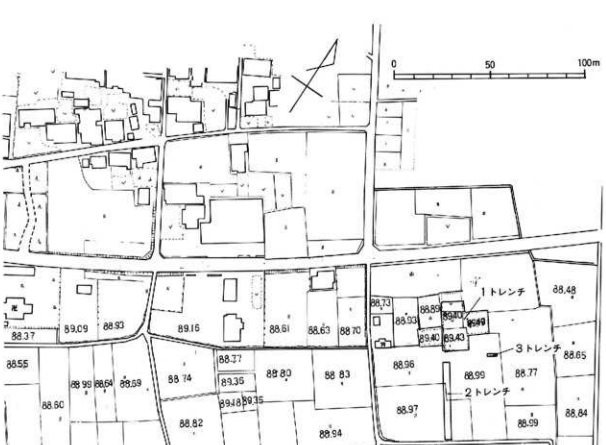
2トレンチは、排水路敷になる箇所で、1トレンチの堀跡の続きと櫛状遺構を検出した。3トレンチは、1トレンチ、2トレンチで検出した堀跡の東辺を確認するために設けたトレンチであるが、農道となる部分で破壊を免れるため遺構掘削は行わなかった。

4．検出遺構

1トレンチ（図版六）

基本層序は、第1層耕土、以下茶色砂礫、土黒茶色土（遺物包含層）である。遺構面は、柱穴が密集する一帯が、ややしまった青灰色砂質土で、堀をはさんで北側はマンガンを含む黄茶色粘性砂質土と異なる堆積を成す。又堀を斜めに切る形で、東西に礫の堆積した旧河道が走り、その旧河道を切り込んで堀がつくられている。遺物包含層は主に柱穴の密集する一帯が厚く、遺物もここに集中する。北側は、ほとんど包含層がみられず、遺物の出土も希薄である。

SD01



第1図　トレンチ位置図

SD01

幅約3.90m、深さ80cmのN－65－Eの方向をとる堀跡とみられる、埋土は、上層より茶色砂礫土、黒色砂礫土、黒灰色粘質土の順に堆積している。遺物は、中央のSE01よりの所で南側から堀の中央に流れ込む形で黒色砂礫土層において出土している。(図版三)遺物が検出されたのは、この箇所のみである。堀の堀形は、壁をやや斜めに落とし、底はほぼ平らに整えている。

SE01

径2.5m、深さ1.0mを測る、井戸枠等は遺存しない、遺物の出土はなく埋土も茶色砂礫土であるため比較的新しいものであるかもしれない。

SE02

一辺3mの方形の掘形をもつ井戸で深さ約1.0mを測る。井戸枠等は遺存しない、埋土は、上層より黒茶色粘性砂質土、黒灰色砂質土、黒色粘質土、灰色粘質土で、黒色粘質土中より遺物の出土をみる。埋土上に焼土を含む黒茶色色土の遺物包含層が堆積しておることや、根石をもつ柱穴が切込んでいること、および、遺物が包含層

内のものより古く、ＳＤ０１、柱穴群の堀立柱建物よりは先行する遺構とみられる。埋没時期は鎌倉時代後半～13世紀初頭頃と思われる。

ＳＥ０３

一辺５ｍ四方の例溜状の貯水用土坑と考えられる。遺構の北側から中央部にかけて自然石が流れ込んだ状態にあり、当初は石組等の施設があったものかと思われる。一部、根石状のものが、二段に重った状態で出土しており、これも、掘立柱群より先行する遺構とも考えられる。

ＳＥ０４

径80㎝、深さ約１ｍを測る、井戸枠等は遺存しない。一部根石をもつ柱穴に切られている。

ＳＫ０１

トレンチ北部に位置する短径1.2m、長径３ｍの楕円形の浅い土坑である。

ＳＫ０２

ＳＤ０１の北肩部中央付近に接する２ｍ×1.5mのほぼ隅丸方形に近い浅い土坑である。ＳＤ０１に切られており、これより先行する遺構である。

トレンチ南側柱穴群

建物としてまとめるには、柱間距離等に問題があり、不明である。しかし、東側に柱穴が広がらないため、建物の北東隅を構成する一角とみられる。柱穴は、径30～40㎝、深さ20㎝前後のものが多く、一部には柱穴底に自然石の根石を置くものがある。また柱穴以外に、遺構面上にある根石もあり束柱等を支えたものとみられる。根石のほとんどが火を受けており、建物は火災をうけたと思われる。

２トレンチ

基本層序は、第１層耕土、以下黄茶色粘土である。遺構面は、堀までの内側が、青灰色砂質土で、堀より南側の外は、黄灰白色粘質土である。ここでは、南北に連なる小柱穴群と、１トレンチのＳＤ０１に対応する堀のＳＤ０２と井戸状遺構１基である。遺物は堀内埋土中を除いて極めて希薄である。

ＳＤ０２

幅約3.90ｍ、深さ60㎝のＮ－65－Ｅの方向をとる堀跡とみられる。埋土は、上層より茶色砂礫土、黒色砂礫土、黒灰色粘質土の順に堆積している。黒色砂礫土の層には、内側より灰色砂質土の流れ込みがあり、土器もこの層に多い。土器の出土層は黒色砂礫土層と堀の底になるが時期差はない。堀の掘形は壁をやや斜めに落とし、底はほぼ平らに整えている。

ＳＥ０５

トレンチ北側に位置する径1.5m、深さ0.6mを測る井戸で、井戸枠は遺存しない。埋土は２層よりなり上層より黒色粘質土、暗灰色粘質土の順である。

３トレンチ

１トレンチで検出したＳＤ０１の堀の東辺を確認するために設けた試掘トレンチで、工事計画では、農道となり保存されるため、遺構の掘り込みはせず、上層観察のみにとどめた。遺構面は耕土下で、堀の内側にあたる部分が青灰色砂質土、東の外側にあたる部分が砂礫層である。幅が約3.9mでＳＤ０１、ＳＤ０２と直交する堀を検出確認し、ＳＤ０１を始めとする堀がコ字状にまわることを確認した。

5．出 土 遺 物

遺物は大別すると2時期に分かれる。古い時期のものは、堀を中心とする居館が建つ以前の13世紀初頭のものでＳＥ０２の一括資料がある。(60～67)、土器の大半は堀内の居館に関連するもので、15世紀前半頃のものである。器種は、ほとんど土師器皿であるが、他に信楽焼甕・鉢、犬目茶碗、瀬戸焼の鉢、おろし皿等の陶磁器類が少量であるが出土している。又、２トレンチのＳＤ０２では木製品の破片が２、３点出土したが、遺存が良くないため、復元できなかった。

15世紀前半代の土師器皿は概ね７種類に分類できる。いずれもＳＤ０１、０２に流れ込んでいた一括出土資料で、すべて同時期のものと考えられる。横田氏編年[3]のＡ３－７、８、Ｂ２－1.2タイプに相当する。

Ａ類、（１～６、14、15、29～41）

いわゆる「へそ皿」と一般に呼称されている小皿で、15世紀代の土師器皿の指標にされるものである。器形は底部外面を指圧により凸状にくぼませる。凸部の状況は押圧のかけ方により大小あるが概ね同一とみなした。口縁部は若干外側に肥厚するものとしないものがある。また口縁端部をややつまみ出し内寄させるものと、外開きぎみのものがあるが製作上の多少の違いとみられる。あるいは、これを新旧に分類してもよいかと思うが、時期幅はないと考える。手法上は、底部外面は指圧痕のあとナデ調整を行い、口縁端部付近から内面にかけて、ていねいにヨコナデを施している。法量は口径6.0cm前後、器高2.0cm前後で規格性がある。焼成、胎土等は良好で、色調も淡黄白色、淡橙色のものが多い。

Ａ′類　（７、42～46）

法量、焼成、胎土、色調、および手法上の特徴等はＡ類と同一であるが、底部が水平で、いわゆる「へそ」のないものである。製作上省略したものか、意図的に「へそ」を施さず別の用途に使用したものか、あるいは「へそ皿」と時期差があるものか不明である。全体量としては一割にも満たない。

Ｂ類　（８、９、16、47、48）

Ａ′類の小皿をやや大きくしたもので、全体に器壁は厚く重厚である。口縁端部外面を肥厚させ、外上方へ開くものが多い。個体数はＡ類と同じく少量である。焼成、胎土、色調等は、Ａ、Ａ′類と同一である。法量は、器高はＡ類と同様であるが、口径が、若干大きくなり、全体に扁平な皿に見られる。口径の規格性がなく、Ａ類に含む考えもある。

Ｃ類　（10、11、17、18）

扁平な皿で、形態は、底部水平で、口縁部にかけて直線的に外上方に開き、口縁端部でやや肥厚させ、若干外反させるものである。端部は上方へつまみ出さず丸く収めている。手法上は他の器種と同様である。法量は、口径、10cm前後、器高２cm前後で規格性をもつ。焼成、胎土とも良好である。色調は黄白色、淡橙色で、個体数はＢ類同様少量である。

Ｃ′類　（27、28、49～51）

Ｃ類よりひと回り大きい皿で、口縁部が長い。底部は水平で、口縁部は外上方へ直線的に大きく開き、口縁端部にて若干外反させる。50、51のように、端部を上方へややつまみ出すものがある。法量は口径13.6～14.0cm、器高1.8～2.2cmで、手法上、その他の特徴はＣ類と同一である。

Ｄ類　（12、13、19～21、52～55、57～58）

椀に近い形態のもので、底部はやや弯曲ぎみのものもあるが、ほぼ水平である。口縁部にかけて、外上方へ直

線的に開き、中程で、内側にやや肥厚させ、口縁端部付近で若干外反するものもある。口縁端部は、やや内弯させ、上方へつまみ出すものが多い。手法上、その他の特徴は、他の器種と同様である。法量は、口径11.8～13.8cm、器高3.2～3.5cmである。

D′類　(22、56、59)

D類と形態上、手法上は同一であるが、口径が大きくなり、大皿の形態をもつものである。22、56は、端部外面が外反したあと端部にて内弯し、つまみ出す具合が明瞭である。59は、底部内面にハケ目調整が施され、22、56よりは時期差が生じるかもしれない。法量は、口径16.8～17.0cm、器高3.5～4.0cmである。

13世紀代の遺物は、60～67で、60～62、64～66は土師器皿、63は黒色土器椀、67は緑釉を施した土師器である。土師器皿は、概ね、口縁部が内弯ぎみに立ち上がり、端部にて、直立ぎみにつまみ出す形態で、横山氏編年のA3－3に相当する。黒色土器椀は、いわゆる近江産黒色土器で、内面にススを蒸着させたあとラ線状ヘラ磨きの暗文を施し、再度焼成するもので、形態的、手法的特徴からみて森隆氏編年[4]のⅡ－5段階に相当する。

68、69は天目茶椀で、淡黄茶色のやや砂分の多い胎土の椀に黒色の鉄釉を施したものである。釉は、68の場合、口縁端部付近のみで底部は素地のままである。

70～72は瀬戸焼とみられる。70、71は白灰色のやや砂分の多い胎土で、内外面とも底部見込み付近まで、半透明の青緑色の釉が施されている。70は、おろし皿で、見込部分に格子状に沈線が施されている。72は、ややきめの細い粘質土系の胎土で、淡白茶色を呈する、口縁部上半の内外面に、淡白茶色の釉が施されている。見込み部分から口縁部下半にかけて格子状の沈線が施されており、すり鉢と考えられる。71、72ともに口縁端部は受け口状を呈する。

73、74は、信楽焼すり鉢で、ややきめの細い粘土質系の胎土で、淡赤橙色を呈する。内面のクシガキ目は、4～5条を一原体とし、全面に施さず、間隔をあけて少量施している。75は、甕の口縁であるが、産地は不明である。口縁部外面に3個の円形浮文と飛雲文を施す。76は信楽焼甕で、口縁部の断面が「N」状を呈する。常滑焼の同形態の甕の口縁に比べると、[5]やや切れ込み部分に省略した感がある。胎土は信楽焼特有の長石粒の吹き出しが認められる。外面は赤褐色を呈する。

6．ま　と　め

今回の調査は、範囲が極めて限定されていたため、遺構の中心部、とりわけ居館等の全容を解明するには至らなかった。

中世の堀に囲まれた居館跡で、これまで発掘調査等で確認されたものとしては、八日市市の後藤氏館[6]、中主町の吉地大寺遺跡[7]・光明寺遺跡[8]等で以外と少ない。このうち後藤氏館は、堀幅8～10m、一辺の長さ100mを測り周囲に幅約5mの土塁状の土手が遺存している。内部の遺構については全容は不明であるが、規模としては当遺跡の倍の大きさである。吉地大寺遺跡、光明寺遺跡では、一辺50mの堀が二重もしくは三重に廻らした中に掘立柱建物が検出されたが、建物の復元等は不明である。三遺跡とも室町期のもので、城館跡かと考えられている。

高木遺跡の場合は堀は一重とみられるが、規模は吉地大寺遺跡、光明寺遺跡のものに近い。堀は、東西辺の規模が不明であるが、南北の堀と堀の間が、芯心で50mを計るため、恐らく一辺50m四方の堀を廻らしていると考えられる。また南側は、堀から5mを残して、深さ1.5～2mの落ち込みになっており、スクモ層が堆積していることより沼地になっていたとみられる。従って中主町検出例の二遺跡のように堀を二重・三重にする必要がなかったとみられる。さらに、今回の調査では、明瞭な遺構として検出されなかったが、堀の内側幅1～1.5mに

おいて、若干の高まりが残っており、あるいは、土居状のものが廻っていた可能性もある。

古図等で、中世の土豪屋敷の面影をしのぶ例としては、山形県東置賜郡犬川村他屋の平誠吉家所蔵古図と新見荘谷内屋敷指図（東寺百合文書サ函399）が知られている。[9]

平家の屋敷図は、享保の貼紙があり、それ以前のものとされるが、明確な実年代は不明である。屋敷図によると、50間四方の屋敷に三間の堀と三間の土居をめぐらし、その中に主屋その他を配している。家中屋（名子屋）は、屋敷内に与兵衛なる名子屋が一棟ある以外は、すべて屋敷の南、即ち堀の外にある。ここには、間口7間6分、奥行14間の家中屋敷が6軒併例している。[10]

新見荘谷内屋敷は、寛正四年（1463）の代官祐清殺害事件の現場になったことで有名である。指図によると、四周に堀をめぐらし、門を設け、内部に防備用の橫突を立て、堀の外側の路（道）沿いに被官農民の小家を配している。谷内集落は、谷間の低湿地にあるため、谷幅わずか20mほどにすぎない立地条件から推定して、この堀も、溝ていどのものと考えられる。堀の中にある塀も低い土居と考えられる。屋敷構えは、西寄りに、南から北向の蔵と東向の宏殿（母屋）、かん所（便所）で、かん所の東に南向の廊裡を配している。さらに北側には堀をはさんで、東向の主殿（客殿）と南向の雑舎があり、主殿屋敷を別に設けている。建物の規模等は、図示されていないため不明であるが、先述の地形条件を考慮すると、一村を支配する名主の屋敷としては、かなり粗末なものと考えられる。伊藤ていじ氏は、かりに堀の幅を半間（約90cm）として130坪、母屋は24坪を越えることはなかろうとみている。[11]

高木遺跡の場合、主殿屋敷が、別区画に設けられていたか否かは別として、堀内の屋敷構えの基本的形式としては、谷内屋敷とさほど変わらぬものと考えられる。また2トレンチで、根石をもつ柱穴が検出されなかったことより、屋敷の主要部分は、北西部に集中しているとみられ、さらに、明治27年の地図等より、南側に里道がある点より、屋敷の南側に道があり、長田、香庄の集落と浅小井の集落を結ぶ間道の拠点に位置していたことが考えられる。

次に、文献等にみられる中世浅小井荘の史料としては、2点ばかりが残っている。

一つは、室町期において、善入寺領になっていることがわかる史料で、永享3年（1431）11月、幕府が、佐々木加賀入道宛に「善入寺末寺近江国浅小井荘円覚寺庵、同庵領」を「難渋山内跡」き理由で、本寺へ返付したので、すみやかに善入寺雑掌に沙汰付けされるよう命じている。（荘園志料）

あと一つは、永禄年間（1558～1570）：六角氏は浅小井の一部を甲賀郡山中氏の給地としていたが、六角承禎（義賢）は六角氏家臣伊庭氏が、この地を競望したことに対して伊庭氏を排し、山中氏に安堵している。(山中文書376)。[12]

以上のように、室町期においては、佐々木六角氏の所領になっていたことが明らかであるが、今回検出した居館跡が如何なる人物の居館であったかは不明である。また遺構に火を受けた痕跡があることや、包含層中に焼土、炭が多量に認められることより、火災によって焼失したことがうかがわれる。それが戦火によるものかは別として、浅小井荘の重要な位置を占める館跡があったことは否定できない。

なお今回の調査地は、切土箇所のみにとどまり、主要遺構は、現在残っている三輪明神の祠付近と考えられ、工事計画地内からはずれており、また他の地区も盛土対応箇所となったため、居館跡の8割近くが破壊をまぬがれている。今後、周辺地域での同様の遺構の検出が期待されるところであり、近江八幡の中世史の一端を解明する資料になれば幸いかと思う。

注

① 宮崎幹也氏の教示による

② 『滋賀県中世城郭分布調査4（旧蒲生・神崎郡の城）』（滋賀県教育委員会　1986）

③ 横田洋三　「土師器皿の分類と編年観」『平安京左京四条三坊十三町―長刀鉾町遺跡―』（『平安京跡研究調査報告第11輯』古代学協会　1984）

④ 森　隆　「滋賀県における古代末・中世土器」（『中近世土器の基礎研究Ⅱ』　日本中世土器研究会　1986）

⑤ 赤羽一郎　『常滑焼―中世窯の様相』（『考古学ライブラリー23』　ニューサイエンス社　1984）

⑥ 『内堀遺跡・後藤館遺跡発掘調査報告書』（『八日市市文化財調査報告(2)』　八日市市教育委員会　1983）

⑦ 山田謙吾　「室町期の堀に囲まれた屋敷跡―吉地大寺遺跡―」（『滋賀文化財だより』No.83　滋賀県文化財保護協会　1984）

『中主町文化財調査報告書』第1集～3集（中主町教育委員会　1984）

⑧ 『滋賀県中世城郭分布調査3（旧野洲・栗太郡の城）（滋賀県教育委員会他　1985）

⑨ 伊藤鄭爾　『中世住居史―封建住居の成立―』（東京大学出版会　1984）

⑩ ⑨と同じ

⑪ 伊藤鄭爾　「中世農村の住まい―新見荘谷内の名主屋敷を例に―」『週刊朝日百科　日本の歴史2―中世Ⅰ―2中世の村を歩く　寺院と荘園―』（朝日新聞社　1987）

⑫ 『滋賀県地名大辞典』（角川書店　1979）

高木遺跡出土遺物観察表

器種	器形	No.	法　量 (cm)	形態上の特徴	手法上の特徴	その他の特徴	遺構・備考
土師器	小皿	1 ～ 6	口径 6.4～6.5 器高 1.8～2.0	いわゆる「へそ皿」　底部外面より指おさえにより内側に凸状に押し出す　体部より口縁部にてやや外反ぎみに外上方へ伸び、口縁端部付近にて内弯ぎみにつまみ出す　端部は丸く収める	底部外面　指圧痕 体部外面　指圧痕のあとナデ 口縁部外面および内面　ヨコナデ	焼成　良 胎土　良 色調　白黄色 淡燈色	SD01
		7	口径 6.4 器高 2.0	底部が凸状に内側へ押し出されてなく水平な他は1～6と同じ	1～6と同じ	焼成　良 胎土　良 色調　白黄色	
		8 ・ 9	口径 9.0 器高 1.8	形態的には7のものをやや大きくしたもの　9は口縁端部が外側に肥厚する	1～6と同じ	焼成　良 胎土　良 色調　白黄色　淡燈色	
	中皿	10 ・ 11	口径 11.4～11.2 器高 2.0～1.8	底部は水平　口縁部はやや外反ぎみに外上方へ伸びる　端部にて外側に肥厚させ聞く　全体に扁平な感じである	1～6と同じ	焼成　良 胎土　良 色調　白黄褐色	
	鉢	12 ・ 13	口径 11.6 器高 3.3	底部はほぼ水平　体部より外上方へ直線的に伸び、口縁端部をややつまみ出し内弯させる　端部は丸く収める	1～6と同じ	焼成　良 胎土　良 色調　淡黄褐色	
	小皿	14 ・ 15	口径 6.4～7.0 器高 1.7	1～6と同じ	1～6と同じ	焼成　良 胎土　良 色調　白黄褐色　灰褐色	SD02
	小鉢	16	口径 8.0 器高 1.9	8～9と同じ	1～6と同じ	焼成　良 胎土　良 色調　白黄褐色	
	中皿	17 ・ 18	口径 11.5～12.0 器高 2.1	10～11と同じ	10～11と同じ	焼成　良 胎土　良 色調　白黄色	
	鉢	19	口径 12.0 器高 3.0	12と同じ	12と同じ	焼成　良 胎土　良 色調　淡桃色	
	中鉢	20 ・ 21	口径 13.8 器高 3.5	底部はほぼ水平　内弯ぎみに立ち上がり、口縁部にて若干内側に肥厚させやや外反する　端部内面に若干の凹面を有し端部は丸く収める	12と同じ	焼成　良 胎土　良 色調　淡桃色	
	大鉢	22	口径 17.0	形態的には12を大きくしたもの　端部内面の凹面は明瞭でII縁端部が一端外反したあと内弯する	12と同じ	焼成　良 胎土　良 色調　淡桃色	
	小皿	23 ～ 26	口径 6.4～8.8 器高 1.4～1.7	底部は水平　口縁部は外上方へ直線的に大きく開き、口縁端部にて若干つまみ出し、内面に凹面をつくる	口縁端部外面付近　内面はヨコナデ 他は指圧痕のあとナデ	焼成　良 胎土　良 色調　淡黄褐色　淡茶色	イコウ面 柱穴内
	中皿	27 ・ 28	口径 13.0～13.5 器高 2.2	28は10、11と同じ　27はII縁部が直線的に外上方へ大きく開く	10～11と同じ	焼成　良 胎土　良 色調　淡茶褐色	
	小鉢	29 ～ 41	口径 6.2～7.5 器高 1.7～2.0	1～6と同じ	1～6と同じ	焼成　良 胎土　良 色調　淡黄褐色　白黄色	
	小皿	42 ～ 57	口径 7.5～8.0 器高 2.0～2.3	7、16と同じ	7、16と同じ	焼成　良 胎土　良 色調　淡黄褐色　淡桃色	

器種	器形	No.	法　量 (cm)	形態上の特徴	手法上の特徴	その他の特徴	遺構・備考
土師器	小皿	48	口径 10.0 器高 2.1	9と同じ	9と同じ	焼成 良 胎土 良 色調 淡茶褐色	
	大皿	49 ～ 51	口径 13.5～14.2 器高 1.7～2.0	底部は若干内へくぼむものと水平のものがある 口縁部は直線的に外上方へ大きく開き端部を若干つまみ出し内寄させ端部内面に凹面をつくる	10、11と同じ	焼成 良 胎土 良 色調 淡白橙色 白茶色	
	椀	52・54 ～ 55・57 ・58	口径 12.0～13.0 器高 2.7～3.5	12、13と同じ	12、13と同じ	焼成 良 胎土 良 色調 淡桃色 白黄色	
		53	口径 14.0 器高 3.0	20、21と同じ	20、21と同じ	焼成 良 胎土 良 色調 淡桃色	
	大椀	56 ・ 59	口径 16.7～17.0 器高 3.2～3.5	22と同じ	22と同じ 59は内面見込み部がハケ目調整	焼成 良 胎土 良 色調 淡桃色	
	小皿	60	口径 8.0 器高 1.2	底部水平 口縁部は直線的に外上方へ開く 端部は丸く収める	不明	焼成 良 胎土 良 色調 白黄色	SE02
		61 ・ 62	口径 9.2 器高 1.3	底部はほぼ水平 口縁部は内寄ぎみに外上方へ立ち上がり端部にて直立ぎみにつまみ出す 端部は丸く収める	底部外面 指圧痕のあとナデ 他はヨコナデ	焼成 良 胎土 良 色調 白黄色	
黒色土器	椀	63	口径 15.2 器高 4.6 高台径 5.5 高台高 0.5	口縁部は体部より内寄ぎみに外上方へ立ち上がり、口縁端部付近にて外側を肥厚させ体部と口縁部の境に稜を成す 口縁端部内面に沈線をめぐらす 高台部は外にふんばる断面逆台形状のものを貼りつける	体部外面 指圧痕のあとナデ 体部下半に放射状のヘラ磨きを施す 口縁部外面はヨコナデ 体部内面は磨きナデ 花弁状の暗文を施す	焼成 良 胎土 良 色調 外面白黄色 内面黒色	
土師器	小皿	64 ～ 66	口径 8.6～9.2 器高 1.5～2.4	65は61、62と同じ 64、66は口縁端部をつまみ出さず丸く収める 66は底部が丸底	64、65は61、62と同じ 66は外面に指圧痕が残る	焼成 良 胎土 良 色調 白黄色 灰色 淡茶色	SD01北側 イコウ面
	椀	67	高台径 6.0 高台高 0.8	断面逆台形状の外側に1段つまみ出し段を成す高台を貼りつける	内外面に緑釉を施す	焼成 良 胎土 良 色調 淡赤褐色	
天目茶碗	小鉢	68	口径 9.7 器高 3.0	底部水平 体部よりやや内寄ぎみに外上方へ延び、口縁端部にて若干外へつまみ出し外反する 端部は丸く収める	底部外出糸切痕 他はナデ 口縁部内外面のみに黒褐色の釉を施す つけがけ	焼成 良 胎土 良 色調 淡白茶色	
	椀	69	口径 11.0	体部は内寄ぎみに上方へ延び口縁部にてつまみ出し若干外反させる 端部はややとがりぎみに収める 体部と口縁部の境に明瞭な稜を成す	内外面ともナデ 体部下半近くまで黒茶褐色の釉を施すつけがけ	焼成 良 胎土 良 色調 淡白茶色	
瀬戸焼	おろし皿	70	口径 15.0 器高 3.8	底部水平 体部より内寄ぎみに立ち上がり、口縁端部にて外側を折り返したように肥厚させる 端部は丸く収める	体部外面ヨコナデ 他は不明 底部は糸切りか 底部外面以外に半透明の緑色釉が施される 内面見込み部分に格子状の刻み目を施す	焼成 良 胎土 良 色調 白灰色	SD01南側 イコウ面
	鉢	71	口径 18.8	体部は内寄ぎみに外上方へ立ち上がり、口縁部にてくの字状に屈曲し、端部を肥厚させる 口縁部内面は一段段を成し、受け口状になる	内外面とも革ナデ 内外面とも体部下半近くまで半透明の緑色釉をつけがけする	焼成 良 胎土 良 色調 白灰色	
		72	口径 34.0	体部は下半で若干内寄したあと口縁部まで直線的に外上方へ開く 口縁部は古墳時代の	内外面とも革ナデ 体部中位まで、半透明のぞうげ色の釉をつけがけする	焼成 良 胎土 良 色調 ぞうげ色	

器種	器形	No.	法量(cm)	形態上の特徴	手法上の特徴	その他の特徴	遺構・備考
				須恵器杯身のように受け部をもうける　端部はつまみ出す程度で、受け部の間に凹面を成す	体部内面下半に、格子状の刻み目をヘラ状工具で施す		
供膳焼	鉢	73・74	口径　30.0	体部は直線的に外上方へ開く口縁部は若干外につまみ出し外反する　端部上面に面を成す	内外面とも革ナデか 内面に4～5条を一帯とするクシガキ目を施すカキ目の数は少ない	焼成　良 胎土　良 色調　淡赤褐色	
	甕	75	口径　30.0	口縁部はくの字状に屈曲したあと直立し、端部外面を下横方向につまみ出す　口縁部外面に3個の円形浮文と飛雲文？を付す	ヨコナデ	焼成　やや甘い 胎土　良 色調　淡灰色	
		76	口径　29.4	肩部より内傾ぎみに立ち上がり、頸部にて大きく外反する口縁部は、アルファベットのN字状を成すが簡略化している　端部はやや外反ぎみに丸く収める	外反部内面に指圧痕　他はナデ	焼成　良 胎土　良 色調　紫褐色	SE03 柵溝内

Ⅲ　近江八幡市観音堂遺跡 他

供養塚古墳および古代から中世における馬淵荘の集落遺構

1．はじめに

本報告は、昭和61年度県営ほ場整備事業（桐原馬瀬Ⅱ期地区第11号分水管網敷設）に伴う近江八幡市観音堂遺跡の発掘調査によるものである。

観音堂遺跡は、供養塚古墳を始めとする千僧供遺跡群の東部一帯で、厳密には、供養塚古墳、住蓮坊古墳、岩塚古墳の県指定史跡と堀ノ内遺跡[1]、御旅前遺跡[2]に分れる。しかし、トレンチが各遺跡に重復することもあり、事業名の観音堂遺跡に統称することとした。

調査は、昭和60年度県営ほ場整備事業の継続事業によるもので、遺跡の西部は、勧学院遺跡[4]、山中堂遺跡[5]をはじめ、白鳥川河川改修事業に伴う発掘調査で検出された遺構群[6]に関連するものである。

2．位置と環境

観音堂遺跡は、滋賀県近江八幡市千僧供町地先に所在する。千僧供町は、近江八幡市の南西部にあり、集落の北を国道8号線が通り、東は、瓶割山が、西は、日野川が流れる標高94～99m前後を測る地で、集落内を八日市市に端を発する白鳥川が縦断している。

周辺一帯は、広義に千僧供遺跡群と称され、県指定史跡の供養塚古墳、住蓮坊古墳、岩塚古墳が点在し、他に、トギス塚古墳、ラカン塚古墳を始めとし、瓶割山の西麓に大小10数基にわたる円墳が群集している[7]。

発掘調査は、昭和56年度より、毎年、県営ほ場整備、白鳥川河川改修事業等に伴い行われており、概ね遺跡の広がり等は把握されている。遺構は、縄文時代を除いて、弥生時代中期から室町時代にかけて存在し、とくに、弥生時代後期にかけては、遺跡の西側、および西南部に集中し、方形周溝墓を始めとする墓域と、五角形住居等の特異な形態をもつ竪穴住居の広がる居住域[8]とが明瞭に遺存している。

古墳時代前期には、先述の古墳群を囲むように、竪穴住居等が検出されており、この時期にも一大集落が形成されていたことがわかる。

白凰時代から奈良時代にかけては、東山道の通過地であり、又、蒲生、日野、鈴鹿へと抜ける間道の始発点にあたることより、重要な処点となっている。調査の結果、昭和56年度には、御館前地区で、「西殿」「大」などと書かれた墨書土器や円面硯が出土しており[9]、昭和57年度には、榎木立地区で、東西と南北二方向の方位を持ち、各々延長100m以上の直交する幅約1mの溝跡と、同方位の掘立柱建物、側板に墨書番号を有する角井戸跡などが検出され、掘ノ内地区では、多数の緑釉、灰釉陶器が出土している。これらの遺物や遺構から、官衙的色彩の濃い遺跡とみられ、蒲生郡衙の推定地とされている[10]。

平安時代から鎌倉時代にかけては、承久3年尊長法印より道覚親王に譲与された「私領所々」のうち鳥淵荘が見える他、「吾妻鏡」建保6年11月5日条に見える佐々木広綱に与えられた松伏別荘が当荘を指すとの説があるなど文献にかなり登場してくる[11]。

中世以降は、佐々木氏、京極氏の領地となり、織田信長が安土に城を構えるまでは、家臣の柴田勝家が瓶割山に城[12]を築き、佐々木氏と相対する等、西南部の拠点となる。

3．調査経過　（第1図）

今年度の調査地点は、近江八幡西部地区桐原・馬瀬2期工区第11号分水管網計画箇所の白鳥川より東岸にあたる。国道8号線、および、県道日野一八幡線の間の各々農道・市道路肩寄りに敷設する農業用水のパイプライン

A…住蓮坊古墳
B…供養塚古墳
C…岩塚古墳
D…椿神社
6−3トレ
6−2トレ
7−2トレ
7−1トレ
6−1トレ
5トレ
1−1トレ
1−2トレ
15トレ
17トレ
3トレ
2−2トレ
2−1トレ
14トレ
18トレ
16トレ
4トレ
8トレ
9トレ
20トレ
19トレ
25トレ
21トレ
23−2トレ
23−1トレ
22トレ
10トレ
12トレ
11トレ
13トレ
27トレ
26トレ
千僧供町
新白鳥川
0
100
200m

第1図　トレンチ位置図

で、路肩下よりパイプ埋設の際掘り込まれる幅1m、深さ75cmから1mの範囲である。調査地内には、県指定史跡の供養塚古墳、住蓮坊古墳、岩塚古墳があり、あわせて、千僧供廃寺、蒲生郡衙推定地等が含まれること、ならびに、中世においては、東寺領の荘園支配の記録がみられることより、遺跡の範囲等を確認するため路線全てを調査することにした。調査は、まず、1トレンチ（支用51号）・2トレンチ（幹用11号）・3トレンチ（幹用12号）・4トレンチ（支用54－4号）が、時期を同じくして、近江八幡市教委による上水道工事に伴う発掘調査と併行する関係上、先行して行うことになった。各トレンチは、機械力により、耕作土を幅4～5m除去したあと表土除去、遺構検出、写真撮影、実測作業の順に行った。とくに、耕土直下で遺構面が露呈する箇所や完形品の土器が散在する箇所では、許容範囲内で遺構検出等を行った。

各トレンチの状況は以下の通りである。

1トレンチは、支用51号にあたり、千僧供町から岩倉町に抜ける旧道の南にあたる。東側は削平が著しく、遺構の遺存は良くなかったが、西側（1－2トレンチ）では、掘立柱建物を始めとする遺構を検出した。なお、道をはさんで、敷設される支用51－1号については、遺構面が、地面より1.5～2mと深く影響範囲外であるため調査をしなかった。

2トレンチは、幹用11号にあたり、1－2トレンチで検出した掘立柱建物等と関連する溝、柵列等を検出した。ただし、北側の2－2トレンチは削平が著しく、方形周溝墓の周溝の一部以外は、遺構の遺存は良くなかった。

3トレンチは、幹用12号にあたり、耕土直下で遺構面が露呈するが、削平著しく、遺構は遺存していなかった。

4トレンチは、支用54－4号にあたる。削平が著しく、溝跡と岩干の柱穴の痕跡を確認するにとどまった。

5トレンチは、支用52－1号にあたる。トレンチ中央より東側で遺構が遺存していたが、水田側はかなり撹乱されている。

6トレンチは、支用52号にあたる。削平を受けており、遺構は遺存しない。東側で住蓮坊古墳の北側周濠を確認したが、昭和58年度に調査を行っており、今回は省略した。

7トレンチは、支用53号で、当遺跡の北限にあたる。削平が著しく、溝と若干の柱穴の痕跡を認めるにとどまった。

8トレンチは、支用54－1号、54－2号にあたる。東側は削平著しく溝と若干の柱穴を検出したにとどまったが、中央より西側で、竪穴住居3棟、土坑1基を検出した。

9トレンチは、支用55号にあたる。全面撹乱を受けており、盛土よりなる水田である。

10トレンチは、支用54－3号にあたり、供養塚古墳の北側、および西側の周濠内にあたる箇所である。東側は、昭和58年度の調査で検出済みである。

11トレンチは、全線道路の側溝を造る際の工事で撹乱削平されており、遺構は遺存していない。

12トレンチは、支用56－1号にあたり、最も遺構の遺存が良かった箇所である。これより東側は一段高く、遺構の広がりが予想される。

13トレンチは、支用56－2号で、耕土下全面砂礫層で、一部上取りの撹乱があり、遺構は認められなかった。

14トレンチは、支用56号にあたり、13トレンチと同様の様相であった。

15トレンチは、幹用11号の南半分で、2－1トレの溝の延長を確認する意味で試掘したが、51－1号同様、耕土下1.5m～2mで遺構面にあたるが、包含層はスクモ層状の黒色粘質土で、遺構の遺存は認められなかった。

16、17トレンチは、幹用9号にあたる。削平著しく遺構は遺存していなかった。

18、19トレンチは、幹用10号にあたる。削平著しく、溝と若干の柱穴を確認するにとどまった。

20トレンチは、支用47号にあたるが、攪乱著しく、14トレンチと同様の様相であった。

21トレンチは、幹用8－3号の東西線にあたる。当調査地区の南限にあたる。全面砂礫層で遺構は遺存していなかった。

22トレンチは、幹用7号で、東端で大溝が認められた以外は、西側は、旧白鳥川の河川敷で、攪乱著しく遺構は遺存していない。

23トレンチは、幹用8－1号にあたる。昭和56年度の調査の際、「西殿」の墨書土器が出土しており、また椿神社北側の農道敷設の際の発掘調査で、大型の柱掘形をもつ掘立柱建物が検出されており、関連する遺構の存在が予想されたが、削平著しく、溝、および、竪穴住居、柱穴の痕跡を認めるにとどまった。

24トレンチは、幹用5号にあたる。中央部で竪穴住居、掘立柱建物、溝を確認したが、西側は削平著しく遺構は遺存しない。

25トレンチは、支用43号にあたる。椿神社側で掘立柱建物を検出した以外は削平を受けており遺存は良くない。

26トレンチは、白鳥川沿いの支用40号にあたる。トレンチ北端で掘立柱建物を検出したが、遺構の遺存は良くない。

27トレンチは、支用42号にあたる。26トレンチの関連遺構を想定したが、削平を受けており、遺構は認められなかった。

以上、順次トレンチを設定し、10月8日より調査を始め、12月26日にトレンチの埋戻しを全て終り、調査を終了した。

なお、それぞれのトレンチは、10、23、24トレンチを除いて、土地改良二課が設定した掘削域の中心線を基準に実測を行った。10トレンチについては、昭和58年度の供養塚の発掘調査の際に試掘トレンチに設けた基準杭を0としてトラバース測量を行った。23・24トレンチは、白鳥川河川改修に伴う発掘調査で検出された遺構と関連するものとみなし、白鳥川における調査トレンチ（昭和61年度）のトレンチ基準線を延長して割り付けを行った。

4．検出遺構

1－1トレンチ（図版二一・二八）

基本層序は、第1層耕土、以下黄褐色粘性砂質土である。遺構面は黄色粘質土で、標高 97.10m前後を測る。著しく削平を受けており遺構の遺存は良くない。ここでは、トレンチ中央付近で溝1条、掘立柱建物1棟、土坑もしくは平窯1基を検出した。

SD01　**SD01**

幅10m、深さ1mのV字型の掘形をもつ人工の溝と思われる。埋土は黒色粘質土および黒灰色粘質土で、南北に流れる。遺物は遺存しない。

SB01

東西2間分の柱穴を検出したが、規模は不明である。柱間距離は、8尺等間で、柱穴は、一辺25cm、深さ30cm前後の方形である。柱穴内より土師器皿の破片が出土している。時期は鎌倉時代頃とみられる。

SK01

トレンチ西端に位置し、遺構の北側部分を検出した。幅2m、長さ2m以上の楕円形掘形をもつ土坑で、深さは、15cmである。全体に焼土、灰、炭を包含しているが、床面の焼土痕が明瞭でないため、露天で土器を焼いた焼成土坑とも思われる。土坑南東隅より、常滑焼の大甕の破片が並べられた状態で出土している。時期は、鎌倉

時代頃とみられる。

1－2トレンチ（図版二一）

基本層序は、耕土、黄褐色粘質土である。遺構面は、黄色粘性砂質土および、黒色粘性砂質土が堆積した旧河道上にあり、標高 97.60m前後を測る。ここでは、掘立柱建物３棟、井戸１基の他、土坑状遺構、溝状遺構、Pitを検出した。

東西２間分の柱穴を検出したが、規模は不明である。柱間距離は７尺５寸等間で、柱穴は径30cm、深20cm前後の円形である。

SB02

東西４間分の柱穴を検出したが、規模は不明である。柱間距離は７尺５寸等間で、柱穴は径40cm、深さ30cm前後を測る円形である。

SB03

東西３間分の柱穴を検出したが、規模は不明である。柱間距離は、９尺等間で、柱穴は径20cm、深さ50cm前後を測る円形である。

SE01

ＳＢ０３と重復する位置にあり、旧河道の黒色粘性砂質土の埋土を掘り込む。径 1.2m、深さ 1.5mを測り、２段掘りになっている。井戸枠は遺存していない。底部中位より円形曲物柄杓が１点出土している。

2－1トレンチ（図版二二）

基本層序は、耕土、暗茶褐色粘性砂質土である。遺構面は、黄茶褐色粘性砂質土で、標高97.6m前後を測り、遺構の遺存は極めて良好である。ここでは、溝２条、柵１基、土坑状遺構４基、井戸１基を検出した。

SD01

幅約２m、深さ約 0.5mの旧条里に平行し、トレンチ中央部で終わる南北溝で、南北約40mを検出した。掘形は２段よりなり、東側が幅 0.5m前後１段下がり、犬走り状になっている。埋土は、３層からなり、上層より暗茶褐色粘性砂質土、黒灰色砂質土、黒褐色粘性砂質土である。２層目と３層目の間に厚さ２～３cmの薄い砂礫土層があり、これより上層で多量の土器を包含する。上器は、いずれも完形品で土師器皿、黒色上器が、溝の中央より溝が終わる最北端にかけて集中して出土した。土器の出上状況より上流もしくは、東部生活面から流れてきたものが堆積したものと考えられる、上層に堆積している点より、溝が埋没する時期に概当すると考えられる。埋没時期は13世紀初頭頃とみられる。

SA01

ＳＤ０１の東に位置し、溝と平行し、溝の北端で西にＬ字型に折れる柵で、溝より約 0.3m隔ててある。柱穴は20cm前後の円形で、深さは20cm前後を測る。柱間距離は６尺５寸と７尺等間である。

SD02

トレンチ北に位置し、やや東へ振る南北溝で幅40cm、深さ10cm前後を測る。埋土中より古式土師器片の出土をみる。

SE01

トレンチ南に位置し、ＳＤ０１を切り込んでいる。径２m、深さ１mを測る。

ＳＫ０１

ＳＤ０１の中央よりやや北に位置し、犬走り状の段の部分を切り込んでいる75cm× 100cmの長方形の土坑である。

ＳＫ０２

ＳＤ０１の北端に位置する不定形の土坑で、黒色粘性砂質土の埋土である。古式土師器を包含しており、一部焼土状のものが認められる。範囲外であるため掘り込みはしなかった。

ＳＫ０３

ＳＤ０１の北端に隣接する径１ｍ深さ30cmの円形の土坑で、埋土は黒褐色粘性砂質土である。断面は袋状になっている。遺物の出土はなかった。

２－２トレンチ（図版二三）

基本層序は、耕土、黄茶色粘質土である。遺構面は、黄茶褐色粘性砂質土で標高97.4ｍ前後を測る。柱穴数基と方形周溝墓の周溝を検出した以外は削平著しく遺存は良くない。

ＳＧ０１

方形周溝墓の周溝の北東隅コーナー部で、深さ約80cm、溝幅は不明である。隣接して西側の農道下において上水道工事に伴う近江八幡市教育委員会の発掘調査で、これに続く北辺と南辺の周溝を検出しており、周溝内より土器が出土しており方形周溝墓であることが判明した。

４トレンチ（図版二四）

耕土直下で遺構面に達し、水田側はかなり削平されている。遺構面は、黄色粘性砂質土からなり、ここでは、溝状遺構６条、柵列１基のみで、若干の柱穴が検出されたが、掘形の底が残るのみである。標高は概ね96.5ｍ前後を測る。

ＳＤ０１

Ｎ－35°－Ｗ方向に流れる南北溝で、溝幅1.75ｍ、深さ80cmを測る。埋土は４層からなり上層より、黒茶褐色粘性砂質土、黒色粘性砂質土、黒色粘性砂質土と黄色粘性砂質土の混合土、黒灰色粘質土の順である。遺物等は包含していなかった。

ＳＤ０２

幅約 1.5ｍ、深さ60cmを測るが、埋土は、褐色砂質土で、撹乱による自然流路とみられる。

ＳＤ０３

ほぼ南北方向に流れる溝で、幅1.25cm、深さ約60cmを測る。埋土は２層から成り、上層が黒色粘性砂質土、下層が黒色粘性砂質土と黄色粘性砂質土の混合土である。底より奈良時代中期の杯身が１点出土した。

ＳＤ０４・０５

ほぼ東西方向に平行して流れる溝で、ＳＤ０４が幅75cm、深さ30cm、ＳＤ０５が幅１ｍ深さ40cmを測る。両者の間隔は約１ｍである。遺物等の出土はない。埋土は、両者とも黒褐色粘性砂質土１層のみである。

ＳＤ０６

Ｎ－30°－Ｅ方向に流れる溝で、幅 2.8m、最深部で60cmを測る。埋土は、２層から成り、上層が黒色粘性砂質土、下層が黒色粘性砂質土と黄色粘性砂質土の混合である。遺物等の出土はない。

ＳＡ０１

ＳＤ０６と平行する柵列とみられる。３柱穴を検出した。柱穴の径は40cm、深さ15～20cmを測る。柱穴間の距離は、各柱穴が１ｍ20cm、中を飛ばした場合２ｍ40cmを測る。

５　トレンチ（図版二五）

一辺40～50cm、深さ20cm前後の方形掘形の柱穴を３基検出した。棟方向はほぼ北をとる。規模等は不明である。

ＳＢ０２

一辺50～60cm、深さ20cm前後の方形掘形の柱穴を２基検出した。棟方向はほぼ北をとる。規模等は不明である。

ＳＫ０１

一辺約80cm、深さ40cmを測る隅丸方形の掘形から成る土坑で、埋土中より布留式土器片が出土した。

ＳＤ０１

Ｎ－65°－Ｗの方向に流れる東西溝で、幅約８ｍ、深さ１ｍ以上を測る。埋土は黒色粘質土のみである。遺物等の出土はない。

７　トレンチ（図版二六）

耕土直下で遺構面に達し、遺構の遺存は良くない。遺構面は、暗灰茶色粘質土で、ここでは、溝状遺構９条を検出した。

ＳＤ０１

東西溝で、幅25cm、深さ５cmを測る。東側は削平により消滅している。埋土は、茶褐色粘性砂質土である。

ＳＤ０２

南北溝で、幅50cm、深さ５cmを測る。埋土は黒茶褐色粘質土で、遺物は出土していない。

ＳＤ０３

南北溝で、幅50cm、深さ５cmを測る。埋土は黒茶褐色粘質土である。

ＳＤ０４

西へ若干振る南北溝で、幅60cm、深さ５cmを測る。埋土は黒茶褐色粘質土である。

ＳＤ０５

東西溝で、幅 0.6～１ｍ、深さ５cmを測る。埋土は黒褐色粘質土である。

ＳＤ０６

東西溝で、幅２ｍ、深さ５cmを測る。埋土は黒褐色粘質土である。

ＳＤ０７

ほぼ北を向く南北溝で、幅約４ｍ、深さ50cmを測る。埋土は黒褐色粘質土である。須恵器、土師器片が少量出土している。時期は奈良時代中期頃とみられる。

ＳＤ０８・０９

平行する南北溝で、ＳＤ０８が幅75cm、深さ15cm、ＳＤ０９が幅１ｍ25cm、深さ10cmを測る。埋土は黒褐色粘質土である。

8 トレンチ（図版二七）

水田側で、耕土直下において遺構面に達するが、道路側は、若干高くなり包含層がみられる。全体に東側は、遺構の遺存が悪いが、中央より西にかけて、遺構の遺存は良好である。遺構面は、東側が黄茶色粘性砂質土で、中央より西にかけて、黒色砂質土となり、西端で黒茶色粘性砂質土に変わる。ここでは、溝2条、土坑2基、竪穴住居3棟を検出した。標高は概ね、97.2～97.6mを測る。

SD01

トレンチ西端に位置するE－10°－S方位に流れる東西溝で、幅75cm、深さ40cmを測る。埋土は、2層からなり上層が黒茶褐色粘性砂質土で、下層が黒色粘性砂質土である。下層より鎌倉時代頃の土師器皿の破片の出土があった。

SD02

トレンチ東に位置するN－15°－E方位に流れる南北溝で、幅約90cm、深さ30cmを測る。埋土は、黒色粘性砂質土である。

SK01

SH01に伴う不定形の土坑で、埋土中に土師器甕を包含する。埋土は黒色粘性砂質土である。

SK02

SD01に隣接しており、一辺1m25cmを測る隅丸方形の土坑で、深さは約50cmを測る。上面は後世の自然流路河川により削平されているが、埋土中に多量の土器が包含する。土器は、古式土師器のみで、甕、壺、高杯、小型丸底壺である。時期は古墳時代初頭とみられる。

SH01

東西辺5mを測る竪穴住居で、北側の一部を検出した。5m四方の方形の掘形から成る竪穴住居と考えられる。主柱穴は1基のみ検出した。柱穴の径は25cm、深さ20cmを測る。SK01を伴い、出土遺物より古墳時代後期末頃とみられる。

SH02

東西辺5mを測る方形掘形から成る竪穴住居で、N－30°－Wの方位を向く。東側をSH01が切っており、廃絶後、奈良時代中期の柱穴が掘り込まれている。北側にカマドが取り付けられており、煙道が遺存する。カマドは、上部を奈良時代の柱穴に切られており、壁が散在し、底部のみ遺存する。埋土中に焼土・炭・灰が堆積しているが、カマドのものか、住居の火災によるものかは不明である。カマド周辺より須恵器杯身2点とカマドの支柱石1点が出土した。時期は、出土遺物より古墳時代後期末頃とみられる。

SH03

床面のみで規模は不明である。床は黄色粘土の貼り床で厚さ3～5cmを測る。北東隅に焼土痕が遺存しており、竪穴住居と考えられる。主柱穴等は不明である。床面直上より古墳時代後期頃の須恵器杯身が出土した。

12 トレンチ（図版三〇）

基本層序は、第1層耕土、赤褐色粘性砂質土層、暗茶褐色粘性砂質土層で、南側は、さらに落ち込んでおり、4層目が、黒茶褐色粘性砂質土層、茶褐色焼土層、黒色粘性砂質土の順から成り、3層目と4層目以下に多量の遺物を包含する。3層目は、平安時代後期から13世紀終りにかけて、4層目以下は、弥生時代後期、古墳時代後期、奈良時代中期の遺物を包含する。遺構面は黄茶色粘性砂質土で標高97.7mを測る。遺構の遺存は極めて良好

で、掘立柱建物３棟、井戸状遺構１基、の他多数の柱穴を検出した。12トレンチ周辺は、小字名で「北ウラ」又は「クエン坊（久遠坊か？）」と称される地である。

ＳＢ０１

南北方向に梁間が向く建物で、柱穴２間分を検出した。建物は東南に延びるものと思われる。柱間距離は、２ｍ25cm、２ｍ50cmを測る。柱穴は径30～40cm、深さ20cm前後の不定形の掘形である。

ＳＢ０２

棟方向がＮ－17°－Ｗに振る南北５間、東西１間以上の掘立柱建物で、建物は西側に延びる。柱穴は、50～75cm四方の隅丸方形の掘形で、深さ30～50cmを測る。柱痕は径15～20cmを測る。掘形埋土は、黒色粘性砂質土と黄色粘性砂質土の混合土である。柱間距離はそれぞれ１ｍ50cmを測る。

ＳＢ０３

梁間方向がＮ－４°－Ｅに振る掘立柱建物で南北２間分の柱穴を検出した。建物は東西棟と考えられ、東に延びると考えられる。柱穴は、径30cm、深さ35～50cmを測る円形の掘形で、埋土中より平安時代後期の土師器皿が出土した。柱間距離は５尺（１ｍ51cm）等間を測る。

ＳＥ０１

ＳＢ０２とＳＢ０３の間に位置する。径２ｍ15cm、深さ約75cmを測る。北側にテラス状の浅い落ち込みをもつ。埋土は３層からなり、上層より黒茶褐色粘性砂質土、黒灰色粘質土、黒色粘質土で上層及び２層目に多量の遺物を包含する。遺物は平安時代から鎌倉時代初頭頃のものとみられる。井戸枠等は遺存しない。

23－１トレンチ（図版三一）

耕土直下にて遺構面に達する。遺構面は黄褐色粘性砂質土で標高98.7ｍを測る。ここでは、竪穴住居１棟、溝状遺構３条、掘立柱建物跡１棟を検出した。

ＳＨ０１

一辺６ｍ四方、深さ約20cmを測る竪穴住居で、棟方向は、ほぼ北を向く。主柱穴は１基のみ検出した。柱穴は径30cm、深さ約20cmを測る円形の掘形である。周壁溝等はなく、又炉等は不明である。埋土は黒褐色粘性砂質土１層のみで、多量の遺物を包含する。時期は古墳時代初頭とみられる。

ＳＤ０１

ＳＨ０１の南に位置するほぼ東西に流れる溝で幅60cm、深さ30cmを測る。

ＳＤ０２

ＳＤ０１に平行するほぼ東西に流れる溝で、幅40cm、深さ20cmを測る。

ＳＤ０３

ほぼ東西に流れる溝で、幅60cm、深さ20cmを測る。

ＳＢ０１

トレンチの南に位置する南北５間、東西２間以上の掘立柱建物で、ほぼ北向きに棟方向をもつ南北棟とみられる。柱穴は４基検出したが、いずれも一辺70cm四方の方形掘形である。深さは40cm前後で、埋土は、黒色粘性砂質土と黄色粘性砂質土の混合土である。柱痕は、径30cmで、暗灰茶色粘性砂質土である。柱間距離は、2.40ｍ等間を測る。

23－2トレンチ（図版三二・三三）

耕土直下で遺構面に達する。遺構面は黄茶褐色粘性砂質土で、標高98.5mを測る。ここでは、掘立柱建物2棟、土坑状遺構2基の他、用途不明の土坑状遺構数基を検出した。

SB01

N－22°－Wの方向に棟をとる南北5間、東西1間以上の南北棟からなる掘立柱建物である。柱穴は、径20cmもしくは一辺15～20cm、深さ10～20cmの円形もしくは方形である。柱間距離は、南北が、南から3間目のみ8尺で、あとは6尺5寸等間を測る。東西は、6尺5寸を測る。南北で2棟に分かれていたとも考えられる。時期は不明である。

SB02

SB01の北に位置し、同方向に棟をとる南北3間、東西1間以上の東に展開する掘立柱建物である。柱穴は径20cm、深さ20cmを測る円形で、柱間距離は、南北が、7尺5寸等間を測る。時期は、SB01と同時期とみられるが不明である。

SK01

トレンチ南に位置する不定形の土坑で、深さは20cm前後を測る。埋土は黒色粘性砂質土で多量の遺物を包含する。時期は古墳時代初頭とみられる。

SK02

SB01に隣接する一辺80cm前後の方形掘形の土坑で、深さ50cmを測る。埋土は、黒色粘性砂質土で、高杯、甕が出土した。時期は古墳時代初頭とみられる。

24トレンチ（図版三四）

基本層序は、第1層耕土、以下盛土、黄褐色粘質土である。遺構面は、黄色粘質土で標高98.3mを測る。西側は、1m近く落差があり、削平により消滅している。ここでは、掘立柱建物1棟、竪穴住居1棟、溝状遺構2条を検出した。

SB01

東西2間分の柱穴を検出した。柱穴は、径30～40cm、深さ30cmを測る円形で、柱間距離は、7尺等間である。

SH01

規模は不明、深さ約20cm前後を測る。周壁溝等はない。埋土は黒褐色粘性砂質土1層のみで、古墳時代初頭頃の古式土師器を包含する。

SD01

東西溝で、幅1m、深さ約30cmを測る。埋土は黒色粘性砂質土で、上層に弥生後期の壺を検出した。

SD02

SD01に平行する東西溝で、幅60cm、深さ20cmを測る。埋土は黒色粘性砂質土で、鎌倉時代終りの黒色土器椀、土師器皿を包含する。

25トレンチ（図版三五）

耕土直下にて遺構面に達する。遺構面は黄茶褐色砂質土で、標高98.0mを測る。西側は削平攪乱されており遺構は遺存しない。ここでは、掘立柱建物1棟を検出した。

ＳＢ０１

ほぼ北向きに棟方向をとる南北２間以上、東西１間以上の掘立柱建物である。柱穴は、径35～40cm、深さ15～20cmを測る円形掘形である。柱間距離は、東西南北とも２ｍ25cmを測る。

26 トレンチ（図版三五）

基本層序は、第１層耕土、以下盛土で、遺構面は、黄色粘性砂質土層で標高96.7ｍを測る。ここでは、掘立柱建物２棟、溝状遺構１条を検出した。

ＳＢ０１

柱穴３基を検出したが規模は不明である。柱穴は径50～60cm四方、深さ20cmを測る方形掘形で、柱間距離は、１ｍ50cmを測る。柱穴埋土は、黒色粘性砂質土と黄色粘性砂質土である。

ＳＢ０２

ＳＢ０１の北に隣接する南北３間以上、東西１間以上を測る総柱の掘立柱建物で、ほぼ北向きの棟方向をとる。柱穴は、70～80cm四方、深さ10cm前後の方形掘形で、柱間距離は中が1.25ｍ、両側が約１ｍを測る。

ＳＤ０１

ＳＢ０２と平行する溝で、東西溝である。溝幅70cm、深さ20cmを測る。埋土は黒色粘性砂質土のみである。

10トレンチ・供養塚古墳（図版二九）

県指定史跡の供養塚古墳の北側周濠内と西側周濠内で、基本層序は、耕土、茶褐色粘性砂質土、黒色粘性砂質土である。遺構面は灰色粘質土および灰色砂礫土である。北側周濠のうち西側よりのＡ－Ｂ、Ｂ－Ｃ、Ｃ－Ｄ間において、黒色粘性砂質土上に人頭大の自然石の散乱を認めた。形状より、墳丘裾部に巻かれた葺石とみられるが、石の間に埴輪片が包含する他、奈良時代中期から平安時代初頭にかけての遺物が包含しており、葺石が崩れて流出してきたものとみられる。又、Ｄ－Ｅ間において底に径５～10cm大の礫が敷きつめられたような状態で検出されたが、人工的なものか否かは不明である。西側周濠内は、一部葺石の流出が認められた以外は、ほとんど平坦面である。

5．出 土 遺 物

遺物は、特殊なものとして、１－２トレＳＥ０１出土の円形曲物と、10トレ供養塚の埴輪を除いてほとんど土器で占める。時代別にみると、古墳時代初頭の古式土師器、古墳時代後期末から７世紀にかけての須恵器、土師器、奈良時代中期の須恵器、平安時代末から13世紀初頭にかけての土師器、黒色土器、瓦器に大別できる。各器種、器形、形態上の特徴、手法上の特徴は、別表の遺物観察表の通りである。

この項では、主に２－１トレ・12トレ・10トレ供養塚の遺物を説明する。

２－１トレンチの出土遺物のほとんどは、ＳＤ０１より出土したものである。大半が完形品、もしくは、それに近いもので、土師器皿と黒色土器椀の２種類に限られる。

土師器皿は、概ね１段のナデにより引き起こされ内弯するもので、法量８～９cm器高 1.5cm前後のものである。色調は淡茶褐色、赤褐色、白黄色があるが、砂分は少なく精良なものが多い。全体に口縁部を初め歪んでいるものが多い。横田洋三氏の編年[13]でいうＡ$_2$－４・５、Ａ$_3$－４に併行するものとみられ、森隙氏の編年[14]のⅡ－５段階に相当するものとみられる。

黒色土器椀は、すべて在地の近江産黒色土器である。法量15cm前後、器高 4.5cm前後を測る。器壁はやや薄手で、体部外面のヘラ磨きはほとんど省略化されている。内面の放射状花弁暗文も省略されるものが数点みられる。高台部はやや扁平化の傾向にあり、胎土も砂分の多いものが認められる。大橋信弥氏の編年[15]でいう手原遺跡出土のＳＤ０６段階、森隆氏の編年のⅡ－４・５段階に相当する。

実年代でいうと13世紀初頭に位置づけられる。

12トレンチの出土の遺物は、古い段階のものでは、弥生時代末から古墳時代初頭のもの、古墳時代後期・奈良時代中期のものがあるが出土点数は極めて少ない。大半を占めるのは、平安時代末から13世紀初頭にかけてのもので、土師器皿・黒色土器椀、瓦器椀、土師器台付皿である。このうち土師皿の占める割合が最も多く全体の８割を占める。

土師器皿は、古い段階のものでは、いわゆるての字状口縁をもつ小皿の最終段階のものが２・３点出土している。全体にやや器壁が厚いが、胎土は極めて精良である。森隆氏編年のⅠ－４段階、横田洋三氏編年のＣ－４タイプに併行するものである。実年代は12世紀初頭に位置づけられる。

あと大半を占めるのが、口縁部がややつまみ出され、外側に若干外反するもので、主にＳＥ０１周辺より出土している。形態上客観的にみると森隆氏編年のⅡ－２からⅡ－５段階に属する。あと一つは、口縁部が外反せず内弯ぎみに外上方へ開くタイプで、横田洋三氏編年のA_2－４・５、A_3－４に併行、森隆氏編年のⅡ－５段階のものである。両者共存するとも考えられるが、形態上分類した。

黒色土器椀は数は少ないが、完形品に近いものが出土している。形態上は、２－１トレＳＤ０１出土のものと同時期か、やや古いものかと思われる。森隆氏編年のⅡ－４段階相当とみられる。

瓦器椀は、１点のみであるが、完形品に近いものが出土している。形態上は、口縁部で大きく外反し、端部をやや起こすもので、全体に器高は扁平で低い。内外面の暗文は、磨耗していて不明であるが、胎土は砂分の少ない精良なものである。白石編年のⅡ－３型式川越編年[16]の第Ⅲ段階Ａ型式に相当するものとみられ、12世紀後半から13世紀初頭にあたるとみられる。

10トレンチ供養塚古墳北側周濠内では、多量の埴輪片が出土した。トレンチの幅が１～ 1.2ｍの範囲であるため個体となるものは少なかった。

埴輪の形態は、円筒埴輪、朝顔形埴輪、形象埴輪の三種類で、このうち朝顔形埴輪は個体数で５点、形象埴輪は１点のみで、９割強が円筒埴輪で占められている。

形象埴輪は、「きぬがさ形埴輪」の一部で笠部の四方に突き出る角状部の先端部片である。両面にていねいなクシガキ目調整を施しやや細目の沈線で文様を施している。一個体で出土し復元されたものが、昭和58年度の調査で検出されている[17]。（図版四四－192）あと一つは、形象埴輪の基底部とみられるものと考えられるが、上部の構造は不明である。（図版四四－189）

朝顔形埴輪は、個体として復元できたものは２点で、（図版四二－181、182）いずれも口径76cmを測る大型のものである。口縁部は、若干外反ぎみに上方へ開くが、外反の度合はさして大きくない。体部は、円筒状のものとみられ、ドーム状に内弯したあと頸部にて外に屈曲し、上方へ開き、１段、段を成したあと口縁部に至る形態である。各段を成す部分で、帯状の突帯をめぐらす。突帯は、断面台形状のものと三角形状の２種がある。手法上は、内外面とも細かいハケ目調整を密に行っており、粘土の継ぎ目箇所に突帯をめぐらしている。色調は、赤褐色、暗褐色、淡黄茶色で、胎土はやや砂分の多いものであるが精良である。

円筒埴輪は、概ね、基本型は口径40cm前後で、口縁部が若干外反するものと、ほぼ直立するものである。器壁

も 1.0～ 1.5cmと定まらず、同一のものはない。粘土の継ぎ目は10cmおきで、外側に断面台形状の突帯を貼りめぐらしている。口縁端部は角形に面取りするものと、やや丸味を帯びる三角形状に面取りするものの２種類がある。体部には、上段から２段めもしくは３段めに円孔を対称位置に２箇所開ける。円孔は、１段おいてうがつものと２段め３段めにうがつものがある。後者の場合は対角線上にうがたれている。手法上は、概ね外面は、斜方向のハケ目調整のあと横方向に同一原体でハケ目調整を行っているのを基本とするが、横方向のハケ目調整を各段行わず、口縁部の段のみ、あるいは円孔のある段のみに施しているものもある。突帯はハケ目調整のあと貼りつけており、接地部を指ナデにより整形している。内面は、斜方向のハケ目調整を行うものとナデ調整のみの２種類がある。又、数は少ないが、縦方向のハケ目調整を行うものも数点ある。円筒埴輪の調整原体は同一のものが少なく、ハケ目も荒いもの細かなもの、板状工具のようなものと種々ある。又、口縁部外面に×印等のヘラ状工具で記したヘラ記号があるものが７点認められた。（図版四二－186、図版四四－190、191、193～196）

木製品は、１－２トレンチＳＥ０１より曲物柄杓が１点出土している。円形曲物を身にして棒状の柄をとりつけたもので、身の側板の綴合せは２箇所、１列外４段綴じと１列内３段綴じであり内面に斜方向の平行線のケビキを入れる。側板重ね合せ部分の上寄りに方孔をあけ柄孔にする。柄の先端を挿入する孔も貫通する。底板との結合は上部からのはめ込みによるもので、下段の径を若干小さくしている。柄はヒノキの割材からなる断面長方形の棒で、基部をやや削り側板内側の位置にあたる箇所に孔をあけ木釘を打ち込んで身に固定している。身径は上が15.8cm、下が15.5cm、同高10cm、柄残存長28.5cm、幅 2.5cm、厚み 1.5cmを測る。身の前方部上半は度重なる使用のため、柄の先端部の位置まで斜めに大きく磨耗しており外側の側板がすり切れてはずれ、使用不能になっている。このため井戸内に投棄したものと考えられる（図版四一－180、図版二〇－103）。

６．ま　と　め

今回の調査では、範囲が、パイプ埋設箇所の１～ 1.5mと限られていたため、遺構の規模、広がりを確認するには至らなかった。

遺跡の範囲としては、ほぼ全域に分布するとみられるが、国道８号線沿い及び住蓮坊古墳周辺に至っては削平が著しく遺存の度合いは良くなかった。その中でも、２－１トレ、12トレでは、遺存の良い包含層と遺構面があり、一部遺構が良好に遺存する箇所もあった。

また範囲内には、蒲生郡衙推定地、及び千僧供廃寺推定地が含まれていたが、調査の限り、23－１トレンチで、奈良時代中期の建物方位を南北正方向にとる掘立柱建物を検出した以外は、概当する遺構、遺物を検出することはなかった。千僧供廃寺関係に関しては、遺構は全く検出せず、２－１トレンチで、白鳳期に概当する山田寺系の八葉蓮華文軒丸瓦の破片及び、格子目タタキを施した軒平瓦の破片１点を検出したにとどまった。軒丸瓦の文様は、内側の花弁文と、外区の重圏文の間に鋸歯文を施しており、同様のものが、近江八幡市の舟木廃寺跡[13]で出土している。これまで出土した瓦は、いずれも山田寺系[20]のもので、花弁文と重圏文の間に鋸歯文はなく、今回出土のものは、別種のものである。

さらに、各トレンチで、南北正方向に流れる溝が、いくつか検出されたが、遺跡の中でどのような位置にあるものか、また性格は不明である。

今回の調査では、特に注目すべき遺構としては、１－２トレンチ、及び、２－１トレンチ検出の堀、及び、それに囲まれた掘立柱建物群と思われる。堀は、２－１トレンチのみで、西側のみ検出したにとどまったが、恐らく四周するものとみられる。１－２トレンチの北隣りは、古東山道の推定地[20]であり、居館遺構の存在は充分考え

られる。1－2トレンチの古東山道をはさんで南側は、小字名で「佐々木田」と称しており、居館遺構に関連するものとみられる。

次に12トレンチにおいて、平安末から鎌倉時代にかけての遺構、遺物が検出されており、12トレンチ周辺を小字名、「北浦」「北裏」もしくは、古くには、「クエン坊」と称しており、地元では、寺院の宿坊があったと伝承されている。遺構は、トレンチ幅が狭いため、広がり、性格等については不明であるが、多量の11世紀から13世紀にかけての遺物は、周辺に館跡の存在を推定でき得る資料である。23－2トレンチでは、遺物の出土は認められなかったが、柱間距離が曲尺の寸法で割り切れる掘立柱建物が検出されており、現在の千僧供町の居住地域一帯に中世集落が重なるものと考えられる。

注

① 『昭和58年度　滋賀県文化財調査年報』（滋賀県教育委員会　1985）
② 『堀ノ内遺跡発掘調査報告書他』（『近江八幡市埋蔵文化財調査報告書Ⅶ』近江八幡市教育委員会　1984）
③ 『近江の宮街－墨書土器と硯－』（滋賀県立近江風土記の丘資料館　1983）
④ 『勧学院遺跡発掘調査報告書』（『近江八幡市埋蔵文化財調査報告書Ⅷ』　近江八幡市教育委員会　1985）
『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書Ⅶ－2』（滋賀県教育委員会他　1986）
⑤ ④と同じ
⑥ 松沢　修氏の教示による
⑦ 『昭和60年度　滋賀県遺跡地図』（滋賀県教育委員会　1986）
⑧ 田路正幸　「五角形住居跡を検出　堀ノ内遺跡」（『滋賀文化財だより』No.86　滋賀県文化財保護協会　1984）
⑨ 『近江の宮街－墨書土器と硯－』（滋賀県立近江風土記の丘資料館　1983）
⑩ ⑨と同じ
⑪ 『滋賀県地名大辞典』（角川書店　1979）
⑫ 『滋賀県中世城郭分布調査4（旧蒲生・神崎郡の城）』（滋賀県教育委員会　1986）
⑬ 横田洋三　「土師器皿の分類と編年観」『平安京左京四条三坊十三町　一長刀鉾町遺跡一』（『平安京跡調査報告書第11輯』　古代学協会　1984）
⑭ 森　隆　「滋賀県における古代末、中世土器」（『中近世土器の基礎研究Ⅱ』　日本中世土器研究会　1986）
⑮ 大橋保彌　「近江製」黒色土器再考（『手原遺跡発掘調査報告書』『栗東町文化財調査報告書第一冊』　栗東町教育委員会他　1981）
⑯ 川越俊一　「大和地方出土の瓦器をめぐる二・三の問題」（『文化財論叢』　奈良国立文化財研究所　1983）
⑰ ①と同じ
⑱ 『本器集成図録－近畿古代篇一』（奈良国立文化財研究所　1985）
⑲ 『埋蔵文化財ニュース40　飛鳥白鳳寺院関係文献目録』（奈良国立文化財研究所　1983）
⑳ 『山出寺展』　（『日録第8冊』　奈良国立文化財研究所・飛鳥資料館　1981）

観音堂遺跡他出土遺物観察表

器種	器形	No.	法　量 (cm)	形態上の特徴	手法上の特徴	その他の特徴	遺構・備考
土師器	皿	1 〃 26	口径　8.0~9.0 器高　1.1~1.7	底部はほぼ水平　口縁部は内弯ぎみに立ち上がり外上方へ開く　端部は丸く収める 底部と口縁部の境に段を成す 8・9・12~16がある	底部外面指圧痕のあとナデ 他はヨコナデ	焼成　良 胎土　良 色調　白黄色　赤褐色	2~1トレ SD01
	上錘	27	長さ　3.5 径　2.3	ノズル状の円筒形を呈する	全面　ナデ	焼成　良 胎土　良 色調　白黄色	
	大皿	28 〃 32	口径 13.2~14.6 器高　2.0~3.2	28~31は底部水平　32は弯曲する　口縁部は内弯ぎみに立ち上がり29~31は端部付近にて若干外反する　28は上方へつまみ出す	底部及び体部下半指圧痕のあとナデ　他はヨコナデ	焼成　良 胎土　良 色調　白黄色　赤褐色	
黒色土器	椀	33 〃 42	口径 14.6~15.2 器高　4.5~5.0	体部はやや内弯ぎみに立ち上がり外上方へ開く　口縁部はやや屈曲して体部との境に稜をもつ33・34・39と外上方へ直線的に延びるものがある口縁部内面端部付近に1条の沈線をめぐらす　高台部は断面逆台形状もしくは逆三角形状の扁平なものを付す	体部外面　指圧痕のあとナデ 他はヨコナデ　内面に炭素を吸着させ放射状の花弁状暗文を付す　42は内面にハケ目が残る貼りつけ高台	焼成　35~38、42　良 他はやや甘い 胎土　良 色調　外面　白黄色 内面　黒色	
常滑焼	椀	43 ・ 44		体部は内弯ぎみに外上方へ延びる　底部に断面逆三角形状の外にふんばる高台を付す	内外面ともナデ貼りつけ高台	焼成　良 胎土　良 色調　灰色	
東播磨須恵器	片口鉢	45	口径　31.0	体部上半は直線的に外上方へ大きく開く　口縁部は肥厚させ上方へつまみ出す　端部外面に面を成す	ナデ	焼成　良 胎土　良 色調　灰色	
瓦	軒丸瓦	46	丸瓦径　18.5	外区に3種の重圏文　内区は山田寺系の子弁をもつ八葉蓮華文で、くさび形の間弁である外区と内区の間には鋸歯文を施す　中房は不明	瓦当面　版木による型どり 他はナデ 外区重圏文部は貼りつけ	焼成　良 胎土　良 色調　灰色	
古式土師器	高杯	47 〃 50	口径　11.7 器高　9.0	47は完形品で杯部は体部が内弯ぎみに立ち上がり外上方へ開く口縁部で、端部を丸く収める　脚部は八ノ字状に開き端部を丸く収める　脚部上半部に三方に円孔をうがつ　48~50は脚部のみで八ノ字状に開き端部が若干外反する　48・49は二方に円孔をうがつ	47は杯部内外面はていねいなミガキ、脚部外面は縦方向のミガキ　内面はヘラナデとハケ目 48~50は磨耗していて不明	焼成　良 胎土　良 色調　赤褐色	8トレンチ SK02　出土
	壺	51 〃 53	口径 14.5~16.0	内傾する肩部より口縁部はくの字状に屈曲し、外反ぎみに外上方へ開く　端部はやや起こし丸く収める	内外面ともハケ目調整	焼成　良 胎土　良 色調　赤褐色	
	甑	54	口径　10.6 器高　7.5	底部は丸底で、やや押しつぶした形の胴部である　口縁部は、くの字状に屈曲したあと上方にやや内弯ぎみに立ち上がり端部内側につまみ出す	内外面とも横方向のハケ目 口縁部はナデ	焼成　良 胎土　良 色調　赤褐色	
	小型丸底壺	55 ・ 56	口径 13.5~11.5	55はやや胴部が張り、くの字状に屈曲する口縁で、端部をやや上方へつまみ出す　56は球形の胴部で、くの字状に屈曲しやや内弯ぎみに外上方へ	不明	焼成　やや甘い 胎土　良 色調　赤褐色	

器種	器形	No.	法　量 (cm)	形態上の特徴	手法上の特徴	その他の特徴	遺構・備考
				開く口縁で、端部をつまみ出す			
	甕	57 〜 64	口径 14.6〜18.0	くの字状に屈曲し、外上方へ直線的もしくは内弯ぎみに開く口縁部で、57〜60は端部を内側へつまみ出し隆帯を成す 61・62は端部をやや内側につまみ出し、上面に溝が生じている 63、64は丸く収める	口縁部はナデ 胴部外面は斜方向のハケ目 内面はヘラケズリ	焼成　良 胎土　良 色調　赤褐色、茶褐色	
土師器	小皿	65 〜 91	口径 7.6〜10.7 器高　0.8〜2.0	底部は水平のものとややくぼむもの弯曲するものがある 口縁部はやや内弯ぎみに立ち上がり外上方に開くものが多い 65、66、71、73、74、77、78、89、90は、底部との境に段を成す 91はほとんど緩平な器形で口縁端部を若干つまみ出す	底部は指圧痕　他はヨコナデ	焼成　良 胎土　良 色調　白黄色　淡黄茶色	12トレンチ出土
	中皿	92 〜 101	口径 11.8〜14.4 器高　2.1〜3.0	底部は水平なものとやや弯曲するものがある　口縁部は内弯ぎみに立ち上がり外上方へ開く　端部をつまみ出し上方へ起こすもの、やや内弯させるものがある	底部外面指圧痕のあとナデ 他はヨコナデ	焼成　良 胎土　良 色調　白黄色　淡黄茶色　赤褐色	
	大皿	102 〜 104	口径 16.0〜17.5 器高　2.1〜2.4	92〜101と同じ	92〜101と同じ	焼成　良 胎土　良 色調　白黄色　淡黄茶色	
	高台付皿	105	口径　19.2 器高　6.5	底部は　内弯ぎみに大きく開く体部で、口縁端部を丸く収めやや下方へつまみ出す　高台部は、やや踏ん張りのハの字状に内弯ぎみにふんばるものを付す	ヨコナデ	焼成　良 胎土　良 色調　淡黄白色	
黒色土器	椀	106 〜 113	口径 14.6〜15.8 器高　5.0	体部はやや内弯ぎみに外上方にのび、口縁部にてやや外反きき端部を丸く収める　体部と口縁部の境に稜を成す高台部は断面逆台形状のやや幅平なものを付す	体部外面指圧痕のあとナデ 他はヨコナデ 内面は放射状暗文のあと花弁状の暗文を施し磨きナデ 貼りつけ高台	焼成　良 胎土　良 色調　白黄色　内面黒色	
瓦器	椀	114	口径　15.0 器高　4.6	体部は直線的に外上方へ開き口縁部にて逆くの字状に屈曲する　口縁部は外反ぎみに外上方へ開き端部をつまみ出しやや下垂させる　高台部は外反ぎみにふんばるものを付す	内外面ともヘラ磨き 暗文は不明 炭素は剥離している	焼成　良 胎土　良 色調　炭白色	
土師器	皿	115 〜 131	口径 8.3〜10.6 器高　1.2〜2.4	底部はやや弯曲する　115、130以外は、体部と口縁部の境に稜を成し、口縁部は外反して外上方に開く　131はての字状口縁の皿で端部を上方へつまみ出す	底部糸切痕のあとていねいにナデ消す　他はヨコナデ	焼成　良 胎土　良 色調　淡赤褐色　茶褐色	SE01　出上
	大皿	132	口径　15.0 器高　3.2	底部はやや弯曲する　体部は内弯ぎみに立ち上がり口縁部にて外反し外上方へ開く　口縁部と体部の境に稜を成す	115〜131と同じ	焼成　良 胎土　良 色調　淡赤褐色	
灰釉陶器	小椀	133 ・ 134	口径 7.8〜10.8 器高　3.0	内弯ぎみに立ち上がり口縁部にて外反し外上方へ開く　134は底部に断面逆二角形状の高台を有する高台部は円盤状の粘土を底部に貼り、高台をつまみ出す	内外面とも平ナデ　133は口縁部外面に釉を施す	焼成　良 胎土　良 色調　灰白色	12トレンチ南側包含層上層

器種	器形	No.	法量(cm)	形態上の特徴	手法上の特徴	その他の特徴	遺構・備考
常滑焼	椀	135 ～ 137		135、136は底部に断面逆台形状の高台を付す 137は極めて低い逆三角形状の高台を付す	内外面ともナデ 貼りつけ高台	焼成 良 胎土 良 色調 灰色	
須恵器	杯身	138 ・ 139	口径 12.0～12.8 器高 3.5～4.0	口縁部は外上方に直線的に開き、端部では若干外反させる 口縁端部は丸く収める	底部外面ヘラ切り未調整 他はヨコナデ	焼成 良 胎土 良 色調 灰色	12トレンチ南側包含層下層
		140	口径 11.0	体部は内弯ぎみに外上方へ延びる 受け部は若干内弯ぎみに外上方へつまみ出し端部は丸く収める 口縁部はやや外反ぎみに内傾し 端部を上方へつまみ出す	底部外面ヘラ切り未調整 他はヨコナデ	焼成 良 胎土 良 色調 灰色	
	杯蓋	141	口径 16.0	天井部水平 口縁部はやや内弯したあと横方向へ屈曲し、口縁端部を下方へつまみ出す	天井部外面ヘラケズリ 他はヨコナデ	焼成 良 胎土 良 色調 灰色	
		142	口径 16.0	天井部より口縁部にかけて内弯ぎみに開き、口縁端部にて下方へ屈曲する	ヨコナデ	焼成 良 胎土 良 色調 灰色	
		143	口径 13.2	体部は内弯ぎみに外下方へ開き、口縁部にて下方へつまみ出す 口縁部内面に水平につく返りを付す 返り部は接地しない	ヨコナデ	焼成 良 胎土 良 色調 灰色	
土師器	杯身	144	口径 14.0 器高 5.5	底部は水平 体部はやや内弯ぎみに外上方へ開き、口縁部にて若干外反する 口縁端部は丸く収める	ナデ	焼成 良 胎土 良 色調 淡赤褐色	
	高杯	145	口径 15.0	頸部と体部の境に段を成し、体部は内弯ぎみに外上方へ開く 口縁部は外反し、端部を丸く収める	頸部の段より下の外面ハケ目調整 他はヨコナデ	焼成 良 胎土 良 色調 淡赤褐色	
弥生式土器	広口壺	146	口径 16.0 器高 10.0	底部はくぼみ底 体部は上半部に最大径を有するやや扁平な球形を成す 頸部にて直立したあと外反し、口縁部にてくの字状に屈曲し直立する 端部は若干面を成す	口縁部ヨコナデ 体部内外面ハケ目調整	焼成 良 胎土 やや砂粒多い 色調 赤褐色	
古式土師器	高杯	147	口径 21.0	頸部は八の字状に開く 杯部は底部が水平で体部との境に段を成し、体部より口縁部にかけて外上方へ直線的に開く 端部は丸く収める	頸部および杯部の外面横方向のヘラ磨き 杯の体部上半斜方向のヘラ磨き 体部内面ハケ目調整 ヘラ磨きのあと放射状の暗文を付す	焼成 良 胎土 精良 色調 赤褐色	
		148	口径 24.2 器高 16.0	頸部および脚部は八の字状に開く 杯部は、体部が外上方に直線的に開き、口縁部で段を成したあとやや屈曲し若干外反したあと口縁端部にてやや肥厚する 端部は丸く収める 脚部上半の三方に円孔をうがつ	頸部外面および杯部外面はヘラ磨き 脚部下半に放射状暗文を付す 杯部内面ヘラ磨き 脚部内面はハケ目調整	焼成 良 胎土 精良 色調 赤褐色	
須恵器	杯身	149	口径 13.5 器高 4.5	底部水平 体部より口縁部にかけて外上方へ直線的に開き 口縁端部にて若干外反する 端部は丸く収める	底部外面ヘラケズリ 他はヨコナデ	焼成 良 胎土 精良 色調 暗灰色	4トレンチ SD03 出土
		150	口径 14.0 器高 4.5	底部水平 体部より口縁部にかけてやや内弯ぎみに外上方へ開く、口縁端部は丸く収める 底部の体部との境に断面台形状の外にふんばる扁平な高台を付す	底部外面ヘラケズリ 他はヨコナデ	焼成 良 胎土 精良 色調 灰色	4トレンチ出土
		151	口径 18.0 器高 6.2	口縁部は直線的に外上方へ開く 口縁端部は丸く収める	底部外面ヘラナデ 他はヨコナデ	焼成 良 胎土 精良	

器種	器形	No.	法　量 (cm)	形態上の特徴	手法上の特徴	その他の特徴	遺構・備考
須恵器				底部と口縁部立ち上がりの境に断面逆台形状の高台を付す	貼り付け高台	色調　灰色	
	甕	152	口径 21.0 器高 2.6	底部は水平　口縁部は外上方へ直線的に開く　口縁端部は若干つまみ出し外反させる	ヨコナデ	焼成　良 胎土　精良 色調　淡灰色	7－1トレンチ　出土
	杯身	153	口径 10.0 器高 3.4	底部は水平　体部は内湾ぎみに外上方へ開く　受け部は若干外上方へつまみ出し丸く収める　口縁部は体部よりくの字に内傾したあと外反ぎみに上方へ延びる　口縁端部は丸く収める	底部外面ヘラ切り未調整 他はヨコナデ	焼成　良 胎土　良 色調　暗灰色	8トレンチ 包含層
	短頸壺	154	口径 11.0	体部は内湾ぎみに立ち上がる　口縁部はほぼ直立し上方へ延びる　口縁端部を若干外反させ、内面に面を取る	ヨコナデ	焼成　良 胎土　良 色調　灰色	
	杯身	155	口径 11.0 器高 3.5	底部はやや湾曲する　体部は若干内湾ぎみに外上方へ延びる　口縁部にてややくの字に屈曲させたあと内湾し、端部を上方へつまみ出す　焼成前に口縁部を1箇所片口状に押し下げている	底部外面ヘラ切り未調整 他はヨコナデ	焼成　やや甘い 胎土　良 色調　青灰色	8トレンチ SH02　床面直上出土
		156	口径 12.8 器高 3.2	底部はほぼ水平　体部は内湾ぎみに立ち上がり　口縁部にて稜を成し外反する　口縁端部は丸く収める	155と同じ	焼成　甘い 胎土　砂分多い 色調　淡黄白色	
		157	口径 16.0 器高 6.0	底部は若干弯曲する　体部は内湾ぎみに立ち上がり受け部まで直線的に外上方へ延びる　受け部は若干外上方へつまみ出し丸く収める　口縁部は大きくくの字に内傾し、やや外反ぎみに延びる　端部は丸く収める	153と同じ	焼成　良 胎土　精良 色調　灰色	8トレンチ SH03　床面直上出土
土師器	甕	158	口径 25.0	口縁部はくの字状に屈曲したあと内湾ぎみに外上方に延びる　口縁端部をつまみ出し外反させる　端部内面に面をとる	体部外面ハケ目調整　他はヨコナデ	焼成　良 胎七　良 色調　淡黄茶色	8トレンチ SH01　出土
須恵器	杯身	159	口径 8.4 器高 4.0	底部はやや湾曲する　体部は外上方へ直線的に延び、口縁部で外反し、境に稜を成す　底部と体部の境よりやや内側に外にふんばる断面逆台形状の高台を付す	ヨコナデ 貼り付け高台	焼成　良 胎土　良 色調　青灰色	10トレンチ 出土
		160	口径 13.8 器高 3.5	底部水平　体部は直線的に外上方へ延び口縁部にいたる　口縁端部は丸く収める　体部と底部の境よりやや内側に断面逆台形状の高台を付す	ヨコナデ 貼り付け高台	焼成　良 胎土　良 色調　暗灰色	
		161 ・ 162		底部と体部の境付近に断面逆台形状の高台を付す	ヨコナデ 貼り付け高台	焼成　良 胎土　良 色調　灰色	
		163	口径 10.0	体部は内弯ぎみに外上方に延びる　受け部は外上方へつまみ出し、やや外反ぎみに口縁部は内傾する	ヨコナデ	焼成　良 胎土　良 色調　灰色	
	平瓶	164		底部水平　体部は内弯ぎみに外上方へ延び、くの字に屈曲し扁平な天井部を成す　天井部に取手とラッパ状に開くと	ヨコナデ 貼り付け高台	焼成　良 胎土　良 色調　暗灰色	

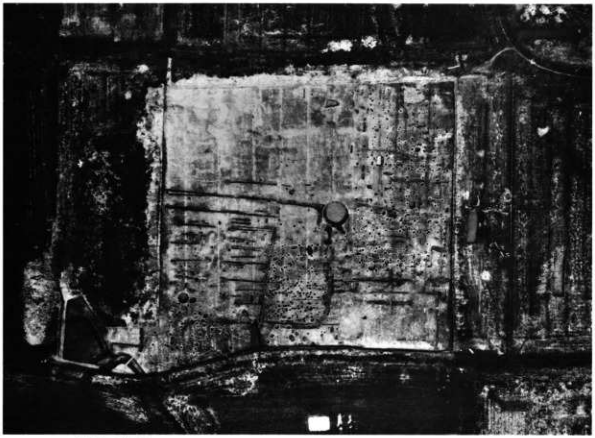
器種	器形	No.	法量(cm)	形態上の特徴	手法上の特徴	その他の特徴	遺構・備考
				みられる口縁部をつくる 底部と体部の境に断面逆台形状の外にふんばる高台を付す			
須恵器	坏	165		底部水平 体部は外上方へ延びる	ヨコナデ	焼成 良 胎土 良 色調 灰色	
灰釉陶器	椀	166	高台径 7.6	底部は水平 やや幅広の断面逆台形状の高台を付す	ヨコナデ	焼成 良 胎土 良 色調 白灰色	
		167		底部水平 底部は円盤状を成す	底部外面糸切り痕 他はナデ	焼成 良 胎土 良 色調 口黄色	
		168	口径 13.0 器高 4.2	底部水平 体部は外上方へ直線的に延びる 口縁部はやや外反し外上方に開く 端部は丸く収める 底部に断面逆台形状の高台を付す	ヨコナデ 貼り付け高台 内外面とも上半部のみハケにより釉を施す	焼成 良 胎土 良 色調 白灰色	
須恵器	甕	169	口径 25.0	体部上半部はやや内弯ぎみに内傾し、胴部にてくの字に屈曲し、口縁部はやや外反ぎみに外上方へ開く 口縁端部内面のややドで下方へつまみ出し肥厚させ上面を面取りする	口縁部内外面 体部内面は ヨコナデ 体部外面タテ方向のクシガキ目のあとヨコ方向のクシガキ目をていねいに施す	焼成 良 胎土 良 色調 青灰色	10トレンチ 南土
古式土師器	椀	170	口径 7.6 器高 4.9	底部水平 体部はやや内弯ぎみに外上方に延び、口縁部はつまみ出すようにして内弯させる 口縁端部は丸く収める	口縁部内面指圧痕 他はヨコナデ 粘土ひもによる巻き上げ作りの痕跡残る	焼成 良 胎土 良 砂粒多い 色調 淡黄白色	23－1トレンチ SH01 出土
	甕	172	口径 16.8	体部は内弯ぎみに延び、体部中位よりやや上で最大径を成す 口縁部はくの字状に屈曲し、やや外反ぎみに外上方へ開く 口縁端部は若干外反させ丸く収める	磨耗していて不明	焼成 やや甘い 胎土 砂粒多い 色調 淡黄白色	
須恵器	坏蓋	171	口径 12.4 器高 4.4	天井部はやや内弯しドーム状 体部は内弯ぎみに外上方へ延び、口縁部との境で明瞭な稜を成し段を成す 口縁部はやや内弯ぎみに下方へ延び、口縁端部を外下方へつまみ出す 端部内面に面を取る	体部外面3分の2を回転ヘラケズリ 他はヨコナデ	焼成 良 胎土 精良 色調 灰色	
古式土師器	高坏	173・174		脚部上半は八ノ字状に開く円錐形を成す 脚部ド半にて逆くの字状に屈曲しほぼ水平に外に開く 174は端部を若干つまみ出し下方へ肥厚させ	174は脚部上半外面ハケ目調整 他はヨコナデ 173は磨耗していて不明	焼成 やや甘い 胎土 良 色調 淡赤橙色	23－2トレンチ
	甕	175	口径 13.6 器高 16.5	底部丸底 体部球形 口縁部にてくの字状に屈曲し、やや外反ぎみに外上方へ開く 口縁端部は外反ぎみに外に開き丸く収め上面に凹面を成す	体部外面横転ヘラケズリ 体部内面ヘラケズリ	焼成 良 胎土 良 色調 赤褐色	23－2トレンチ
	高坏	176	口径 14.0 器高 13.0	杯部底部内面は水平 体部は外上方へ直線的に延びる 脚部は八ノ字状に開く円錐形で、下半部で逆くの字状に屈曲しやや外反ぎみに外下方に延び、端部を若干外反させ	外面 磨きナデ?	焼成 良 胎土 良 色調 赤褐色	
		177	口径 13.6	口縁端部が外反する以外は176と同じ	外面 ヘラ磨き	焼成 良 胎土 良 色調 淡赤橙色	24トレンチ 出土
須恵器	杯蓋	178	口径 14.0 器高 3.0	天井部はやや内弯ぎみに横方向に延び、口縁部にて内弯ぎみに外下方に延びたあとくの	外面上半部 回転ヘラケズリ 他はヨコナデ 天井部に自然釉付着	焼成 良 胎土 良 色調 灰色	24トレンチ 出土

器種	器形	No.	法　量（cm）	形態上の特徴	手法上の特徴	その他の特徴	遺構・備考
				字状に屈曲し、口縁端部を丸く収める			
	甕	179	口径 18.2 器高 21.8	体部はやや肩張りの球形を呈する　底部は丸底　口縁部にてくの字に屈曲し、やや外反ぎみに外上方へ開く　口縁端部内面に面取りをする	口縁部内外面　ヨコナデ 体部外面　板状工具によるタタキ　体部内面　同心円状の刻みを施した板状工具によるタタキ	焼成　やや甘い 胎土　良 色調　白灰色	25トレンチ 出土
木製品	柄杓	180	口径 15.8 器高 10.0	円形曲物の身に棒状の柄をとりつけたもの	身の側板の綴じ合せは2箇所1列外4段綴じと1列内3段綴じ　内面に斜方向の平行線のケビキを入れる　底板は上部からのはめ込み　側板重ね合せ部分上寄りに方向をあけ柄孔とする　柄の先端を挿入する孔も貫通する　柄は断面長方形　基部をやや削り側板内側の位置にあたる箇所に孔をあけ木釘を打ちこみ固定する	身、柄ともヒノキ材 板目取り 底板は柾目取り	2－1トレンチ　SE01 出土
須恵器	横瓶	181	口径 80.0	体部が内弯したのちくの字状に大きく外反し外上方へ開く　口縁部は段を成したあと外反ぎみに外上方へ開き、口縁端部にてくの字状に屈曲し下方へ折れる　体部と口縁部の境と口縁部の中位に断面三角形の突帯をめぐらす	口縁端部内外面と突帯部はていねいなヨコナデ　他の部位は細かい目のハケ目調整　貼り付け突帯　体部と口縁部の境、口縁部の中位で粘土の継ぎ足しをする際ぎ目の外面に突帯をめぐらす	焼成　良 胎土　精良 色調　暗赤褐色	
		182	口径 80.0	体部上半がドーム状に内弯したあとくの字状に屈曲し口縁部はやや内弯ぎみに外上方に開く　中段で段を成したあと外反ぎみに大きく外上方へ開く　口縁端部は下方へ屈曲させる　口縁部と体部の境は口縁部中段に断面台形状の突帯をめぐらす	181と同じ	焼成　良 胎土　精良 色調　赤褐色	
	円筒埴輪	183	口径 38.0	体部は直線的に立ち上がる　口縁部にて若干外反し外上方へ開く　口縁端部上面と内面を面取りする　10cm間隔で断面台形状の突帯をめぐらす　上段より下へ3段目の所に内窓を設ける	口縁部内外面ヨコナデ　突帯部ヨコナデ　他の部位は縦方向の板状工具によるハケ目調整　貼り付け突帯	焼成　良 胎土　やや砂多い 色調　黄色	
		184	口径 40.0	体部は若干内弯ぎみに上方へ延び、上段より2段目で外反ぎみに外上方へ開く　口縁端部はとがりぎみに上方へつまみ出す　10cm間隔で断面台形状の突帯をめぐらす	口縁端部内外面と突帯部ヨコナデ　体部外面は3ヨコ方向のクシガキ目調整のあと斜方向に同一原体でカキ目を施す　内面は縦方向と斜方向のクシガキ目調整　貼り付け突帯	焼成　良 胎土　精良 色調　赤褐色	
		185	口径 35.0	体部は上段で内傾ぎみに上方へ延び、口縁部にてやや外反する　口縁端部上面と内面を面取りする　断面台形状の突帯をめぐらす　上段より2段目に円窓を設ける	口縁端部内外面と突帯部ヨコナデ　体部外面は横方向のクシガキ目のあと斜方向のクシガキ目調整を施す　内面は上段を横方向のクシガキ目　下段円窓部周辺は指ナデを施す　貼りつけ突帯	焼成　良 胎土　精良 色調　暗灰褐色	
		186	口径 41.0	体部は直線的に上方へ延び、上段より2段目でやや外反ぎみに外上方へ延びる　口縁端部上面を面取りする　10cm間隔で断面台形状の突帯をめぐらす　上段より2段目に円窓を設ける	184と同じ	焼成　やや甘い 胎土　砂分多く含む 色調　淡黄橙色	

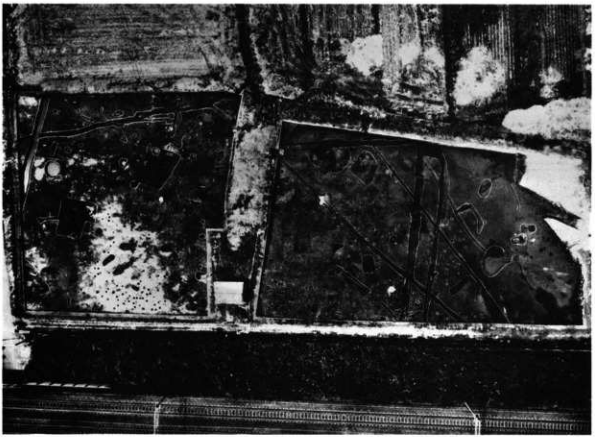
器種	器形	No.	法量(cm)	形態上の特徴	手法上の特徴	その他の特徴	遺構・備考
		187		体部は直線的に上方へ延びる	185同じ 内面は指ナデ	焼成 良 粘土 良 色調 黄褐色	
	朝顔形埴輪	188		体部上半はドーム状に内弯する 口縁部との境 体部中段に断面台形状の突帯をめぐらす	突帯部ヨコナデ 体部外面横方向のクシガキ目調整 内面はナデか	焼成 やや甘い 胎土 砂分多い 色調 淡黄白色	
	形象埴輪	189		形象部と体部の境部で、内傾する体部を底し、くの字に折曲し形象部に至る 屈曲部にケズリ出しの段を成す	不明	焼成 良 胎土 砂分多い 色調 灰茶色	
	円筒埴輪	190		口縁部はやや外反ぎみに外上方へ開き、口縁端部上面に面をとる	横方向と斜方向のクシガキ目 外面にヘラ記号を施す	焼成 良 粘土 良 色調 灰褐色	
		191 ↓ 193		190と同じ	190と同じ	焼成 良 胎土 砂分多い 色調 黄橙色	
		194		190と同じ 端部は丸く収める	190と同じ	焼成 良 胎土 砂分多い 色調 黄橙色	
	形象埴輪	192		「きぬがさ形埴輪」のヒレの部分の先端部	ていねいなクシガキ目調整を両面に施し、ヘラによる沈線で輪郭を施す	焼成 良 胎土 砂分多い 色調 淡灰茶色	
	円筒埴輪	195 ・ 196		体部片で、196は断面台形状の突帯をめぐらす	ヨコ方向のクシガキ目調整へラ記号を施す	焼成 やや甘い 胎土 砂分多い 色調 黄褐色	

図　版

I　近江八幡市蔵ノ町遺跡・久郷屋敷跡
蒲生郡篠田荘における中世館遺構



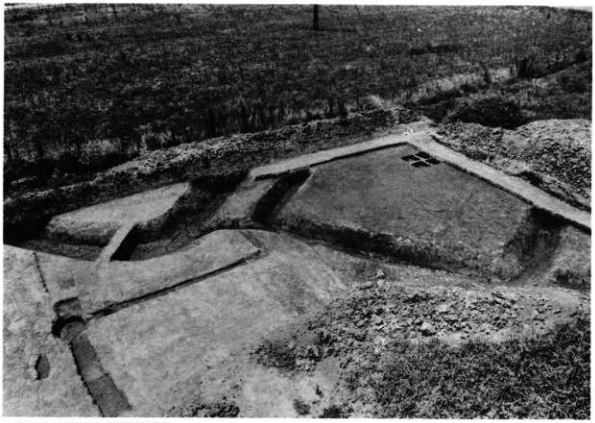
1トレンチ全景（空撮）



3トレンチ全景（空撮）

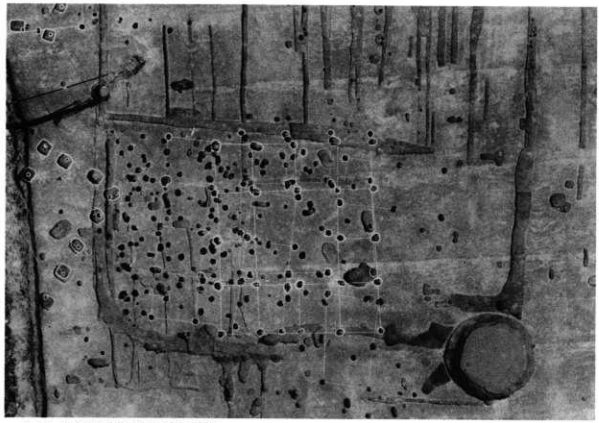
2トレンチ西側（北から）

2トレンチ東側（北から）

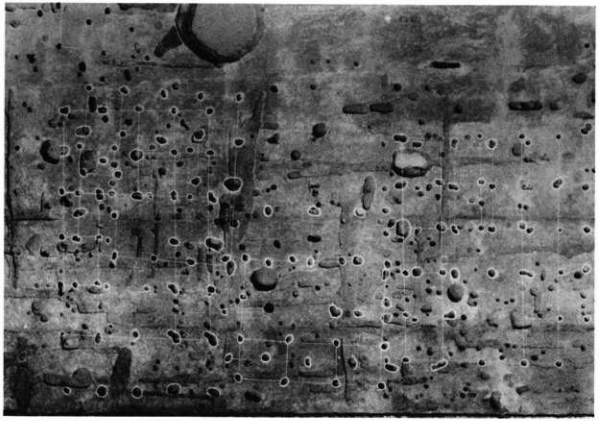


1トレンチ北側方形周溝墓

1トレンチ北側掘立柱建物群

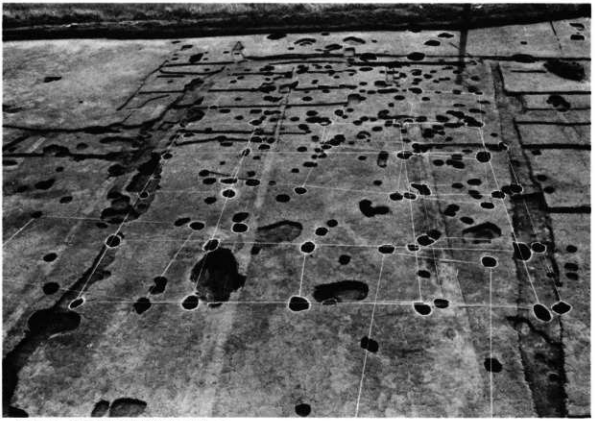


1トレンチ中央掘立柱建物群（空撮）



1トレンチ南側掘立柱建物群（空撮）

1トレンチ南側掘立柱建物群（西から）



1トレンチ中央掘立柱建物群（東から）

1トレンチSB04柱穴内出土土器

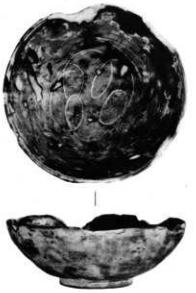
2トレンチSK02土器出土状況

1

2

3

4


5

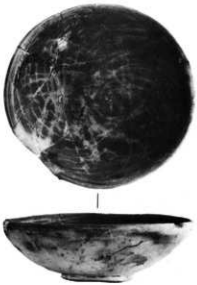
6

1（1トレSB02）　2（1トレSB04）　3（1トレSB08）　4（1トレSB09）　5（1トレSB11）
6（1トレSD01）

7

8

9



10

11

12

7（2トレSB04横溝状遺構）　8（3トレSD04）　9～12（1トレSE06）

13

14

15

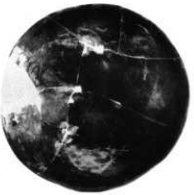
16

17

18

19

20



21

22

23

24

13・14（1トレSE06）　15～20（1トレSE01）　21（1トレSE02）　22～24（1トレPit内）

25

26

27

28

29

30

31

32

33

34

35

36

37

38

25・26（1トレSD01）　27（1トレSD04）　28・29（2トレSB04）　30～34（1トレSE01）
35～38（1トレPit内）

39

42

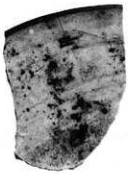
40

43

41

44

45


48

46

47

49

50

51

39～44（1トレ）　45～49（1トレ）　50・51（2トレSD05）

52

53

54

55

56

57

58

52・53（2トレSK02）　54・55（2トレSK01）　56（1トレSG02）　57（1トレ）　58（3トレ）

図版一三　藏ノ町遺跡・久郷屋敷跡（1トレンチ北側遺構実測図）

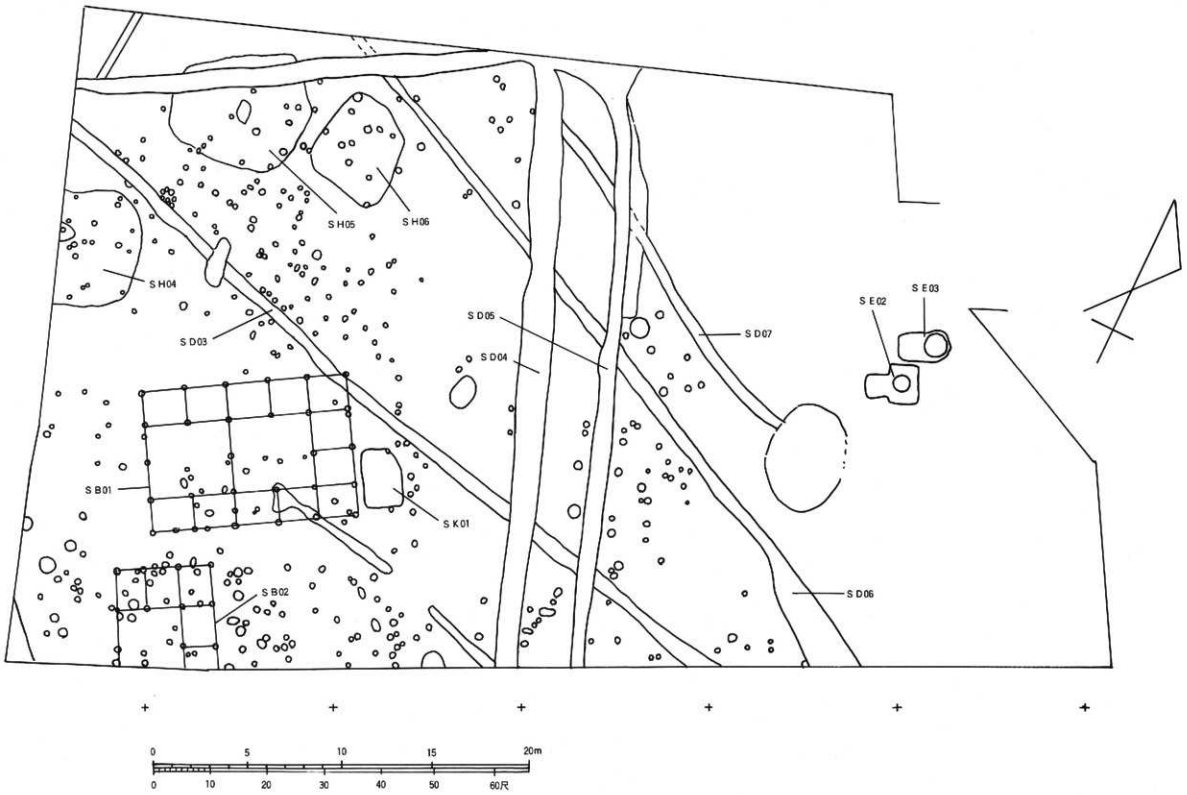
図版一四　蔵ノ町遺跡・久郷屋敷跡（1トレンチ南側遺構実測図）

図版一五　蔵ノ町遺跡・久郷屋敷跡（1トレンチ遺構実測図）

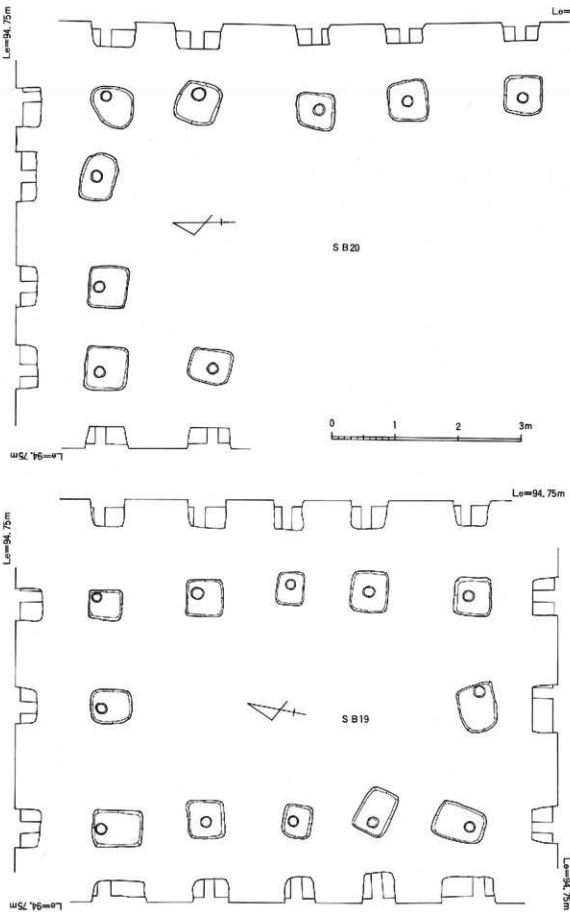
0 5 10 15 20m
0 10 20 30 40 50 60尺
S B04
S D05
S H04
S B03
S B02
S D02
S H01
S B01
S H02
S D01
S K02
S D03
S K01
S D04
S H03

S D01
S D02
S D03
S E01
S H03
S H02
S H01
0
5
10
15
20m

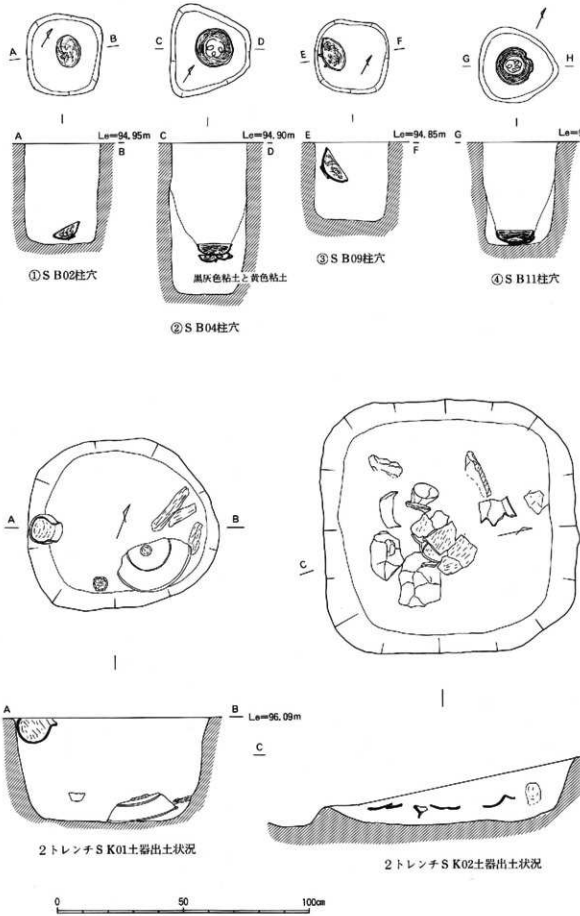
図版一八　蔵ノ町遺跡・久郷屋敷跡（3－2トレンチ遺構実測図）

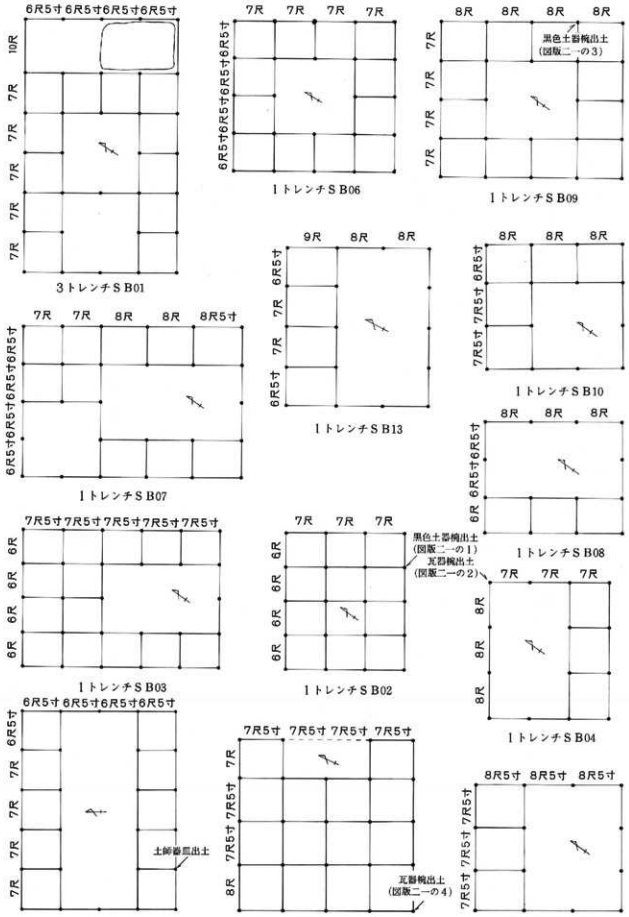


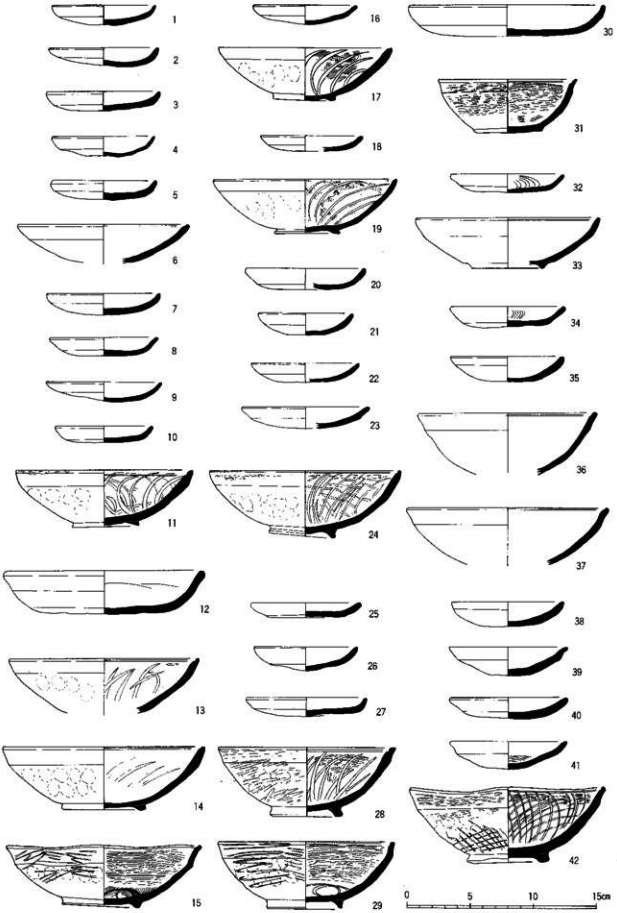
図版一九　蔵ノ町遺跡・久郷屋敷跡（Ⅰトレンチ SB19・20遺構実測図）



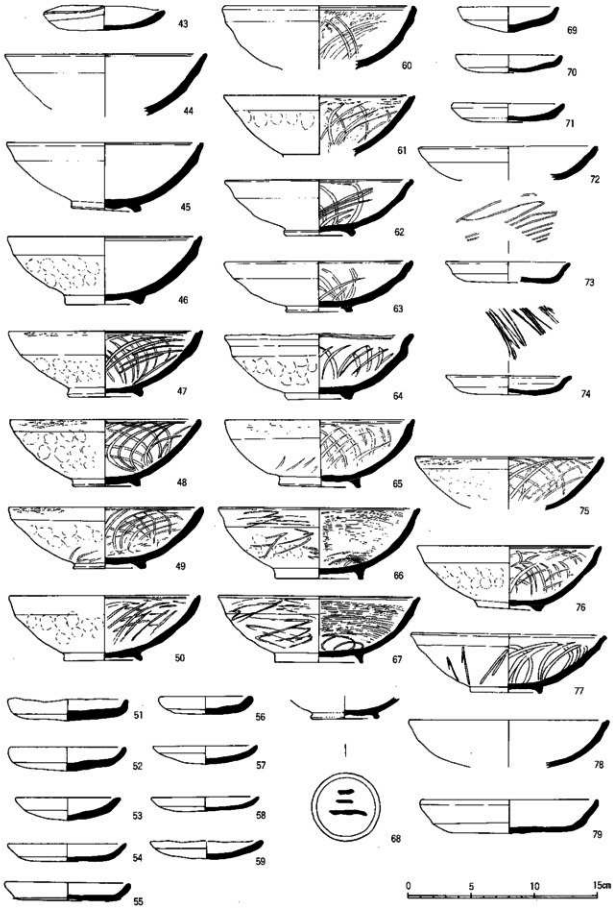
図版二〇　蔵ノ町遺跡・久郷屋敷跡（2トレンチ竪穴住居・掘立柱建物遺構実測図）


A
B
C
D
E
F
G
H
L=94.95m
L=94.90m
L=94.85m
L=94.85m
①S B02柱穴
黒灰色粘土と黄色粘土
②S B04柱穴
③S B09柱穴
④S B11柱穴
L=96.09m
L=95.80m
2トレンチS K01土器出土状況
2トレンチS K02土器出土状況
0
50
100cm

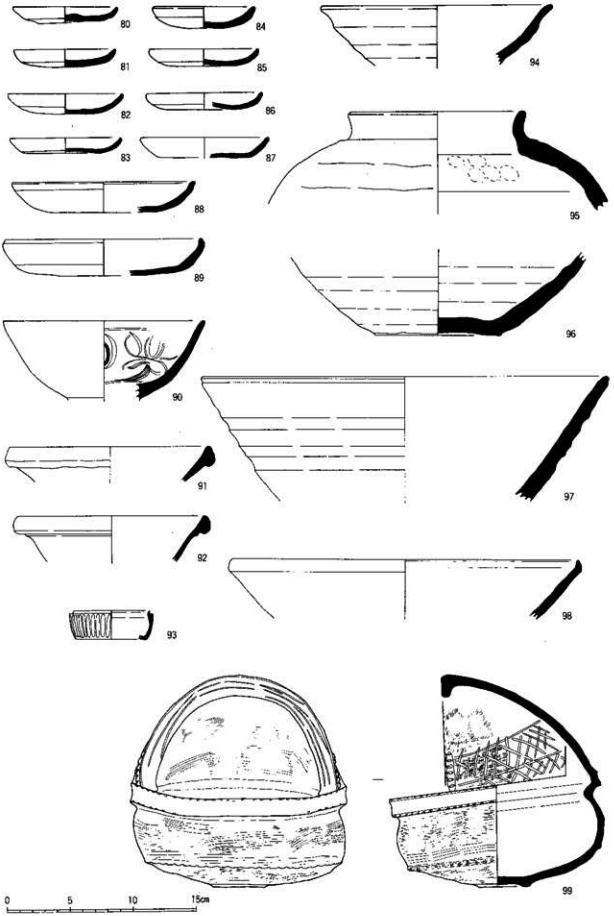

3トレンチSB01
1トレンチSB06
1トレンチSB09
黒色土器椀出土
（図版二一の3）
1トレンチSB13
1トレンチSB10
1トレンチSB07
1トレンチSB08
1トレンチSB03
1トレンチSB02
黒色土器椀出土
（図版二一の1）
瓦器椀出土
（図版二一の2）
1トレンチSB04
2トレンチSB01
土師器皿出土
1トレンチSB11
瓦器椀出土
（図版二一の4）
1トレンチSB05



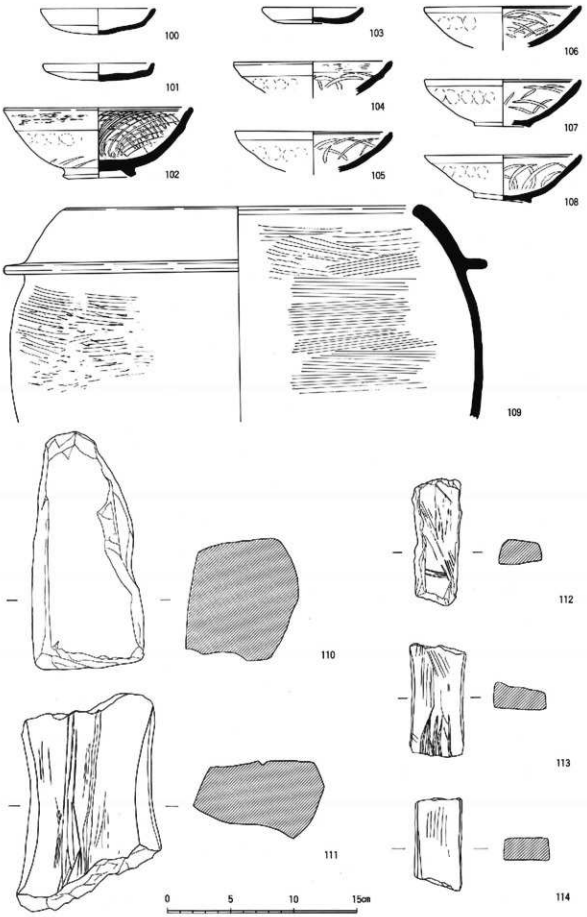
1～6（S B01柱穴），7～11（S B02柱穴），12～15（S B04柱穴一括），16・17（S B17柱穴），
18・19（S B10柱穴），20～24（S B09柱穴），25～29（S B11柱穴，28・29は一括），30（S B15柱穴），
31（1トレ北側Pit内），32・33（S K01），34～37（S D02），38～42（S D01）



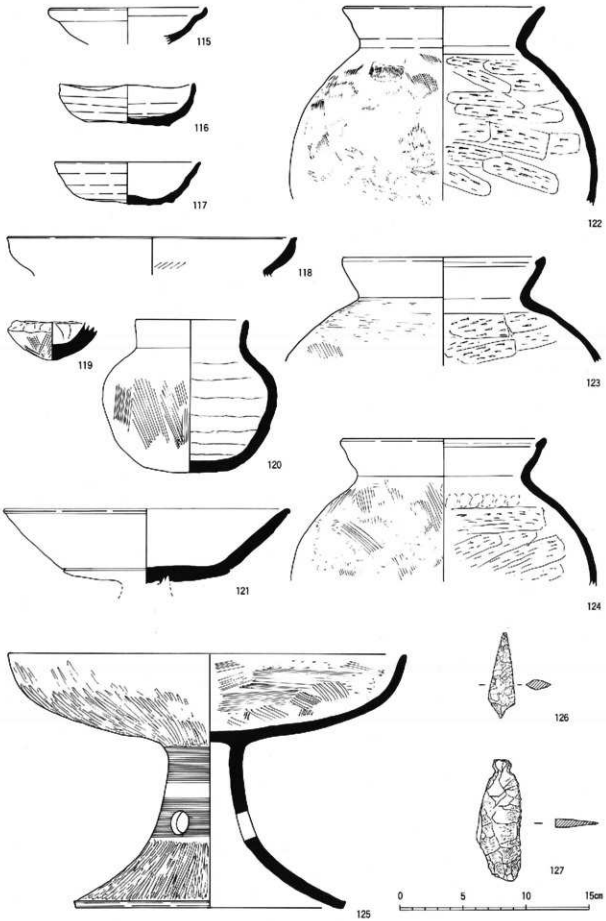
43（ＳＤ04），44～50（ＳＥ06一括），51～68（ＳＥ01），69～77（ＳＥ02），78・79（ＳＥ05）



80～83（S D06），84～89・94・95（S D07），90～93・98（イコウ面），96・97（S E01），99（S G02）



100～102（2トレSB04柱穴・溝），103～109（3－2トレSD04一括），110（1トレSE01），
111（2トレSH01），112（1トレSB01柱穴），113（1トレSD02），114（2トレSD05）



115～118（2トレSD05），119～121（2トレSK01），122～124（2トレSK02），125・127（3トレイコウ面），126（1トレ畠跡溝内埋土）

II　近江八幡市　高木遺跡

蒲生郡浅小井荘における中世居館遺構

1トレンチ全景（南から）

1トレンチ全景（北から）

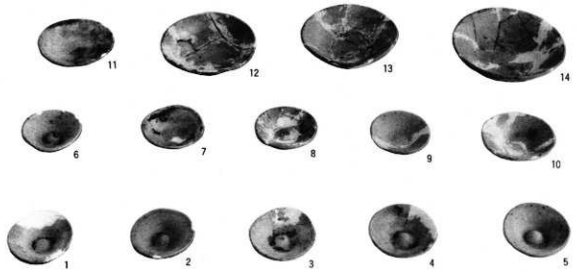
図版二　高木遺跡

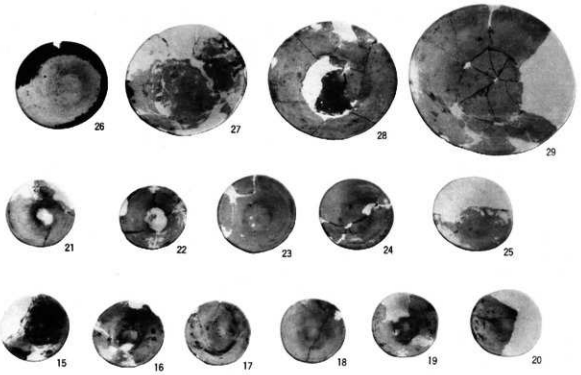
1トレンチ掘立柱建物

2トレンチ全景（北から）

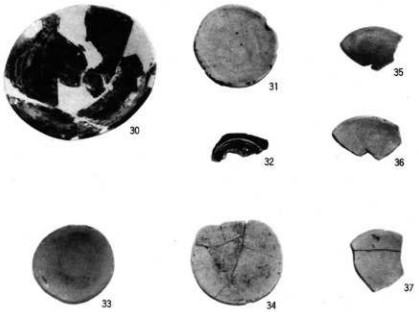
1トレンチSD01土器出土状況

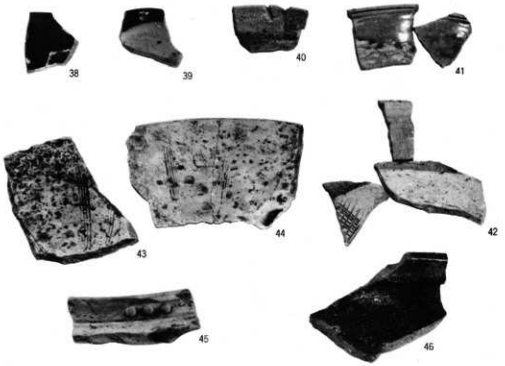
2トレンチSD02土器出土状況



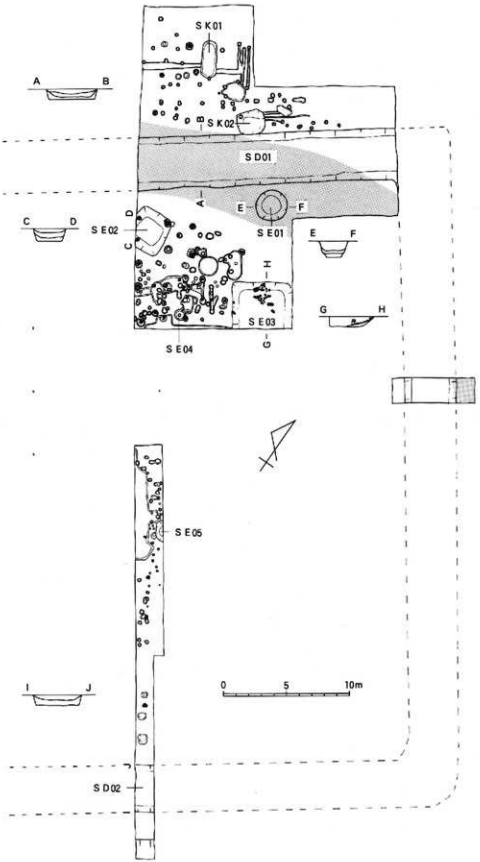


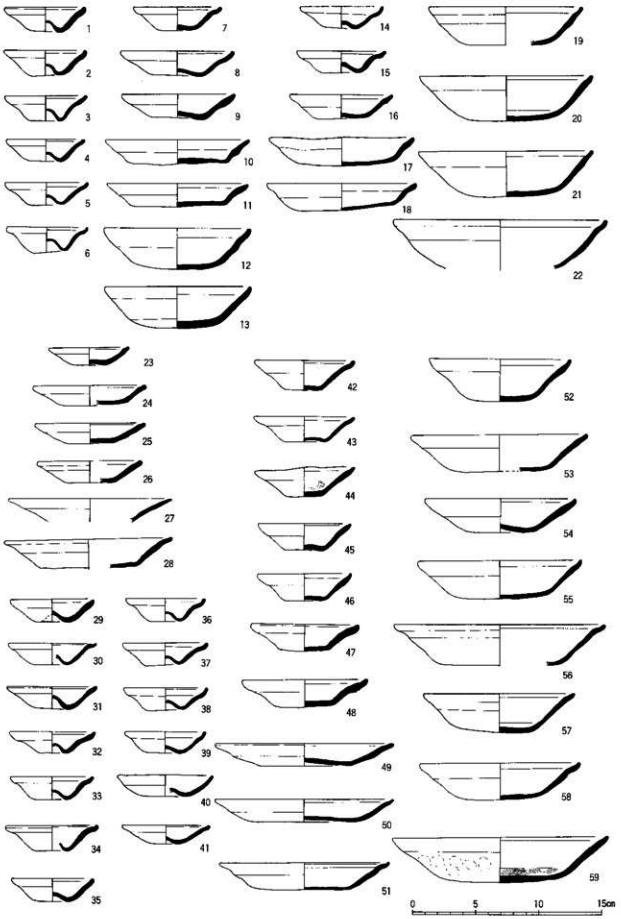
1～14（1トレSD01、2トレSD02）　15～29（1トレイコウ面、柱穴内）



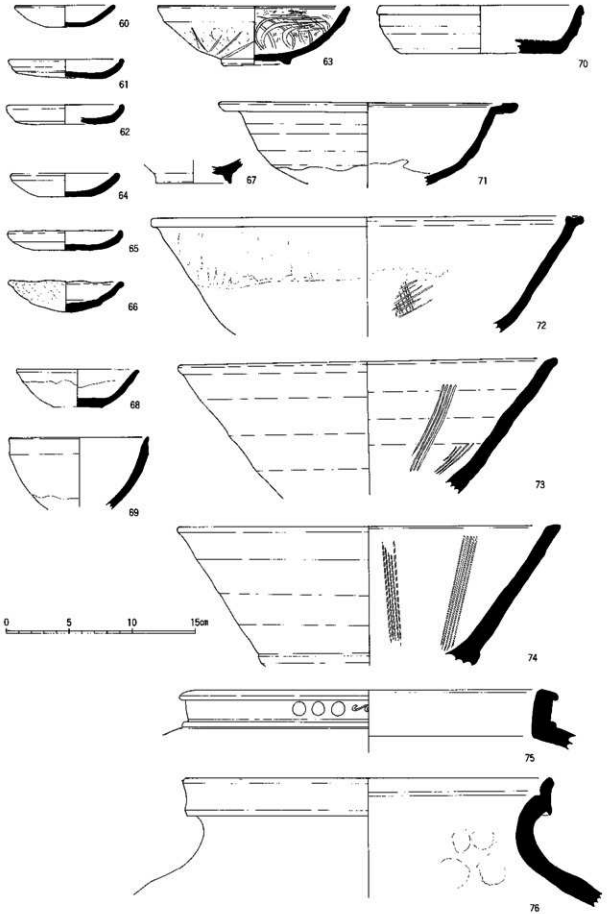


30～32（1トレSE02）　33（2トレ）　35～37（1トレ北）　38～46（1トレ包含層）　46（1トレSE01）


SK01
SK02
SD01
SE01
SE02
SE03
SE04
SE05
SD02
A
B
C
D
E
F
G
H
I
J
0
5
10m



1～13（S D01），14～22（S D02），33～59（S D01南側イコウ面・ピット内）



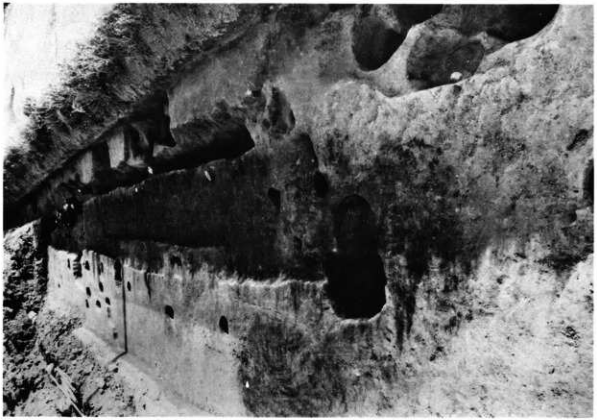
60～63（S E02），64～69（S D01北側イコウ面），70～75（S D01南側イコウ面），76（S E03・樹溜内）

III　近江八幡市　観音堂遺跡他

供養塚古墳および古代から中世における馬淵荘の集落遺構

図版一　観音堂遺跡

2ーートレンチ全景（北から）



2ーートレンチSD01・SA01

1－2トレンチＳＥ01木器出土状況

2－1トレンチＳＤ01土器出土状況

8トレンチSH02検出状況

8トレンチSK02土器出土状況

10トレンチ供養塚AB・BC間（東から）

10トレンチ供養塚CB・BA間（西から）

10トレンチ供養塚E・F間（南から）

10トレンチ供養塚A・B間土器・埴輪出土状況

12トレンチ全景（東から）

12トレンチSB02（東から）

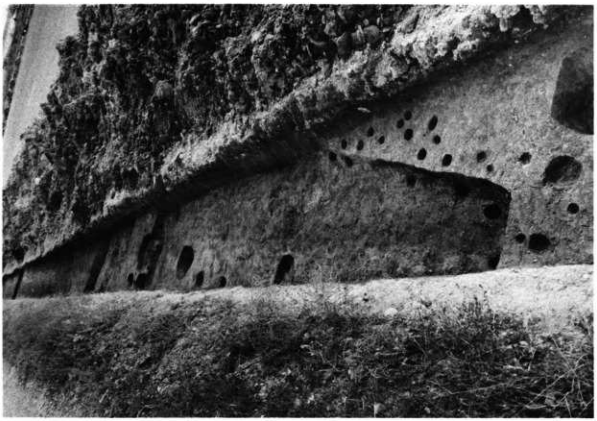
23－2トレンチ全景（北から）

23－1トレンチ全景（南から）

24 トレンチ東壁全景（西から）

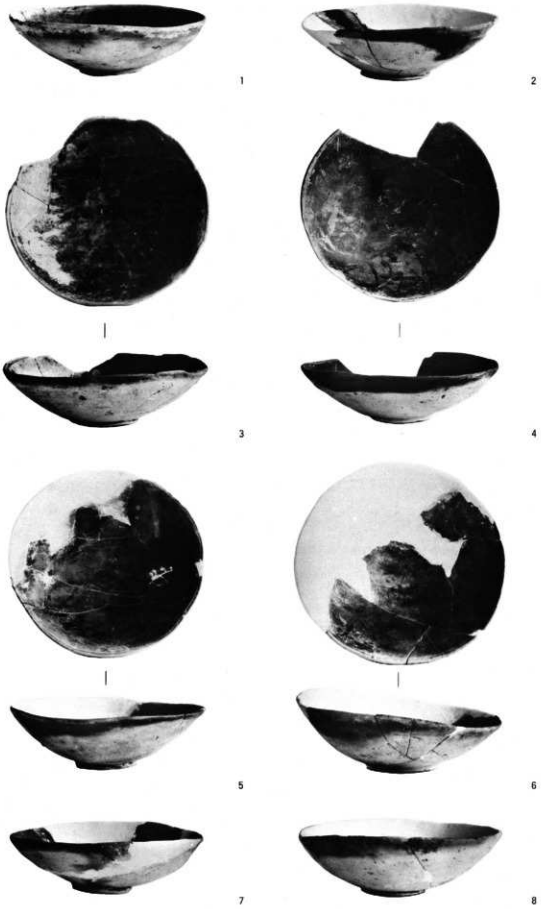
24 トレンチ東壁全景（東から）

図版九　観音堂遺跡



23　ーートレンチSH01（北から）

24　トレンチSH01（東から）



1～8（2－1トレSD01）

9

10

11

12

13

14

15

16

17

18

19

20

21

22

9～22（2－1トレSD01）

23

24

25

26

31

32

33

34

27

28

29

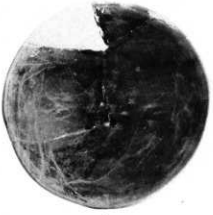
30

35

36

23～34（2－1トレSD01）　35（2－1トレ）　36（12トレ包含層）

37



38

39

40

41

44

42

45

43

46

37～46（12トレ包含層）

47

48

49

50

51

52

53

54

55

56

57

58

59

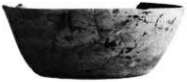
47～51（12トレ包含層）　52～58（12トレSE01）　59（12トレ包含層下層）

60

64

61

65


62

66

63

67

68

69

70

72

71

73

60～62（4トレ）　63（24トレ）　64・65（7－1トレ）　66・67（10トレ供養塚）　68・69（8トレSK02）
70・71（8トレSH02）　72（8トレSH01）　73（8トレ）

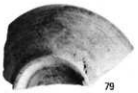
74

75

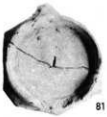
76

77

78


79

80


81

82

83

84

85

86

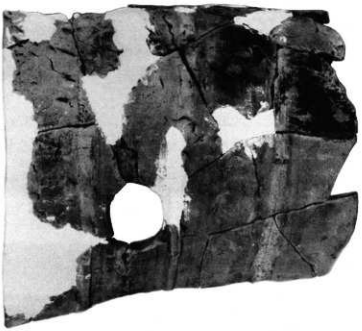
87

74～76（23－1トレSH01）　77・78（23－2トレSK02）　79～87（10トレ供養塚）

88

89

88・89（10トレ供養塚）



90

91

92

90～92（10トレ供養塚）

93

94

95

96

97

101

98

99

100

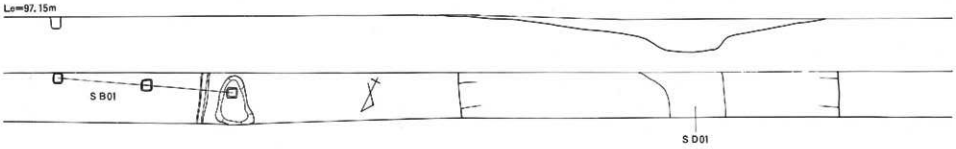
102

93～102（10トレ供養塚）

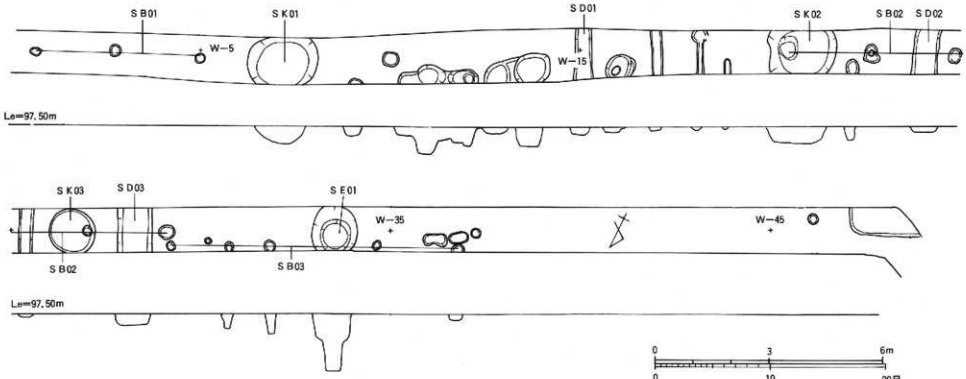
103

103

103（I－2トレSE01）

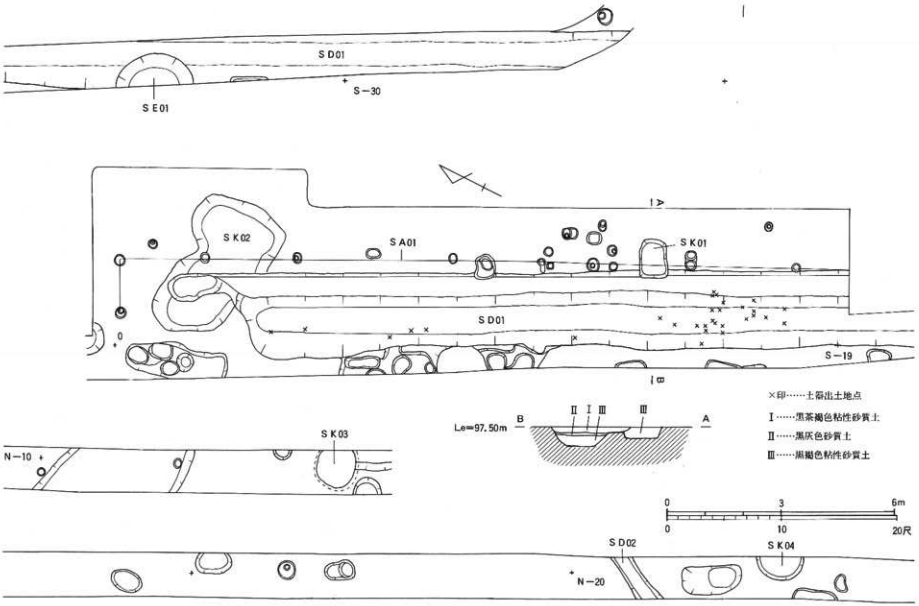


1－1トレンチ遺構実測図

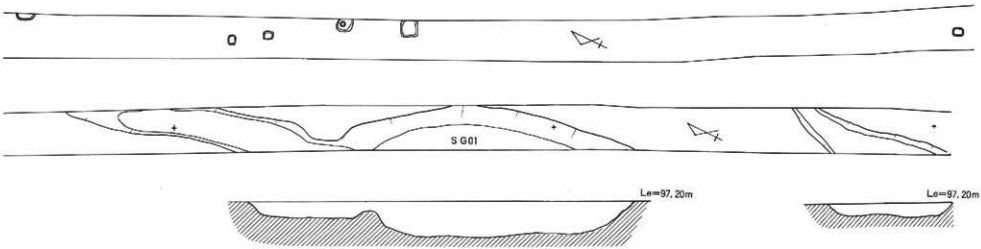


1－2トレンチ遺構実測図

図版 二一　観音堂遺跡（1トレンチ遺構実測図）



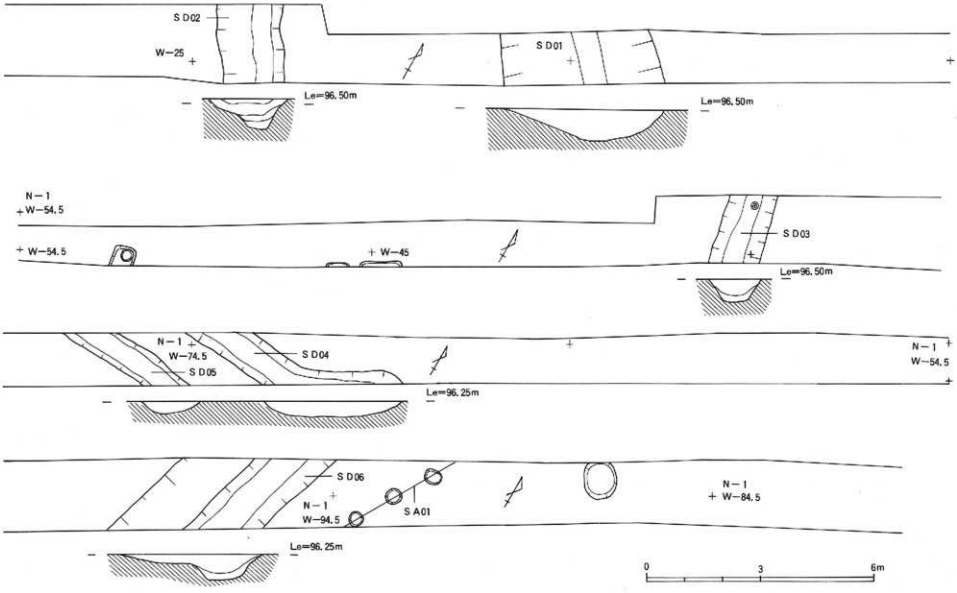
図版 三二 観音堂遺跡（2−1トレンチ遺構実測図）



2－2トレンチ遺構実測図

19トレンチ遺構実測図

図版 111　発掘調査風景（2－2トレンチ・19トレンチ遺構実測図）



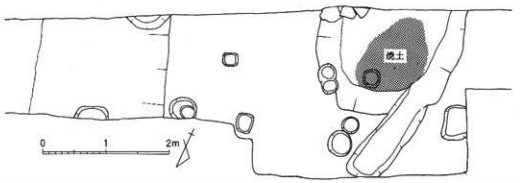
図版二四　観音堂遺跡（4トレンチ遺構実測図）

図版二五　観音堂遺跡（5トレンチ遺構実測図）

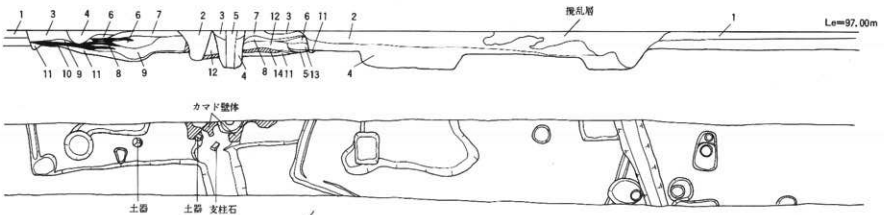
図版二六　観音堂遺跡（7―1トレンチ遺構実測図）

図版二七　観音堂遺跡（8トレンチ遺構実測図）

1……地山（茶褐色粘性砂質土）
2……黒色粘性砂質土と黄色粘土の混合土（黄色粘土少ない）
3……黒色粘性砂質土
4……黒色粘性砂質土と黄色粘土の混合土（黄色粘土多い）
5……黒灰色粘性砂質土
6……黄色粘性砂質土（ややかたい）
7……黄灰茶色粘性砂質土
8……灰色砂質土（灰層）
9……赤褐色粘性砂質土と灰色砂質土（焼土層）
10……炭
11……黒灰色粘性砂質土と黄灰茶色粘性砂質土の混合土
12……黒色粘性砂質土と黄色粘性砂質土のしま状堆積
13……灰茶色粘性砂質土
14……かたくしまった黄色粘性砂質土（カマド壁体）

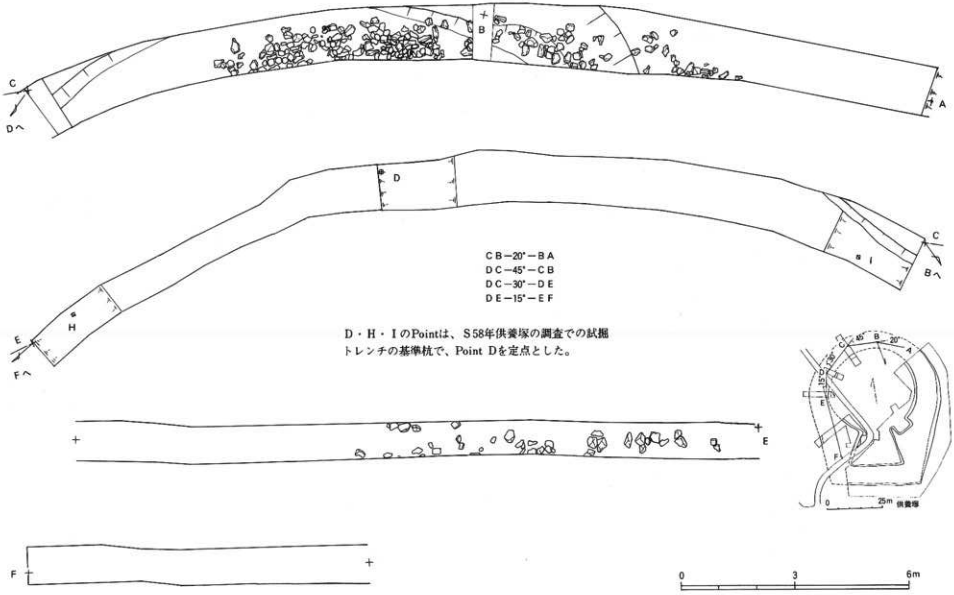


1－2トレンチＳＫ01遺構図



8トレンチＳＨ01・ＳＨ02遺構図

図版 11　遺構実測図（1－2トレンチＳＫ01・8トレンチＳＨ01・ＳＨ02遺構実測図）

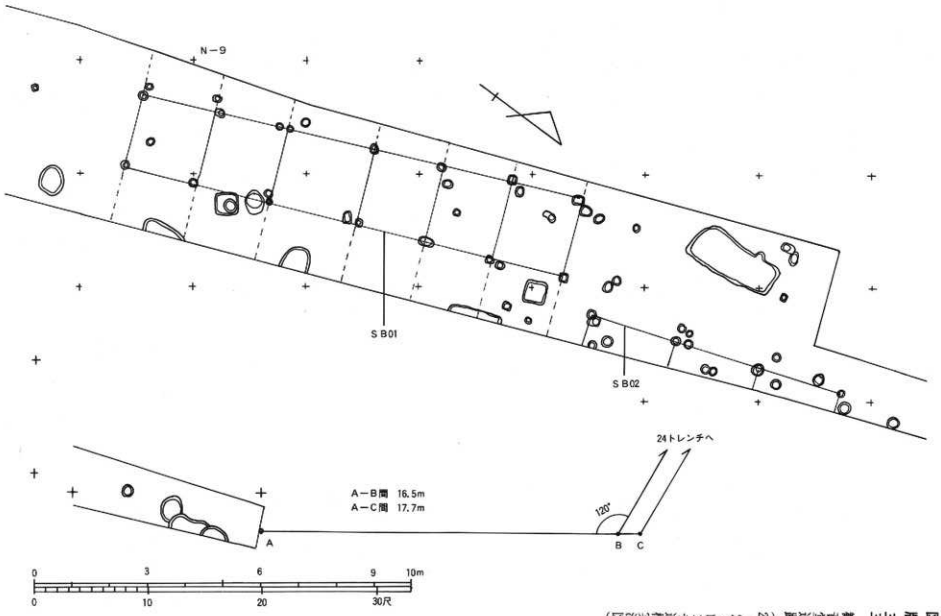


図版二九　観音堂遺跡（10トレンチ遺構実測図）

図版 三〇　観音堂遺跡（12トレンチ遺構実測図）

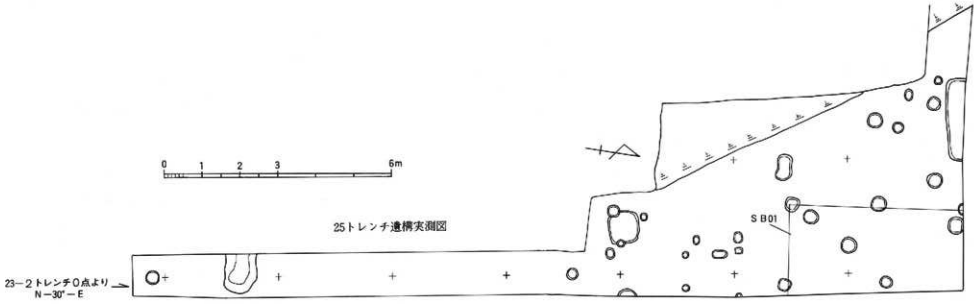
図版三一　観音堂遺跡（23―1トレンチ遺構実測図）

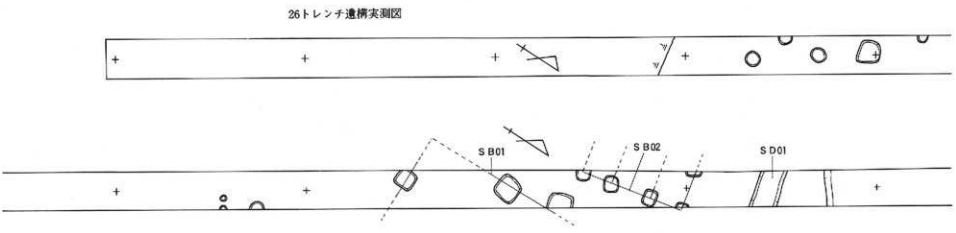
図版三二　観音堂遺跡（23－2トレンチ遺構実測図）



図版 111　調査区全景（23トレンチ全景写真図）

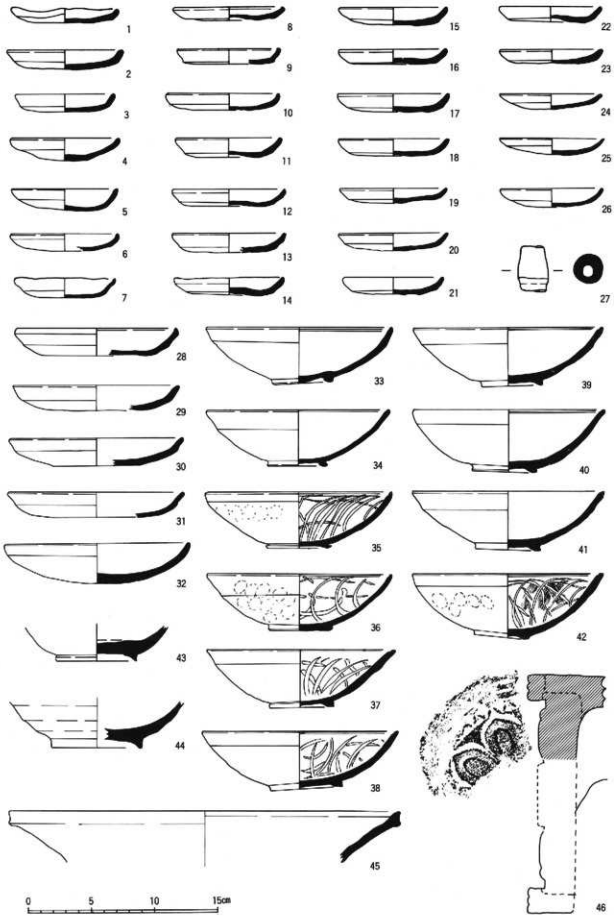
図版三四　観音堂遺跡（24トレンチ遺構実測図）



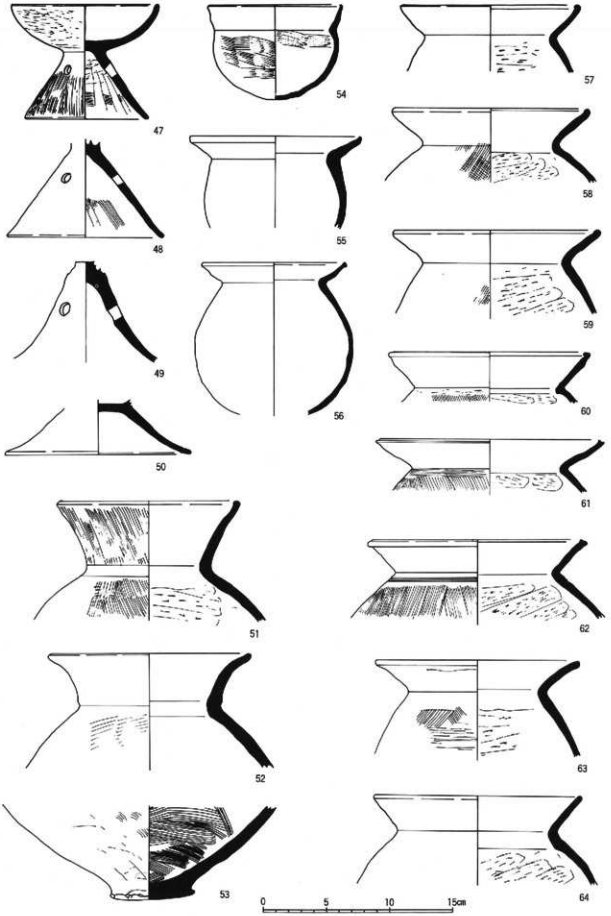


図版 111 調査区遺構実測図（23・26トレンチ遺構実測図）

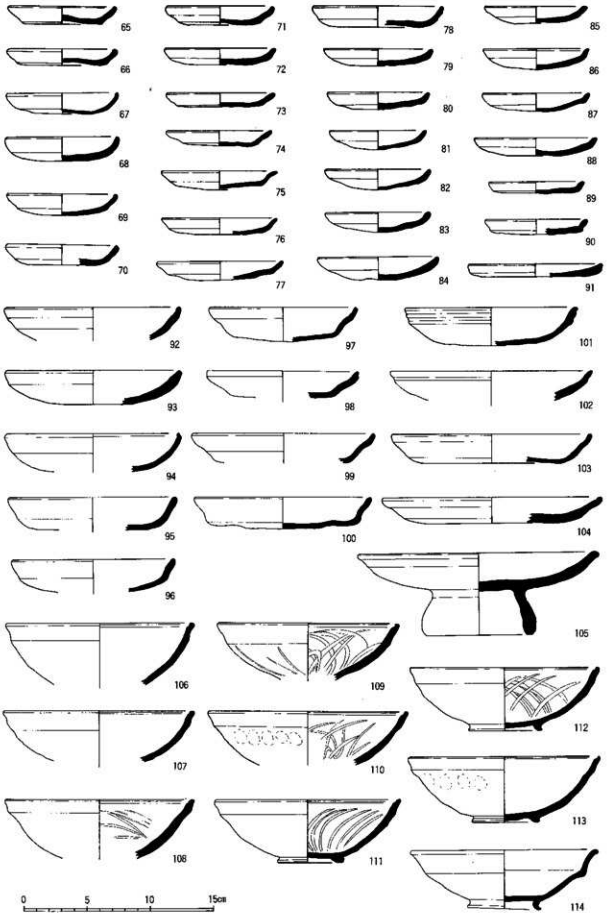
図版三六　観音堂遺跡（2―1トレンチSD01出土遺物実測図）

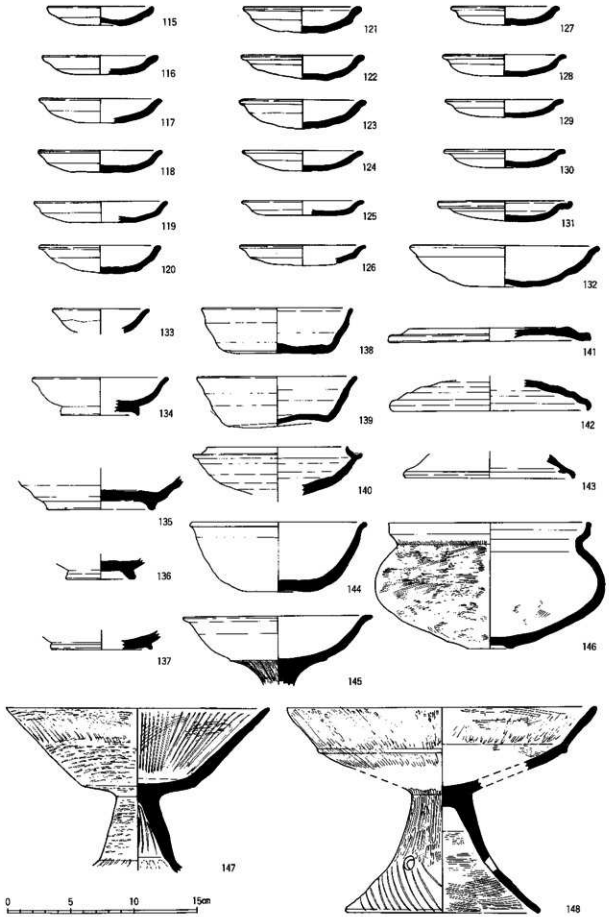


図版三七　観音堂遺跡（8トレンチSK02出土遺物実測図）

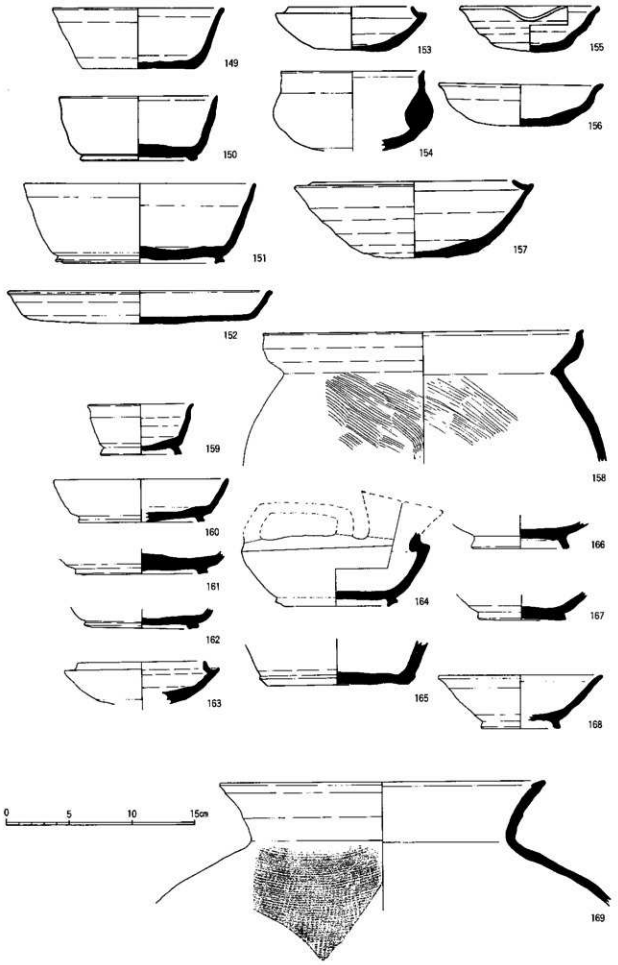


図版三八　観音堂遺跡（12トレンチ出土遺物実測図）

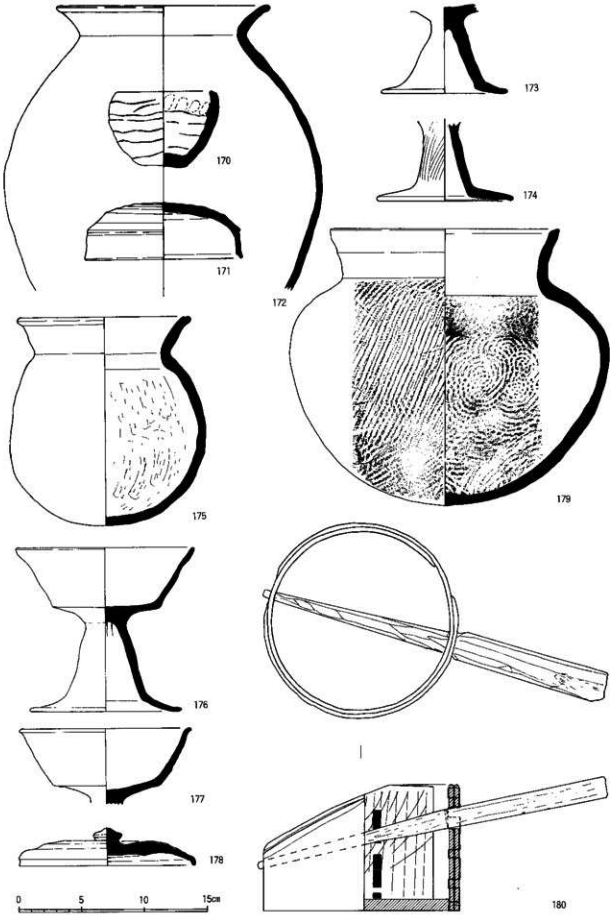




115～132（S E01），133～137（南側落込包含層上層），138～148（南側落込包含層下層）



149（5トレSD03），150・151（5トレ），152（7－1トレ），153・154（8トレ），155・156（8トレSH02），157（8トレSH03），158（8トレSH01）



170～172（23－1トレSH01），173・174（23－2トレSK01），175・176（23－2トレ），177・178（24トレ），179（25トレ），180（2－1トレSE01）

図版四二　観音堂遺跡（10トレンチ供養塚遺物実測図）

図版四三　観音堂遺跡（10トレンチ供養塚遺物実測図）

図版四四　観音堂遺跡（10トレンチ供養塚遺物実測図）

昭和62年3月

ほ場整備関係遺跡調査発掘報告書XIV-4

編集・発行　滋賀県教育委員会文化部文化財保護課
大津市京町四丁目1－1
電話 0775-24-1121 内線 2536

(財)滋賀県文化財保護協会
大津市瀬田南大萱町1732－2
電話 0775-48-9781

印刷・製本　有限会社　真陽社